HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	グローバル・シティ上海への中国朝鮮族の移動に関する研究 ： 「移動のなかに住まう」を実践する人々の場所からの考察
Author(s)	権, 艶美
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14413号
Issue Date	2021-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k14413
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/96769
Type	doctoral thesis
File Information	QUAN_Yanmei.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

グローバル・シティ上海への中国朝鮮族の移動に関する研究

―「移動のなかに住まう」を実践する人々の場所からの考察―

所　　属：教育学院多元文化教育論講座
指導教員：土田映子
学生番号：08125006
名　　前：権艶美

目次

目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

序章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

1.問題の所在と研究目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

2.先行研究の検討/国内移動と海外移動の限界・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

3.理論的枠組みの検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

3.1「移動のなかに住まう」朝鮮族・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

3.2 ディアスポラとグローバル・シティ論・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

4.研究方法と論文構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

第1章　　グローバル・シティとディアスポラ・マイノリティ

―上海における朝鮮族を中心に

1.はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

2.上海における朝鮮族の社会状況とインタビュー調査の概要・・・・・・・・・・・ 19

2.1 上海における朝鮮族の社会状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

2.2 インタビュー調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

3.グローバル・シティの上海と朝鮮族との関係・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

3.1 国内移動と海外移動の境界の無化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

3.2 韓国・日本の資源を利用したグローバル化の実践・・・・・・・・・・・・・・27

3.3 トランスナショナル空間としてのグローバル・シティの活用・・・・・・・・・30

3.4 グローバル・シティ上海での戸籍というシティズンシップ・・・・・・・・・・32

4.おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36

第2章　　朝鮮族社会と韓国社会のエスニック空間の形成

―上海龍柏コリアンタウンを中心に

1.はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

2.上海における朝鮮族社会の定住状況と龍柏コリアンタウンの形成・・・・・・・・ 37

2.1 上海における朝鮮族社会の定住過程及び現状・・・・・・・・・・・・・・・・37

2.2 龍柏コリアンタウンとインタビュー調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・39

2.3 朝鮮族のエスニック飲食街の変容及び紫藤路の生成・・・・・・・・・・・・・40

2.4 上海のコリアンの代表的な街―韓流によって人気となった虹泉路・・・・・・・・43

3.エスニック空間の中での朝鮮族社会と韓国人社会の民族関係・・・・・・・・・・ 45
3.1 エスニック空間の変容からみる朝鮮族と韓国人社会の民族関係・・・・・・・・・ 45
3.2 上海における朝鮮族からみる朝鮮族社会と韓国人社会の民族関係・・・・・・・・ 49
3.3 朝鮮族社会と韓国人社会の協会と「朝鮮民族まつり」・・・・・・・・・・・・・ 52
3.4 上海における朝鮮族と韓国人が交流する多様なネットワーク
―ウェブサイトと新聞での民族関係のあり様・・・・・・・・・・ 54
4.おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56

第 3 章　　上海における朝鮮族コミュニティの形成　―協会を中心に

1.はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
2.中国朝鮮族科学技術工作者協会（上海）（KCSEA（上海））・・・・・・・・・・・ 58
2.1KCSEA（上海）設立の経緯と支援状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
2.2KCSEA（上海）の学術交流活動及び学会誌から見る現況・・・・・・・・・・・ 60
2.3KCSEA（上海）の問題点と変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
2.4 現会長のインタビューから見る今後の方向性・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
3.中国朝鮮族医師連盟（CKMDA）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
3.1CKMDA 設立のきっかけ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
3.2 現在の活動及び未来の発展計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
4.上海朝鮮族女性協会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
4.1 設立の経緯、理念及び活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
4.2 張会長から見た協会の困難及び将来の展望・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
5.世界韓人貿易協会上海支部（OKTA 上海）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
5.1OKTA（上海）設立の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
5.2 韓人ネットワークの強化と OKTA（上海）で行われている経済と文化活動・・・・ 73
5.3OKTA（上海）会長のインタビューを通して・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
6.おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76

第 4 章　　上海朝鮮族コミュニティにおける文化・言語の継承
―華東朝鮮族週末学校の事例から

1.はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

2. 上海における朝鮮族コミュニティと華東朝鮮族週末学校・・・・・・・・・・・・・ 79
2.1 華東朝鮮族週末学校の設立と現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
2.2 上海における朝鮮族コミュニティの華東朝鮮族週末学校の支援状況・・・・・・ 81
3. 華東朝鮮族週末学校の調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
3.1 生徒の学習状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
3.2 教える側における民族文化の教育と認識・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
3.3 民族文化の継承についての保護者側の認識・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
4. 民族文化の継承と朝鮮語から韓国語への移行・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
5. おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98

終章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107

序章

1. 問題の所在と研究目的

中国朝鮮族は、19 世紀以降に朝鮮半島から中国へ渡った移住民で、中国で約 150 年を越える歴史を持っている。特に帝国日本の植民地であった朝鮮半島から多くの人々が中国東北地区で生活拠点を築き、中国の革命にも貢献することで、中華人民共和国の成立後、55 の少数民族の一員として認められた。その後、少数民族政策により、東北地区で延辺朝鮮族自治州を形成し、朝鮮族民族学校で民族語と中国語のバイリンガル教育を受け、民族文化を継承し、エスニック・アイデンティティを維持しながら、比較的安定し、閉鎖された集団の特徴を維持してきた。

1978 年の中国の改革開放政策と 1992 年の中韓国交樹立は、朝鮮族の再移動の契機となり、朝鮮族社会は大きな転換期を迎えた。北朝鮮や韓国と言語・文化資本を共有するディアスポラ集団である朝鮮族が、活発な海外移動と国内移動を行ったことで、中国東北部の伝統的朝鮮族コミュニティは今や空洞化したと言っても過言ではない。

具体的な朝鮮族の人口データからみると、2010 年には 183 万人といわれていた朝鮮族のうち、海外移動について韓国へ出稼ぎあるいは「帰還」した者が約 70 万人、日本語教育を外国語教育として受け、留学を主として日本へ移動した者が 5 万人～10 万人と推定される。また、国内移動も活発に行われ、青島を中心とした山東省に 20 万名、北京を中心とした環渤海経済圏 10 万名、広東省を中心とした珠三角経済圏は 10 万名、近年には上海を中心とした長三角経済圏に 10 万名など、主に韓国系企業と日系企業が集中する沿海都市と大都市への移動がみられる。

1990 年以降の上海は「浦東開発」制度実施後に中国の経済が急激に成長する中で、グローバル・シティとして台頭した。その後、1992 年の中韓国交樹立の翌年、上海はソウルとの最初の通航地になったことに加え、2000 年以降は日系企業の間で上海を中心とした第 3 次の投資ブーム[1]が起こったため、韓国系企業と日系企業が上海へ大量に進出した。それとともに、上海は中国語と朝鮮語、日本語という言語・文化資源を利用した多くの朝鮮族の新天地になった。

上海の朝鮮族は、韓国系企業や日系企業などの外国系企業の一般社員も多いが、主に貿

---

[1] 日系企業による中国への過去 2 回（第一次ブーム 1985～87、第二次ブーム 91～95）の投資ブームは、低賃金労働力を求める生産拠点を中心とした投資であった。近年、企業の研究開発業務拠点を増加させ、経済のニーズに合った情報を集める拠点が多くなってきた。

易業、観光業、製造業の 3 業種の会社の経営者としても活躍し、グローバル・シティとなった上海では、第 1 世代の朝鮮族企業家が成長している。吉林新聞の創業 25 周年の特別寄稿、「朝鮮族の実業経済が形成した産業と民族」では、上海、浙江省、蘇州など華東地区にも朝鮮族企業が 2000 社あまりあると報道された[2]。また、大学で中国人（漢民族）に韓国語を教える朝鮮族の教員、他の学校で韓国語教育を行う朝鮮族、朝鮮族の子どもに韓国語や文化芸術を週末学校で教える朝鮮族も活躍している。近年は、韓国や日本で学位を取得したのちに、国際会計士や弁護士などの専門職に就く者や、コンサルティングなどのサービス業で起業する者も多く、職業が多様化している。

朝鮮族の研究では、北京と青島に移動した朝鮮族の研究が主流であり、上海へ移動した朝鮮族の研究は極めて少ない。北京と青島は国内の大都市及び沿海都市として扱われ、朝鮮族の移動要因は、韓国系企業と日系企業への就職と捉える研究が大多数である。上海は、朝鮮族社会の中で高学歴者が最も多い都市であるため、多様な職業で、多様な移動要因が考えられる。また、グローバル・シティという上海の特徴、朝鮮族と韓国系企業との関係、上海朝鮮族と韓国、日本とのトランスナショナル関係などを中国の国内移動の枠で捉えるのには、限界がある。

朝鮮族はそもそも中国での定住民ではなく、朝鮮半島からの移住民であり、中国にも韓国にも吸収されない延辺朝鮮族自治州のコミュニティは、中国から政治的な空間を与えられて築かれたものである。改革開放に続いて国内外への移動の制限が減少するとともに、朝鮮族は国内は無論、韓国には「在外同胞法」[3]による移動、日本には留学という形で容易に移動を行った。つまり、朝鮮族の上海への移動は単なる地方から大都市への移動ではなく、国内外への移動が可能である中で、上海への移動を選んだことになる。また、朝鮮族の更なる移動の中で、延辺の伝統的コミュニティが空洞化する一方、上海という移動先でエスニック・コミュニティが再建されることにより、そこへの移動が促されていることも考えると、単なる国内移動として考えるのでは不足である。

本研究ではまずグローバル・シティ論を用いて朝鮮族が上海に移動した要因を分析し、グローバル・シティとしての上海がディアスポラ集団である朝鮮族を引きつけるメカニズ

---

[2] 世界韓人新聞　朴昌根「わが民族の進むべき道」（韓国語を筆者訳）
http://www.oktimes.co.kr/news/articleView.html?idxno=3564（アクセス日 :2017/07/31）

[3] 在外同胞法は国外に永住する韓国民や外国籍を取得している全韓国系同胞の経済力、技術力その他社会文化的影響力を韓国社会に活用することを目指した、血統主義に依拠した制度である。2007 年に、中国・旧ソ連在住の同胞に、在外国民及び「出入国管理法」第 10 条の規定による滞留資格中の在外同胞滞留資格 F-4 ビザを発行することとした制度である。

ムを明らかにする。ここでキーワードとなるのが「グローバル・シティ」と「ディアスポラ」である。世界中から資本が集中するグローバル・シティは、移民の集中地である。グローバル・シティ論は、社会学・文化人類学的には、そこに生成されるさまざまなエスニック・コミュニティを前提にするものであった。しかし、ここではグローバル・シティを単独の都市空間ではなく、東アジアという地政学的な条件と、中国の多民族国家としての面と社会主義体制の国という面が絡まり合う場所であり、越境的移動性の結節点であるという視点から捉えたい。グローバル・シティを、国境によって制限された移動の帰着点ではなく、越境移動を具現化する場として位置づけ直すのである。上海の朝鮮族は、まさにそうした越境的移動性を体現する主体として、これまでの移民・移動論ではほとんど議論されなかった「移動するディアスポラ集団」という新しい視点を提供する。

上海において中国国民としての地位を持つ朝鮮族は、単なるエスニック・マイノリティでもなく、流浪するディアスポラ集団でもない。にもかかわらず、朝鮮族の移動をめぐる研究では、中国国内の辺境から都市部への移動による伝統的なコミュニティの再編か、あるいはコリアン・ディアスポラにおける新しい生活の開拓という、いずれも朝鮮族を国家や民族から派生した存在した上での移動の経験が語られてきた。中国朝鮮族の「伝統的なコミュニティ」の歴史は長くないにもかかわらず、あたかも朝鮮族がそこに長らく定住してきた存在であるかのように捉えてきたからである。つまり、これまでの朝鮮族研究は、朝鮮族の歴史性及び移動の連続性に重点を置かず、その「移動のなかに住まう」存在としての面を十分に捉えていない。

グローバル・シティの上海における中国朝鮮族の移動と定住を考察することは、社会主義体制の中国における大都市への移動が、外国人でも少数民族でもない「移動するディアスポラ集団」としての朝鮮族の集住を通してどのようなコミュニティが形成の可能性を開くのかという洞察につながる。さらに、朝鮮族が「伝統的なコミュニティ」や韓国における従属的な位置にとどまらない関係性をどのようにして韓国及び在外コリアンとの間に切り開くのかについて考えるうえで、新しい方法論的視座を提供できると推測する。

こうした「移動のなかに住まう」中国朝鮮族のうち、上海へ移動した人々のひとつの特徴が、高学歴者が多いことであろう。ここで言う「高学歴者」とは、大学学部卒業以上の学歴を持つ人を指す。本研究ではその特徴に焦点を当てて上海朝鮮族のエスニック・コミュニティの構築を分析・考察することで朝鮮族の移動を再検討し、朝鮮族が容易に移動する理由を探求する。また、本論文では朝鮮族を「移動のなかに住まう」を実践する人々と

見なし、新たな視点からグローバル・シティ上海への中国朝鮮族の移動にかかわる問題を解明し、エスニック・マイノリティである朝鮮族にとっての移動が持つ意味を明らかにする。それらの問題群を通して、国民国家という枠組みが揺らいでいる「移民の時代」に、ナショナル枠の中での移民研究の視点では議論されてこなかった移動のありかたを再検討することを目的の一端とする。

2. 先行研究の検討/国内移動・海外移動の限界

本節では、本稿の理論的枠組みに密接に関連する先行研究を整理する。従来の朝鮮族の移動研究は国内移動を対象にしたものと海外移動を対象にしたものとに大別される。

先に、国内移動について言及する。中国の国内の沿海都市と大都市などへの国内移動に関する研究は、危機論と発展論の二つの枠組みに大別される。危機論と発展論について、黄有福[2006]は以下のように定義した。「危機論論者は、移動先にはまだ朝鮮族の民族学校がほぼない状態であるため、伝統的文化の喪失、朝鮮族村の空洞化、そして民族アイデンティティの揺らぎという民族共同体の存亡と直結する深刻な問題を指摘している。他方で近年の発展論論者は、改革解放以降、朝鮮族社会が伝統的農業経済を脱皮して都市経済へ進出し、朝鮮族の一人当たりの平均収入が増加した点を強調する観点を持っているという」［黄有福 2006：57］。

そのうちでも、民族の解体に対する危機論がかつては大勢を占めていた。代表的な危機論論者のクォン・テフォン[2007]は、朝鮮族の国内移動と韓国への移動により、農村を基盤とした朝鮮族のコミュニティは解体され、移動地で新たなコミュニティが形成されてはいるが、朝鮮族社会は人口動態においても、また社会文化的にも解体に向かう深刻な状況になっていることを指摘している。

しかし、近年では、大都市と沿海都市の移動先での民族コミュニティの再構築に注目する発展論が台頭し、主流になってきた。朴光星[2004]は、東北地区に集中していた朝鮮族が 1990 年以降はそこを離れ、大規模に沿海都市及び大都市へ移動した後も共同体が解体されず、新たな移動地でコミュニティを形成し、民族性を継承している特徴について指摘している。その後、同じく朴光星［2014］は、急速な都市化の過程で、人口の大量移動によって伝統的居住地における民族共同体の「文化危機」が懸念されていることに着目した。また、朝鮮族の国内大都市への移動についてのマクロな見地から、移動した人々は移動先において民族コミュニティを再構築し、民族アイデンティティをさまざまな形で維持・継

承しようとしていることを明らかにした。朴が移動先における中国朝鮮族のコミュニティの諸特徴を述べたことで、朝鮮族コミュニティの研究は比較的体系化された。

また、佐々木衛［2007］は、「第二の延辺」とも言われるほどの青島への朝鮮族の移動を、人類学的視点からネットワーク論を駆使して分析している。南玉瓊［2016］は佐々木の解釈を基盤に置きながら、新たな大都市、たとえば深センへ流入した朝鮮族の二つの協会の考察を通して、朝鮮族コミュニティが新たな地で再構築されていることを明らかにしている。

本研究に関心対象が一番近い先行研究としては、花井みわ［2014］の「上海における朝鮮族の仕事・生活と民族文化継承」がある。これは、上海での朝鮮族の仕事、生活及び民族教育の全体像を描く、貴重な論考である。花井は、朝鮮族に高い教育を受けた人が多いことと韓国系企業への就職が容易であることを上海への移動を促す大きな要因としてとらえている。また、上海における朝鮮族のコミュニティの形成と民族文化継承を、教育の視点から考察し、特に朝鮮語は朝鮮族の民族文化継承の核心的な部分であると主張した。花井は朝鮮族を中国の少数民族とみなし、延辺を定住地と想定し、農村あるいは地方から大都市への移動は、一般のマジョリティと同じく、高い教育によって実現している論じた。

花井のこの枠組みでは、いくつかの質問に答えることができない。大多数の朝鮮族の上海への移動は韓国系企業と大きく関わっているが、朝鮮族が中国人の少数民族なのであれば、なぜ外国人である韓国人と共同で龍柏コリアンタウンに住むのか、なぜ一般の少数民族とは違い、朝鮮族は上海でコミュニティを形成できるのか、あるいはなぜ国内移動なのに必要であるのかといった疑問である。言い換えれば、韓国人が中国の上海で龍柏コリアンタウンというエスニック・コミュニティを形成するのは当然かもしれないが、中国人である朝鮮族に、なぜエスニックコミュニティが必要なのか、それは韓国人社会とどのような関係があるのかなどの一連の疑問が説明できないのである。

花井の上記のまた、本研究と同じ上海朝鮮族週末学校（華東朝鮮族週末学校の前身）を研究対象として取り上げている。筆者が調査しに行った時、週末学校は朝鮮語よりも明確に韓国語教育を強調し、「中国語式の韓国語」「延辺式の朝鮮語」を拒否していた。そのことにも、朝鮮族社会と韓国人社会・韓国との関係が反映されているが、その関係について論じなくては、上海朝鮮族のコミュニティの形成及び民族文化継承について、説明できない点があまりにも多い。こうした疑問は、朝鮮族を中国の少数民族の枠ではなく、韓国の本土を離れたディアスポラとして位置づけ直すことにより明らかになると考えられる。

このように国内移動では、危機論と発展論はどちらも、朝鮮族を単なる農村から都市へ移動した出稼ぎ労働者とみなしてきた、定住を前提とした発展論は、少数民族であれば移動先の沿海都市や大都市で当たり前のようにエスニック・コミュニティを再構築できると論じてきた。

しかしながら、そうした発展論も危機論と同じ限界を引きずっている。その両者ともに、特定の地域的空間への定着のみを朝鮮族の存続の条件としているが、ディアスポラを経験した朝鮮族にとっては、定住と移動は連続しており、伝統的朝鮮族コミュニティからの移動は仮住まいの故郷から、新たな土地への移動にすぎない。しかし、移動先の都市の経済・社会・文化的環境が異なるので、それぞれの都市へ向かう朝鮮族の社会的地位や移動も変わることになるにもかかわらず、朝鮮族と特定の都市との関係について考察した研究は、花井みわのものを除いては見当たらない。

次は、朝鮮族の海外移動に扱った研究について言及する。海外移動に関しては、韓国または、日本への移動に関する研究が主流である。韓国への移動については朝鮮族労働者と韓国の訪問就業制に注目した研究として、鄭雅英[2008]、蔡春花[2012]、李雪蓮ら[2018]などがあげられる。

また、朴光星[2008]は、朝鮮族の家族は国をまたがる移動と社会変化によって、「超国家的生活世界」を形成し、分散居住をしている状況ではあるが、家族関係を含めて経済活動や共同体は断絶せず、朝鮮族社会は既存の地域を基礎とした民族社会から脱地域的にネットワーク化した民族社会へと変化していると述べている。このような観点の研究は、他に朴光星［2010］、権香淑［2011］、宮島美花［2017］などがある。例えば、権香淑［2011］は、日本へ移動した朝鮮族を研究対象とし、彼らの「生きるための工夫」を「エスニック・マイノリティの自己統治」という概念を取り入れて解釈し、その権の概念を続いた、宮島美花［2017］は、移民の社会保障の視点から、国境を越えて移動先を自ら選び取ることを「生きるための工夫」として提示した。

上記の研究は、トランスナショナル・ネットワーク論で朝鮮族の海外移動を説明する点で共通点しており、これは本稿においてもディアスポラである朝鮮族の移動を検討する際に、欠かせない視点として継承している。しかし、これらの先行研究で用いられている、中国、日本、韓国のそれぞれにおける朝鮮族という問題の切り分け方はやはり、国内移動と海外移動という枠組み内で朝鮮族の移動を検討していることを示す。それは、朝鮮族を中国人とみなし、一般的な移民として管理される対象として扱い、移住国と本国との移動

をトランスナショナル移動の枠組みで検討しているためである。

朝鮮族の国内移動と海外移動をまとめてみると、従来の研究では、朝鮮族が中国人及び中国の少数民族であることを前提として彼らの移動を検討してきた。しかし、朝鮮族はそもそも中国の定住民ではなく、20 世紀に朝鮮半島からの移住民としてやって来たディアスポラを経験した人々である。つまり、彼らの移動を定住国の中国を基準とした国内移動と海外移動の枠組みで見るのはふさわしくない。歴史性を持っている彼らの移動は、近代朝鮮半島から始まり、その移動が未だに連続していると考えるのが妥当である。

また、朝鮮族の海外への移動地と国内移動地への移動要因からも、彼らのディアスポラとしての特徴がみられる。朝鮮族の海外移動は後進国から先進国への労働力移動というより、故国への帰還及び歴史的つながりがある日本への移動である。また、国内移動では、韓国系企業と日系企業が多い沿海都市と大都市への言語・文化資本を利用した移動が主である。つまり、ディアスポラである朝鮮族は更なる移動の中でも、中国や韓国及び日本などと複数の社会関係を維持しており、中日韓の中の移動をそれぞれに断絶した場と見てはいない。彼らはトランスナショナルな実践をしているため、国内移動と海外移動の枠組みでは、ダイナミズムに富む朝鮮族の移動を十全に捉えることはできない。つまり、朝鮮族の移動は単なるナショナルな枠の中に回収できず、ディアスポラ集団の移動には明瞭な始まりと終わりがない。

そのため、ディアスポラの移動を、国内移動と海外移動とに分けたとしても、どこが国内でどこが海外かが曖昧である。ディアスポラである朝鮮族の移動を検討するのには、彼を「移動のなかに住まう」人々とみなすと同時に、上海のような都市についてはグローバル・シティ論を提示する必要がある。グローバル・シティはディアスポラの重要な到達点であり、グローバル化によって世界経済の一体化が進む時代にあっては、国内外の区別の重要性が低いグローバル・シティという場を通して、朝鮮族の移動のあり方を考察することができるからである。さらに、従来の移民移動論で、国境の枠の中で議論されてこなかった移動の複雑な位相についても明らかにできると考えられる。

3. 理論的枠組みの検討

3.1「移動のなかに住まう」朝鮮族

ここではまず、伊豫谷登士翁が提示した「移動のなかに住まう」人々という概念について説明し、それが朝鮮族の移動を研究する上で持つ意義を考察する。

既存の移民・移動論では、人の移動を、定住を前提として検討するのが一般的である。つまり、移民現象をナショナルな枠の中でとらえ、国家という受け入れ側の政策から管理される対象として捉え、国民を自然視し、移民を不自然な存在として扱っている。それは、従来の移民・移動論が、国民国家の形成と深く関わるものとして、定住を正常と想定し、国民と移民の定住地を固定的にみなすことで、移動を正常からの逸脱と捉えるからである。

こうした従来の研究方法を批判し、伊豫谷登士翁[2007]は「近年、このように定住を前提に人の移動を捉えるのではなく、移動から定住を捉える人の移動のアプローチが移住・移動論にも及んでいる」[伊豫谷登士翁 2007：4]と述べ、「移動から場所を問う」という方法論を提出した。つまり、一般の移動論では、移住先＝故郷＝戻るべき場とみなし、場所を固定化するという観点から移動を捉えているが、伊豫谷登士翁は「そこから離れて生活をするようになるにしたがって、「故郷（古里）」が創られ、「母国」が生まれるには、ある種の作為が介入する」[伊豫谷登士翁 2014：14]と反論し、移動があるこそ、故郷と母国が創造されたと指摘した。

また、伊豫谷登士翁は「人の移動にかかわる研究が目指すのは、ナショナルな物語、ナショナルな空間を所与としてきた分析枠組みから開放された研究領域」[伊豫谷登士翁 2014 :322]要だと述べる。国民国家の形成過程は国境という境界を中心とした近代の移動と深く関わり、国内移動と国境を越える移動は厳密に区別され、その中でも、国境を越える移動は特別な移動として捉えることが前提されてきた。しかし、伊豫谷登士翁は「いま移動があらためて問われるのかというと、現代における人の移動が、国民国家という体制、植民地主義と呼ばれてきた体制の、解体あるいは変容を直截に移す鏡のひとつと考えられるからである」[伊豫谷登士翁 2014：7]と強調した。つまり、現代の移動は定住と境界が曖昧になり、単なるナショナルな枠に一元的に回収できず、送り出し地域と受け入れ地域を分断あるいは隔離する考え方では説明できないと指摘した。

伊豫谷登士翁はさらに「ノマドやディアスポラといった語の流用は、定住と移動との境界を壊す一つの試みであったかもしれない」[伊豫谷登士翁 2014：7]と述べた。ナショナルな枠組みの中では、単なる移民及び外国人労働者としてみなされてきた人々について、伊豫谷登士翁は「植民地主義の時代の人の移動と外国人労働者として取り上げられた時代とを連接し、植民論と移民研究あるいは外国人労働者論との断絶とズレあるいは亀裂を埋めるための作業であり、そうすることを通じて、移動を逸脱と捉えてきた近代的な知のあり方を問い直したいと考えるからである」[伊豫谷登士翁 2014：20]と主張した。

つまり、彼らの移動を考える時、定住国から祖国や本国への帰還、また定住国の中での国内移動は、そもそも故郷ではない移動先から他の土地への移動に過ぎなかった。しかし移動が一回性のものではなく、幾度となく移動を繰り返すディアスポラの場合、彼らの移動の連続性と恒常的な進行性に着目する必要がある。

このように、定住と移動が曖昧になり、故郷は失われ、当然あるべきものと考えられてきた＜居場所＞がない時代になったことで、伊豫谷登士翁[2014]は「場という感覚が失われているだけでなく、移動という感覚そのものが変容してきているのである」[伊豫谷登士翁 2014：304]と述べた。伊豫谷登士翁は居場所をなくした「移動する人の」視点に立ち、彼らを「移動のなかに住まう」人々と表現しようと試みたのである。

本稿は、伊豫谷登士翁の視点を導入することで従来の移民・移動論がもつ限界を乗り越えようと試みる。研究対象の中国朝鮮族は中国の少数民族でありながら、720 万人のコリアン・ディアスポラの在外同胞の一員でもある。彼らは国境を越えて複数の生活拠点を持ち、ネットワークを構築し、二つの国にまたがる帰属意識を持っていながら、トランスナショナルな生活空間を形成している。このように、彼らの移動は単なるナショナルな枠の中に回収できず、移動が常態化し、定住が暗黙の前提で想定される従来の移民移動論では説明できないため、伊豫谷登士翁の視点は本研究において有効なものと判断できる。

一般的な移民にとって、居住すべき場と戻るべき場は故郷であるのが当然であると想定されるが、今日の朝鮮族のようなディアスポラ集団の移動には明瞭な始まりと終わりがなく、定住すべき場と戻るべき場が曖昧である。従って、彼らの移動は東北地方という定住地からではなく、より長く広い歴史的な時空間の中で検討する必要がある。時間的には朝鮮族の移動の歴史的連続性を考慮し、空間的には国内と海外という枠から脱し、その国境の境界線が曖昧になっていることを念頭に置かなければならない。つまり、朝鮮族の移動を国内移動と海外移動に分けることには大きな意味はなく、それは時間的空間的な歴史性から見れば単なる選択地の違いに過ぎない。

このような朝鮮族の移動について、朝鮮族研究の中で「再移動」と表現した権香淑[2019]の研究がある。権香淑は「植民地支配、冷戦と分断体制といった構造的暴力の諸問題が、現在もなお進行形のまま、人々の記憶の澱となって顕在化している現実を無視できない」[権香淑 2019：333]とし、歴史的な要素を視野に入れている。また、日本へ移動し、定住した朝鮮族の最新の研究成果の中では、「ある「場所」に対する永続的定着というよりは、「移動する文化」を基底にした「拠点」の形成とでもいうべき態様、すなわち、「拠点形

成としての定住化」と呼びうるものである」との指摘がある[権香淑・宮島美花 2020 :233]。権香淑・宮島美花は、朝鮮族は移動先へ定住したとしても、そこを唯一の選択だと思わず、単なる一つの拠点として捉えるという朝鮮族社会の現象について提示した。しかし、これらの研究も朝鮮族の移住は定住を前提として捉えられ、それはあくまでも、ある定住状態から別の定住状態への移行過程に過ぎないとしている。

実は、朝鮮族が「祖国」や「故郷」へ帰還したとしても、彼らのエスニシティと帰属意識という問題によって、「帰ってきたのは誰か」という疑問を突きつけられるのが常である。羅京洙[2014]はコリアン・ディアスポラのアイデンティティについて、「さまざまな移動の経験から形成された彼らの自己アイデンティティは非常に複合的なものである」[羅京洙 2014：69]と指摘した。ディアスポラを経験した朝鮮族にとって、生まれた土地への愛着心及び故郷意識、または母国への帰還及び帰郷などがアイデンティティを構築したというより、移動による共通の記憶と経験が朝鮮族という集団を形成したと言っても過言ではない。そのため、朝鮮族は「再移動」するというよりも、国内外の移動先で新しい故郷を創り、その新しい故郷も一つの拠点に過ぎないという、「移動のなかに住まう」人々として捉えるのが妥当であろう。

3.2 ディアスポラとグローバル・シティ論

以下では、サスキア・サッセンによるグローバル・シティ論、柄谷利恵子による移動とシティズンシップの関係についての議論、イエン・アングによるグローバル・シティとディアスポラ集団との関係についての議論を挙げ、それぞれ朝鮮族の移動研究に示唆するものを述べる

グローバル・シティという概念は、社会学者のサスキア・サッセンが「1984 年に使い始めたもので、グローバル化現象を分析するための枠組みの一つである」[サッセン 2008：X]。サッセンは、グローバル・シティとはグローバル化が進む世界において、世界経済の骨組みが作られ、トランスナショナル・ネットワークの中に位置し、資源と情報が大量に集積する都市であると定義した。

そのような都市には資本が集結するとともに、グローバルなネットワークを構成する高次の専門職従事層に加え、製造業とサービス業を主とした低賃金労働者としての移民も必要になってくる。そうしたグローバル・シティの労働市場の二重構造により、グローバル化と所得階層の二極分化はコインの裏と表のように併存する。サッセンは先進国のグロー

バル・シティを対象に、移民を低賃金労働者として位置づけ、賃金、所得などによる住民の二極分化現象を捉えた。

ところが上海は、サッセンが考えたグローバル・シティとは事情が多少異なっている。中国では改革開放以後になると、従来の都市・農村部の二重構造に代わり、農村から都市へ出稼ぎ者が大量に進出したことにより、都市において戸籍制度に基づく新たな二重構造が形成された。ところが、中国の戸籍制度は戸籍を農村戸籍と非農村戸籍（都市戸籍）に分けることで農村から都市への移動を制限する人口管理制度であり、社会福祉機能などに直接関係し、子供の教育、年金、住宅、医療など生活全般に関わっている。したがって、農村から都市、都市から大都市、大都市から超大都市への戸籍移動は容易ではなく、「北上広深」[4]のような超大都市[5]の中でも、とりわけ北京と上海の戸籍の取得がきわめて難しい状況である。そのため、東京やソウルなどとは大きく異なり、戸籍問題こそが、中国のグローバル・シティにおける住民二極分化の主たる要因なのである。

特に、上海では戸籍取得方法にポイント制度が導入され、上海市の都市建設に有用な人材及びグローバル人材を積極的に受け入れることが目標とされている。上海に移動して戸籍を取得しようとすることには、国内移動であるにも関わらず、韓国と日本で永住権あるいは国籍を取得するよりも困難な点が多くあるため、シティズンシップの問題として捉える必要がある。柄谷利恵子[2016]は「今日の移動性こそが、シティズンシップの変容を不可避にしている」［柄谷利恵子 2016：8]と指摘した。また、「移動性の能力には二種類があり、第一が移動を実行する能力であり、第二は、移動がもたらす様々な要因や変化を受容し、それを自らの安全な生活に寄与するように適応していく能力である」［柄谷利恵子 2016：35]と分類した。戸籍とシティズンシップの取得の問題は、柄谷利恵子の述べる「安全な生活」に直結するものであろう。

柄谷利恵子は移動性の実行能力・移動性の適応能力からみた分類の中で、移動した人々を 4 種類に分けた。①実行能力と適応能力が高い人は「移動性の主人」つまりグローバル・エリート、②両方とも低い人は「移動性の従僕」としての移住者一般・難民であり、③移動性が低く、安全性が高い方のシティズンシップ保有者、④移動性も低く安全性も低い「移動性の落伍者」である国内で周辺化された人々である。その中で、「グローバル・エリー

4　北京、上海、広州、深センの略称である。

5　中国での都市は人口により、「小都市」が 50 万人以下、「中都市」が 50 万人～100 万人、「大都市」が 100 万人～500 万人、「特大都市」が 500 万～1000 万人、「超大都市」が 1000 万超となっており、北京、上海、広州、深センの 4 都市が「超大都市」である。

ト」と呼ばれる一部の専門職や技術者などは、高い賃金や高い生活水準を求めて、あたかも国境が存在していないように移動している」［柄谷利恵子 2016：27］。一方、「移動性の従僕」としての移住者一般・難民にとっては、移動したとしても、シティズン - 移動 - 不安全という状況に置かれてしまう可能性が高いという［柄谷利恵子 2016：38］。

柄谷利恵子はまた、移動する個人に焦点を当て、「移動性の主人」、「移動性の従僕」、「移動性の落伍者」がそれぞれ、シティズンシップ - 定住 - 安全の紐帯のほころびを前にどのように行動しているかを取り上げた［柄谷利恵子 2016：9］。このような移動する人の分類は、エリートが多い朝鮮族がグローバル・シティ上海に暮らす朝鮮族の二極分化現象を分析するのに適している。

前述のサッセンの議論は主に経済的視点から、グローバル・シティと移民の関係を資本と労働力の関係として捉え、国際労働力移動という視点を提示したことに大きな意義がある。しかし、それは移民を単なる労働力とみなすにとどまり、マイノリティの言語・習慣を含めた文化的差異を考慮しておらず、移民のトランスナショナルな側面を無視している点に問題がある。

それに対し、イエン・アングは、そうしたサッセンの視点を踏まえつつも、一般の移民よりも多様な文化を持つディアスポラとグローバル・シティとの関係について、文化や社会的側面に光をあてて論じている。グローバル・シティはトランスナショナルな関係を保っているディアスポラ集団の越境活動によって維持され、ディアスポラ集団はそのグローバル・シティの中に包摂された存在であると強調している。

しかし、イエン・アングはディアスポラ集団をグローバル・シティの中の存在として扱いながらも、ディアスポラ集団がどのような要因でグローバル・シティへ移動したのかという側面については議論を展開していない。言い換えれば、なぜディアスポラ集団がグローバル・シティを目指し、そこでどのような関係を構築したり、解消したりするのかを洞察する視点が含まれていないために、グローバル・シティ上海とディアスポラ集団としての朝鮮族の関係性を、マイノリティの越境を越える移動という広い視点から把握するに至っていないのである。

そこで本稿においては、サッセンのグローバル・シティ論並びに、柄谷利恵子、アングの理論を基盤にして、上海で新たな生活空間を構築する朝鮮族を、大都市における地方民やマイノリティとしてではなく、幾重にも重なる移動経験を有するディアスポラ集団としてグローバル・シティとの関係性のなかに位置付け、その移動の意味を把握する。

4. 本研究の研究方法と論文の構成

上記の問題設定に基づき、先行研究や関連文献の検討に加え、半構造化インタビュー調査、各種統計（上海での民族統計、朝鮮族の人口統計）調査、新聞記事、参与観察を併用した研究調査を行った。

上海での調査は、2013 年～2019 年にかけて筆者が 6 回を上海に行き、73 人の朝鮮族と 2 人の韓国人を対象に質的調査を行った。第 1 回調査は、2013 年 8 月 23 日～9 月 27 日（計 36 日間）までに行い、計 25 人の韓国系企業の朝鮮族社員を対象として、調査対象の年齢・結婚歴・韓国系企業での職歴・現在の企業での職種といった情報を基本として、朝鮮族と韓国系企業の関係、韓国人との関係、アイデンティティなどを考察した。

第 2 回調査は、筆者は 2016 年 9 月 1 日～2017 年 3 月 31 日、龍柏コリアンタウンに 4 ヶ月住み、もう一箇所は、九亭という朝鮮族の新たな集中区で、3 ヶ月住み、、7 ヶ月をかけて、34 人の朝鮮族に半構造化インタビューを行った。二箇所に住んだその理由は、龍柏コリアンタウンと新たな朝鮮族の集中区の相違を調査するためである。部屋は、現地の朝鮮族と同じく、「シャンハイタン」というサイトを利用して探した。その中の「朝鮮族のルームメイトを探す」という記事を見て部屋を借りた。

上海への滞在期間には、上海市図書館で、各種統計（上海での民族統計、朝鮮族の人口統計）調査、新聞記事を収集した。また、華東朝鮮族週末学校の校長と連絡を取り、校長と教員の許可を得て、教室を訪ねて参与観察を行った。筆者は、2016 年 10 月 4 日～11 月 20 日まで、上海における艺成国学教室（上海松江区九亭镇涞坊路 1010 弄 203 教室）と新乐坊教室（上海闵行区合川路 2928 号 A 幢 3 楼）で、4 つのクラスの授業に参与した。時間は毎週土曜日、一回に二つのクラスで、4 週連続で参加した。また、華東朝鮮族週末学校の支援団体の会長、校長、3 人の教員に対して、2 時間の半構造インタビューを行った。さらに、休憩室で子どもたちを待っていた保護者計 12 人の中で、保護者 2 人にそれぞれ約 2 時間の半構造化インタビューを行った。また、校長は中国朝鮮族科技工作者協会（上海）での前会長であったので、現会長と他の協会の会長を紹介してくれた。

その後、上海に滞在していた期間に作ったネットワークに基づいて、第 3 回調査では、2017 年 12 月 28 日～2018 年 1 月 9 日に「中国朝鮮族科学技術工作者協会（上海）」「上海朝鮮族女性協会」について、それぞれの会長を含む 5 人に半構造化インタビュー調査を行った。第 4 回調査では、2018 年 4 月 10 日～4 月 20 日、第 6 回調査では 2019 年 4 月 10 日にそれぞれに第 11 回と第 12 回「中国朝鮮族科学技術工作者協会（上海）」「中国朝鮮

族医師連盟」の成立に招待され、上海で参加し、参与観察を行った。その会場で、「世界韓人貿易協会上海支部」の会長を知り、第5回調査では、2018年12月26日～2019年1月10日の調査期間で、「世界韓人貿易協会上海支部」の事務室で、会長を含め6人を対象に半構造化インタビュー調査を行った。第7回では、2019年10月1日～11月1日にインタビュー対象者の内の5人には電話で連絡し、その人たちの上海戸籍関連の調査を行った。

インタビュー調査を行う前に、調査対象者には、上海における朝鮮族に関する博士論文を作成するために調査を行っていることを伝えた。調査の意図について調査対象者に十分に説明し、ICレコーダーで録音する許可を得て、調査を行った。また、調査対象者とのネットワーキングづくりを重視し、長期間信頼関係を築いた上で調査を行った、調査後にも調査者と連絡を取り、上海朝鮮族社会の変化について検討したことも少なくなかった。

また、インタビューの時間は1時間～2時間半が目安であり、言語は中国語と朝鮮語及び韓国語である。論文の中では、調査内容を筆者が日本語に訳したものである。本人の語りをそのまま記述する場合は「」に入れた。なお、調査対象者の属性及び実地調査の時間などに関する具体的な情報は各章で述べる。

この論文は2部に分けて構成されている。第1部は第1章と第2章で構成され、それぞれ9人と10人調査対象者に半構造化インタビューを行った結果を中心としている。第2部は第3章と第4章で構成され、4つの朝鮮族協会と華東朝鮮族週末学校に、参与観察を中心で、半構造化インタビュー調査を併用した。

以下では、本論の構成について簡単に確認しておきたい。

第1章では、上海をグローバル・シティという特殊な都市空間として捉えた上で、ディアスポラを経験したエスニック・マイノリティである朝鮮族の移動要因を考察する。彼らの移動は国内移動と海外移動という枠組みではなく、グローバル・シティと朝鮮族の関係性の中で促されていることを論ずる。

第2章では、上海龍柏コリアンタウンに焦点を当て、朝鮮族社会と韓国人社会の民族関係の中で形成されたエスニック空間について述べる。そして、そのようなエスニック空間が上海における朝鮮族コミュニティの再建に及ぼした影響についても論ずる。

第3章では、上海における朝鮮族社会の中で、特に影響力がある4つの協会を通して朝鮮族コミュニティの形成とそのプロセスを検討し、それらがホスト社会における朝鮮族のアイデンティティ形成に果たす機能を論ずる。

第 4 章では、上海で朝鮮族コミュニティを維持するために、朝鮮族が次世代教育を重要視していることを示す。ここで取り上げる華東朝鮮族週末学校がその重要な事例である。文化継承の一環として行われる言語教育の現状を分析し、上海における朝鮮族コミュニティの形成と維持について論ずる。

終章では、各章で得られた知見をまとめ、「移動のなかに住まう」朝鮮族のグローバル・シティへの移動を通して、朝鮮族の移動のありかたを再検討する。また、移民移動論に対していかなる理論的貢献をなし得るかについて言及し、結論を結ぶ。

第1章　グローバル・シティとディアスポラ・マイノリティ
―上海における朝鮮族を中心に

1. はじめに

本章では、上海をグローバル・シティという特殊な都市空間として捉えた上で、ディアスポラを経験したエスニック・マイノリティである朝鮮族が、なぜ上海へ移動し、時にはそこから再移動を余儀なくされたりするのか、その要因を考察する。言い換えれば、本章の目的は、グローバル・シティとしての上海がディアスポラ集団である朝鮮族を引きつけたり押し出したりするメカニズムを明らかにすることである。

朝鮮族がどのような重層的要因によって上海へ移動したかを明らかにするため、上海へ移住した数多くの朝鮮族のインタビュー調査を実施した。本章では特に朝鮮族と上海を結びつける諸要素について明らかにするべく、グローバル・シティとディアスポラ・マイノリティという側面から、9人のインタビュー結果に絞って分析する。その結果を①国内移動と海外移動の境界の無化、②韓国・日本の資源を利用したグローバル化の実践、③トランスナショナルな空間としてのグローバル・シティの活用、④グローバル・シティ上海での戸籍というシティズンシップという4つの視点に基づいて分析・考察する。

2. 上海における朝鮮族の社会状況とインタビュー調査の概要

本節では、先ず上海における朝鮮族の年齢構成や学歴などの社会状況を提示した上で、9人のインタビュー対象者の上海の朝鮮族全体の中での位置づけを明らかにしておきたい。

2.1 上海における朝鮮族の社会状況

上海における朝鮮族の社会状況を確認するため、まず上海における少数民族全般の状況を概観し、次に全国の朝鮮族および、上海の少数民族の学歴と業種とに照らして上海朝鮮族の特徴をさらに明確にする[6]。

まず、少数民族を含めた上海市の人口状況について述べる。上海はグローバル・シティとして、国内外からの人々を引きつけ、国際性を高めている。2010年上海の総人口2200万人のうち、20万人以上の外国人の中では、日米韓の出身者が割合の上位3位までを占

[6] 上海における朝鮮族の年齢及び学歴のデータは『上海市2010年人口普査資料』全4冊を参考にした。

めた。外来人口は900万人[7]で、上海市総人口の約40%に上がった。

多くの少数民族が外来人口であるが、1990年から少数民族が急増し、2010年には27.56万人になった。その中で、朝鮮族は第5位の割合で、上海の少数民族人口の8.1%を占めた。上海市統計局の少数民族の人口構成概況からみると、少数民族の人口構造は総体的に若く[8]、一般の外来人口より文化程度が比較的高かった。朝鮮族の上海への移入は一般の少数民族と同じく、1990年527人から始まり、2010年には22257人へと30倍にも急増した。その原因は、1990年に始まった上海の「浦東開発」政策により、都市建設をするための人材及び労働力が必要となったことが考えられる。

次に、上海における朝鮮族の年齢構造をみると、主に20～39歳に集中し、この年代が62%を占め、40～59歳は、17%を占めた。また、0～19歳までは約16%で、60歳以上は5%しかいなかった。上海における朝鮮族は、20歳～49歳までの年齢層が72.21%を占め、若い人が大多数であることがわかる。また、上海で生まれた二世は言語教育及びアイデンティティ形成の問題があることから、後の章で取り上げる「華東朝鮮族週末学校」のような教育機構の必要性が考えられる。また、インタビュー調査からは、60歳以上の人では、上海で定年退職した朝鮮族は極めて少なく、主に孫の面倒を見るために韓国及び東北地区から年配者が上海へ移入するか、または上海で一定の経済力を持つ朝鮮族が親孝行のために移入したケースが大多数であるといった傾向がみられた。

上海朝鮮族の学歴を中国の国内の朝鮮族と上海市人口全体と比較しながら、その特徴をまとめてみる。

表1-1　　上海朝鮮族の学歴の比較

	無通学歴	小卒	中卒	高卒	短大卒	大卒	修士博士卒	**短大修博合計**	6歳以上の統計
全国朝鮮族	1.29	13.24	43.46	25.87	7.40	8.01	0.55	**15.96**	100.00
深圳朝鮮族	0.31	7.25	14.36	27.62	25.63	21.99	2.83	**50.45**	100.00
山東朝鮮族	0.83	10.35	29.87	35.83	13.15	9.32	0.65	**23.12**	100.00

7　上海市2010年人口統計の分析資料：『上海の人口発展特徴と見込み』 http://tjj.stats-sh.gov.cn/nypc/moban.asp?id=4287（アクセス日：2020/1/3）

8　若者と老人の比率：1982年/59.2、1990/52.6、2000/51.7、2010/30.0　1982年～2010年まで、徐々に若くなっていた。

北京朝鮮族	0.38	5.88	15.18	21.41	17.22	34.33	5.59	**57.14**	100.00
上海朝鮮族	0.37	5.32	11.77	24.23	19.20	35.15	3.96	**58.31**	100.00
上海市	3.15	14.13	38.06	21.84	10.04	10.87	1.91	**22.82**	100.00

筆者作成

上海は中国国内で高学歴者が集中する都市であり、短大、大卒、修士、博士の学歴を持っている人が 22.82%を占めている。それに対して上海の朝鮮族の場合には、短大以上の学歴を持つ人の割合が 58.31%と、高学歴者の比率が 2 倍以上にもなっており、しかもその内訳が学士、修士、博士などに集中している。また、中国の沿海諸都市やその他の大都市へ移動した朝鮮族の学歴を比べると、高学歴者の比率が高い順に上海（58.31%）、北京（57.14%）、深セン（50.45%）、山東（23.12%）となり、上海における朝鮮族の学歴は朝鮮族社会内で最も高い。また、上海市は様々な政策で高学歴者を吸引するため、大学以上の学歴を持っている上海朝鮮族が上海市の平均より約 3 倍に近かった。

以下の表 1-2 では、上海市に多い上位 4 位までの職業を見てみる。

表 1-2　2010 年人口センサスによる朝鮮族の上位 4 位までの職業分布表

順位	**上海市**		**北京市**		**山東省**		**深圳市**	
1	商業、サービス業人員	36.87	商業、サービス業人員	39.16	商業、サービス業人員	35.52	商業サービス業人員	35.22
2	技術者	24.89	技術者	27.70	生産・運輸設備の操作・関連人員	24.89	スタッフと関連人員	19.81
3	スタッフと関連人員	24.89	事務スタッフ	20.11	技術者	16.49	技術者	17.30
4	国家機関、党群組織、企業、事業単位責任者	12.38	国家機関、党群組織、企業、事業単位責任者	7.70	国家機関、党群組織、企業、事業単位責任者	14.49	生産・運輸設備の操作・関連人員	16.04

筆者作成

表 1-2 からは、上海市、北京市、山東省、深圳市では商業・サービス業の人口が大多数であることがわかる。これは韓国系企業及び日系企業への就職者が多いことと大きな関係がある。また、上海では技術者・スタッフと関連人員が多くなっている。また、上海に 50 年代から 80 年代まで、様々な歴史的背景及び選抜によって、朝鮮族が上海へ入ったため、国家機関、党群組織、企業、事業単位責任者も少なくなかった。

2.2 インタビュー調査の概要

本章では、そのうちで以下の 9 人のインタビュー対象者の証言を分析対象とした。これらの 9 人は上海での滞在年数が長く、上海の政策及び上海における朝鮮族社会の事情に詳しいという理由で選んだ。また、9 人全てが 1990 年以降に上海へ移動した朝鮮族で、性別の内訳は男性 6 人、女性 3 人で、最終学歴は学士、修士、博士である。表 1-3 は、インタビュー調査対象者の概要である。

表 1-3　　インタビュー調査対象者の概要

	生年	性別	学歴	出身地	結婚の有無	上海までの移動ルート	上海での居住歴
A	1965	男性	大学	延辺	既婚	吉林省から上海	21 年
B	1983	男性	大学	ハルビン	未婚	韓国から上海	10 年
C	1982	男性	大学	ハルビン	未婚	東京から上海	7 年
D	1957	男性	博士	瀋陽	既婚	東京から上海	19 年
E	1969	女性	修士	ハルビン	既婚	ソウルから上海	18 年
F	1976	女性	修士	佳木斯	未婚	青島から上海	18 年
G	1973	男性	修士	海林	未婚	東京から上海	9 年
H	1983	女性	大学	ハルビン	既婚	ハルビンから上海	10 年
I	1982	男性	大学	ハルビン	既婚	ハルビンから上海	10 年

これらのインタビュー対象者には中国東北地方から上海へ直接移動した人もいれば、沿海都市で経験を積んでから移動した人も、また韓国と日本で学位を取って仕事の経験を積んでから上海へ移動した人もおり、多様である。以下では先に上げた 4 つの視点に沿って、インタビュー内容を紹介・分析する。

3. グローバル・シティの上海と朝鮮族との関係

3.1 国内移動と海外移動の境界の無化

国内に移動するか、海外に移動するかの選択に際しては、ビザ申請の煩雑さや言語の壁などを含む適応の難易度などが大きく作用する。そして一般的には、国内移動は言語障害があまりないのに対して、海外移動は、言語や文化の壁に加え越境手続きの煩雑さもあ

るため、より難しいと考えられる。しかし、朝鮮族の場合には必ずしもそうとは限らない。

朝鮮族の国内移動は、中国の改革開放につれて韓国系企業と日系企業が中国へ投資を始めたことと深く関わっている。そうした外資系企業が中国進出にあたって、韓国語、日本語の通訳を必要として、その人材として朝鮮族の移動を促した。通訳を担える言語や文化能力は、朝鮮族が民族教育を重要視してきたこと、さらには中国の主流社会からは周辺化された伝統的コミュニティでの生活といった、一般には芳しくない条件にも支えられてきた。

海外移動先としては、韓国が最も多いのだが、その理由としては出稼ぎと、祖先の故国への「帰還」とが最も重要なものと考えられる。1986 年から韓国では離散家族探しが盛んになり、特に中韓国交樹立後は、朝鮮族の韓国への移動が本格化した。2004 年になって在外同胞法が実施され、2007 年からは就業訪問制度により、定住を目的とした朝鮮族の移動が大幅に増加した。このような変化は、韓国社会側の積極的な受け入れと朝鮮族側の言語・文化資本とが相まって、韓国への移動が容易となったために起こったことであり、朝鮮族社会では、韓国への移動は国外移動とは認識されなくなっていった。

朝鮮族の海外移動先として韓国に次ぐのは日本である。朝鮮族には第一外国語として日本語を学んだことがある人が多いため、留学という形での日本への移動が容易だったからである。また、日本にいる外国人の中で、朝鮮族は中日韓の 3 カ国語を自由に使いこなせるという、日本での仕事・定住に非常に有利な面を持っている。さらには、朝鮮族にとって日本は、中国におけるマジョリティである漢民族との社会的位置の格差からも、韓国における韓国人との民族的ヒエラルキーからも自由になって、もっぱら外国人一般として遇される国なので、文化的・社会的な抑圧が少ない国でもある。

このように、朝鮮族にとっては、国内移動であっても乗り越えられない壁があり、海外移動であっても移動や適応の面ではメリットがあることから、国内移動と海外移動と分けることに大きな意味はない。そのように、国内移動と海外移動との境界を無化するような朝鮮族にとって、上海への移動は国内移動を選択した結果ではなく、移動先の選択肢として一つを選ぶに結果に過ぎないと考えた方がよさそうである。以下では、上海在住の 3 人の朝鮮族の事例を通して、彼らの中日韓 3 国から上海への移動の実態を明らかにする。

＜事例 1＞　国内の東北地区から上海へ移動した A さん

A さんは現在、上海の××区の病院の副院長として活躍している。1990 年以前は上海へ

の人口流入が厳しく制限されていたが、浦東開発の人材導入制度により、1998 年に上海市××区政府と××区衛生局が全国を対象として、初めて医療人材を募集した。100 人以上の競争者の中で、A さんは吉林省吉林市市立病院における 14 年以上の医師としての臨床経験を評価され、選抜された。

A さんは「上海の制度がなければ、上海の公立機関への転勤は考えられないことですね。上海では人材を重要視し、人材選抜制度が公平であるから、私が選抜されたと思います。でも、上海と違い、東北地区ではコネを重要視するので、そこが少数民族の私たちにとって弱いところであるため、東北地区を離れました。能力さえあれば、私は東北地区より、上海を薦めます」と語った。

A さんは、東北地区から上海へ直接に移動したケースであり、その移動要因は二つある。一つは上海の「人材引進制度」[9]である。A さんは上海市の都市建設に必要な専門職だったため、上海の公立機関へ就職することができ、上海への移動が実現した。この形の移動では、単なる職務の移動だけでなく、上海での戸籍取得が可能となり、社会保障などの安定的な生活の基盤を作ることができる。

もう一つは、自己実現の可能性が高い上海への移動である。A さんは、朝鮮族が東北地区では周辺化されたマイノリティであり、主流社会でのコネが弱い存在であると自覚していた。東北地区でのそのような社会環境は、朝鮮族が少数民族として差別を受けているというより、キャリアアップ及び主流社会への進出に高い「壁」があるということである。そのため、A さんはマイノリティであることが不利に働く社会環境ではなく、専門領域での実力を認めてもらえる上海への移動を選択した。

＜事例 2＞　韓国から上海へ移動した B さん

B さんはハルビンの名門大学を卒業後、在外同胞の F4 ビザで韓国へ行った。小さい頃から親が韓国に出稼ぎにいってしまって離れ離れになっており、同級生や友達も韓国にたくさんいるので、韓国で 1、2 年間生活したかったという。韓国で親と半年一緒に住み、その後は就職するつもりだったが、韓国にいる周りの同年齢の友達の就職状況をみると、免税店での通訳や、10 人ほどの小さい会社で働く人が多かったことから、B さんは中国へ

9　人材引進制度とは、1980 年上海の戸籍制度が緩和された後の 1994 年～2002 年の期間には、投資誘致と人材誘致を目的に様々な政策が取り入れられたことを指す。

帰国することを決めた。その時、上海の大手韓国系企業がソウルで社員募集をしていたので、B さんはソウルで面接を受け合格し、上海へ移動した。

B さんは、「私は朝鮮族だし、名門大学卒なので、北京、上海の大手の韓国系企業へ就職するのは、あまり難しいことではないですが、韓国ではなかなかいい仕事が取れないですね。また韓国にいると、なんか朝鮮族は二等公民みたいな気がします」と語った。

B さんは中国で名門大学を卒業し、韓国へ移動し、再度上海へ移動したケースである。B さんが韓国へ移動した理由は、「里帰り」の要因が強かった。

朝鮮族の家庭は子どもの頃から、親が韓国へ出稼ぎに行き、親と子供は離れ離れになった経験があるのが一般的である。B さんにとって韓国は生まれたところでもなく、慣れた環境でもないが、親と親戚、友達という血縁・地縁のある人たちが多く住む場所であったため、一つの移動先になった。それは、心を癒される「帰郷」という強い動機も作用しているが、その他に韓国のビザの取得や韓国での定住（親がいるので、家探し、食費など）の面で移動が難しくなかったという要因もあった。

一方で、B さんのキャリアの発展の側面からみると、上海の方が韓国より有利であった。つまり、韓国で中国語を文化資本として利用するより、上海で韓国語を文化資本として利用した方が、B さんにとって有利であった。それは、韓国と上海における言語・文化資本の価値の差異のみならず、韓国では民族的ヒエラルキーが朝鮮族の職業に影響する一方、上海では韓国資本の外資系企業の国際人としての身分への変換が、B さんに有利に作用したからである。

＜事例 3＞　東京から上海へ移動した C さん

C さんは北京理工大学 3 年生の時に、交換留学生として東京へ留学し、卒業後にもひき続いて東京の銀行で 3 年間働いた。当時の年収は 600 万円であった。2012 年、上海へ帰ったばかりの時は年収 200 万円だったが、今は世界で有名な四大会計事務所の一つでコンサルティングの仕事をし、主に日本を対象とした業務を担当しており、年収も 1000 万円に上がった。

C さんは「私は留学とか仕事の方法を習うため日本へ行ったことはよかったと思います。しかし日本にいる時は、決まった社会のルールの中で変化がない地味な生活を送り、そんな生活に飽きていました。また、外資系企業は別として、外国人が課長クラスにまで出世

するのは非常に難しいのが暗黙のルールでした。でも、上海は中国で最も発達した経済圏に位置し、中国では多くの優遇政策を上海で先進的に実施しています。このようによく変化する環境の中でいいチャンスを掴んで、選択が賢いものであれば、成功できると思います」と語った。

C さんは、北京から東京へ留学し、仕事の経験を積んだ後、上海へ移動したケースである。C さんが上海へ移動した理由は二つある。一つは、「上海は人生で成功できる新天地だ」という認識である。中国の高度経済成長に伴い、2004 年から「帰国ブーム」が起こり、帰国後の行き先として「北上広深」の大都市を選択した留学生が全体の 46%を占め、その中では 36%の留学生が上海と北京[10]を選択した。帰国して大都市を選ぶ理由には個人差があるが、C さんのように、中国の経済的・社会的環境が変化した中で、よりよいチャンスを求め、更なる発展を目指すことが大きな理由として考えられる。特に上海は中国で最も発展した国際都市とされており、活気に富んだ環境に憧れがあった C さんのそのようなチャレンジ精神に合致した。

もう一つの理由は、東京に比べ、上海のほうが個人的な出世に有利なことである。日本では、生活には支障がなくても、外国人が職場で昇進することは難しく、キャリアアップに際しては「壁」があるというのが C さんの認識だった。守屋高司[2018]は「外国人の高度人材は、日本人の社員に比べて、より野心的な『キャリア構築』を重視する人たちも多く、上司との個別面談でも、育成の方向や今後のキャリアパスについて明確に指し示すことが重要である」［守屋高司 2018：34］と指摘しており、それが C さんにもあてはまる。つまり、C さんは日本でのキャリアアップや昇進に繋がる将来展望に満足できなかった。上海に移動すれば、本国で暮らしているような安らぎを感じることができ、日本での経歴などを合わせると、日本にいるよりも容易に自己実現ができると考えられたことが、上海への移動の動機となった。

以上で見てきた 3 人は、従来からの集住地域であった中国東北地方での暮らしや、韓国・日本への移動・定住に満足できずに、より良い人生、さらには自己実現を求めて、グローバル・シティである上海へ移動した。また、彼らは 3 人とも上海の都市建設の発展に有用

10 「留学生の中国大都市への行き先」
https://zhuanlan.zhihu.com/p/59275674（アクセス日：2019/10/10）

な人材だからこそ上海の戸籍を取得することができた。そしてその都市戸籍を持つ者として上海における社会保障サービスを享受できるといったように、定住が容易な状況になっていった。このような定住過程は、高学歴、高度専門エリートの朝鮮族にはよくみられることである。

彼らの上海への移動は、1990 年以降、上海が新興のグローバル・シティになり、経済政策上、国内外から各領域の専門家及び高学歴者などの人材に、移住を促した結果である。その他、上海からの積極的な誘致以外に、東北地区、韓国、日本での比較的無力な立場を避けるための移動という側面も無視できない。

言い換えれば、移動に伴う様々な「壁」を回避できるだけでなく、ディアスポラ集団としての利点が発揮できるために、上海は戦略的な選択地の一つとなるのである。中国東北地方では周辺化された「少数民族」、韓国では「在外同胞」、日本では「外国人」として、高い「壁」があり、その「壁」は、ビザの取得や言語的障害といった面にとどまらず、出世に関しては限界をもたらす。しかし、グローバル・シティの上海では、朝鮮族という属性が薄れて、専門性という側面が突出するため、その「壁」を乗り越えることができるのである。

3.2 韓国・日本の資源を利用したグローバル化の実践

上海における朝鮮族は、言語・文化資本を利用し、商業取引や経営における仲介役、異文化間の架け橋の役割を果たすことによって、グローバル化を実践している。2010 年までに上海を含めた華東地区には朝鮮族企業が 2000 社あまり[11]にまで増加した。主に、韓国と日本の貿易、上海へ観光に来る韓国人と日本人を対象とした観光業及びサービス、韓国系企業を対象とした製造業に集中しているが、近年は、国際会計士、国際法律士などの業務を行う企業も見られる。以下では 2 つの事例を見てみよう。

＜事例 4＞　コンサルティング企業を創業した D さん

D さんは瀋陽の大学の教師だったが、1987 年～1996 年まで国費で名古屋大学大学院法学研究科に在籍した。博士課程を終え、日本の有名な衣料品の会社に 2 年間雇われ、その間に、日本のある銀行で 2 年間、中国の経済投資環境について説明するボランティアとし

11　「朝鮮族の実業経済が形成した産業民族」
http://www.dbanews.com/news/articleView.html?idxno=13622（アクセス日 :2018/10/10）

て活躍した。2000 年になって、日系企業の上海における第 3 次投資ブームが起こった。同時に上海にも「創業扶助制度」[12]があったため、D さんはチャンスだと思い、2002 年に上海でコンサルティング会社を創業した。続いて 2004 年には東京で、2007 年にはソウルで事務所を開設した。

D さんは次のように語った。「2000 年頃、上海では中日の法律に詳しいコンサルタントのサービスを提供できる企業が極めて少なく、日系企業が何を求めて上海に投資し、客のニーズに合わせてどのようなサービスを提供すべきかが専門化されていない状況でした。そのような状況で私が起業しました。多くの朝鮮族は純粋な中国人でもないし、純粋な韓国人でもなく、また、日本では外国人だし、中日韓どこでも不利だと思いますね。しかし、朝鮮族であることは私の起業にとって、非常に有利ですね。また、上海は昔から有名な実業家もたくさん出ているところなので、私は 3 カ国語を使いこなせることとして、法律を武器に、中日韓のネットワークを生かしながら、中日韓に貢献できる上海の企業家になりたいです。」

D さんは、日本で博士号を取得後、高学歴者として上海へ移動したケースである。国際法律コンサルティングはグローバル・シティでよく見られる業種である。彼は上海の有利な創業政策及び経済的環境を土台に日本と韓国の資源とネットワークを利用して、起業・経営実践を行った。つまり、D さんにとって上海は、専門の法律を活かし、言語・文化の資本を利用でき、3 カ国の架け橋としての役割を最大限に果たすことができる場でもある。

多様な文化経験によりアイデンティティのゆらぎがある朝鮮族もいるが、D さんは「私は中国人であり、韓国とも繋がりがある民族であり、日本の文化に馴染んだ人でもある」という感覚で、それぞれの文化に共感できることから、朝鮮族のアイデンティティを肯定的に捉えている。さらに、朝鮮族のアイデンティティを民族という枠内ではなく、海外とのトランスナショナルなネットワークの中で位置づけて理解しており、グローバル人材としての自己認識が見られる。

---

[12] 創業扶助制度とは、1992 年に鄧小平が留学生を中国へ帰国させるような政策を策定し、上海が初めて優先的な政策を取り入れた、「留学生が上海で仕事することを励ます」制度であり、留学帰国者の仕事、生活などの優遇政策を設定したものである。

＜事例 5＞　韓国の資本を利用し、創業した E さん

E さんはハルビン市の警官学院で教官を 14 年間担当後、韓国で修士課程を終え、2001 年に上海で創業することにしたという。上海の創業政策により、E さんは最初に上海美容学校と合弁して、韓国式のスタジオの学校を創業した後、韓国式のウェディングの会社も作った。当時の上海では韓流の影響が大きかったため、E さんは韓国のデザイン、経営モデル、理念などをそのままコピーし、大きな成功を収めた。

上海は近代から国際都市として、西洋文化が流行しやすい、「崇洋」傾向があるので、E さんは、海外のものはすぐに受け入れられ、流行すると考えた。また E さんは「私は朝鮮族で、韓国への留学経験があり、また中国人なので上海の政策が利用できたため、その三つの立場を上手に利用できる上海が創業の絶好地だと思いました。創業の都市の選択が成功の第一歩とすれば、経営理念は肝心なところですね。上海で朝鮮族とコリアンの狭い範囲に限定せず、上海及び全中国を対象としたビジネスをすることが成功のコツだと私は思います」と語った。

E さんは東北地区から韓国、韓国から上海へ移動したケースである。E さんは D さんと同様に、上海の「創業扶持政策」を基盤とする一方、業態は韓国の文化資本を利用した。コーエンは、「貿易や金融関係だけでなく、芸術、映画、報道関係、芸能分野の事業において活躍するディアスポラたちも非常に多いというのは、おそらくこのように周囲の状況に敏感であることが要求されてきた事情があるからだろう」[コーエン 2012：289]と指摘しており、これは E さんのケースにあてはまる。E さんは朝鮮族として、韓国へ留学しやすい環境にある上に、韓国の文化及び美的感覚を正確に理解でき、韓国の文化を上海に取り入れることができる点において、一般の漢民族より有利であった。

特に、上海はグローバル・シティとして多様なエスニシティと様々な文化を包摂しており、世界のポピュラーな文化への接触が早く、流行も早かった。そのような国際的な多文化環境の中で、ディアスポラ集団である朝鮮族が韓流を戦略的に利用することによって、上海市及び全中国に向けてビジネスを行い、主流社会に目を向けている。

上記の二つの事例の共通点として、D さんと E さんの上海への移動は、経済政策に引きつけられた側面のみならず、韓国と日本の外国資本とネットワークを積極的に利用して、自分にとって強みがある領域で能力を発揮する形で行われていることが挙げられる。つま

り、彼らは中日韓の 3 カ国において、田嶋淳子[2010]が「隙間を埋める形での事業展開が彼らにとって最も有利な形で進められている」[田嶋淳子 2010：88]と述べているように、ディアスポラの架け橋という機能を発揮している。

また 2 人は、中国人としてのアイデンティティについて肯定的に考え、多様な言語的文化的な要素を積極的な側面で捉えている。言い換えれば、上海における朝鮮族の立場を中日韓のトランスナショナル・ネットワークの中に位置づけるなど、「グローバル人」という自覚が見られ、上海市民の一員としての帰属意識を明確に持っている。

3.3 トランスナショナル空間としてのグローバル・シティの活用

上海は韓国、日本との経済的、社会的、文化的な側面での密接な関わりなどがあいまって、朝鮮族にとってのトランスナショナル空間を形成している。具体的には、上海と韓国、そして日本など複数の社会関係を維持し、その絆をダイナミックに動員し、社会関係が開かれた形で繋がるように生活している。

＜事例 6＞　上海と韓国とのトランスナショナル空間

F さんの話

「春節になると、上海への流入人口は実家に戻るけれども、朝鮮族は韓国に行って過ごすのが普通ですね。両親は韓国に 15 年間滞在し、親戚も約 20 人います。それだけでなく、中学や高校の同窓生もほとんど韓国におり、同じ村で一緒に育った友達もかなりの人数が韓国にいます。最近も『20 年目の中学卒業祝い』をソウルで開き、30 人のクラスメートのうち、18 人が韓国にいて、日本にいるクラスメートも来ました。また、上海からソウルに行くのに、チケット代も安いし、韓国にいる人も多いので、韓国で会うのは便利です。（中略）また、上海で生まれ育った朝鮮族の子供は韓国語もほとんどできないし、朝鮮族について説明しても理解できない子供が多いです。

私の子供も韓国語ができませんが、そんなに心配していませんね。子供を韓国によく連れて行って、おばあさんとおじいさんに会わせたり、韓国の古跡への旅行をさせたりして、子供に朝鮮族ということを実感させます。その上に、大学卒業後に、韓国で一年ほど過ごせば、韓国語ができるようになると思うので、大丈夫でしょう。」

F さんにとって、韓国は地縁・血縁のネットワークで形成された仮想的な故郷であり、子供にルーツを確認させる場でもある。東北地区における伝統的朝鮮族コミュニティが空洞化してしまったため、そことの繋がりに代わって、韓国が新たなエスニック・コミュニティの中心として利用されている。

言い換えれば、東北地区における伝統的朝鮮族コミュニティはエスニック空間と生活空間が重なっているが、ホスト社会の上海に暮らす朝鮮族にとっては、それらが分離された状況にある。そのため、韓国はエスニシティを維持する役割を持つ延長されたエスニック空間として捉えられるなど、彼らにとってトランスナショナル空間が形成されている。そうした空間において朝鮮族は、上海の主流社会から離脱せずに、それと同時に主流社会への文化的同化をある程度は防ぎながら生活できるのである。

＜事例 7＞　上海と日本とのトランスナショナルな生活

G さんは、2004 年に日本へ留学し、東京の大学院を卒業した後、2007 年に東京の中小企業に就職し、3 年後上海の事務所に派遣された。妻は日本の女性である。子供は 10 歳で、日本語しか話せないため、G さんが上海へ単身赴任したという。上海で仕事をする時間が長く、一ヶ月に一回、本社への報告と会議のため東京へ帰るというライフスタイルである。

G さんは「私は中国人で、朝鮮族であり、日本では永住権を取り、13 年間の生活で、ほぼ外国とは思わないぐらいになりました。中国と日本は両方とも私にとって重要です。でも、東京と上海の、どちらに長くいても寂しさを感じますが、それでも今の生活がベストなのです。特に上海は東京と似ていて、ほとんど不便なところがなく、行ったり来たりする生活が私に合っているのかも知れません」と語った。

G さんは、グローバル・シティの経済システムの中で移動する人である。日本の会社に雇われ、上海へ派遣される形式であるが、上海でそのような状況に置かれている朝鮮族は少なくない。

中国と日本の両国に帰属意識を持つ G さんには、複数の文化の交渉によるハイブリッド・アイデンティティが創出された。上海と東京のいずれにも生活の拠点を持つことで、トランスナショナル空間が形成された。定住が一般的なライフスタイルであっても、G さんにとっては移動と定住とが曖昧になっている。彼にとって、上海と東京とにまたがるト

ランスナショナルな生活は、国境を越えた両国というより、差異の小さい二つのグローバル・シティの中にあると認識されている。つまり国と国ではなく、グローバル・シティならではのトランスナショナルな空間にG さんは生きている。

以上の 2 つの事例から、彼らが上海と韓国、そして日本とのトランスナショナル空間を形成し、国民国家の枠組みを超えて、生活世界を広げていることが見て取れる。一般的に、東北地区の朝鮮族社会と韓国とのトランスナショナルな生活空間は、主としてソウルへの出稼ぎ者による東北地区の実家への送金など、一方向的に形成される。それに対し、上海とソウル、東京のトランスナショナル空間は複数のグローバル・シティの間で、水平的なネットワークによって結びつき、相互に活発な交流及び移動の場となっている。

上海の朝鮮族が持つ韓国と日本のネットワークは多様な機能を発揮し、上海の朝鮮族のコミュニティの延長線をなしている。趙貴花[2012]は日本の朝鮮族について、彼らにとって「日中韓 3 国はすでに国境を越えた一つの生活圏になっている」と述べている［趙貴花 2012：52］。上海の朝鮮族にとっては、グローバル・シティの上海と主に経済貿易で結び付いた韓国、日本は国境を越えた一つの経済圏になっている。趙が指摘しているように、韓国はもちろん、多くの朝鮮族がさまざまな形で日本の生活を経験するにつれて、上海と韓国、日本も一つの生活圏になっていると推測される。

3.4 グローバル・シティ上海での戸籍というシティズンシップ

上海は 2300 万人と中国で人口が最も多く、戸籍未取得者が 40%も占めている都市として、戸籍問題による混乱が深刻化している[13]。厳善平「2010」は、農村から上海への出稼ぎ者を対象とした研究で、中国の都市労働市場に見られる二重構造は主として戸籍制度により生み出されると指摘している。また宮島美花［2017］は、朝鮮族についても、国内移動によって必ず起こる戸籍制度の問題について言及し、その問題が北京、上海への移動と定住に際しての大きな障害になっていると指摘している。

しかし、これらの先行研究では、戸籍制度をもっぱら中国の独特のシステムとして扱い、農村から都市への国内移動の要素の一つとして議論が行われるばかりで、上海がグローバル・シティという特殊な性格を持つ都市であることが考慮されていない。朝鮮族の上海への移動は単なる農村から都市への移動ではなく、グローバル・シティへの移住及びデ

13　上海人口は 2300 万人を超え、その中でも戸籍未取得者は 900 万人に近い。

ィアスポラであることから、上海での戸籍問題は海外に他ならない韓国への移動以上の困難を伴う。つまり、高学歴の朝鮮族でも上海の戸籍を得るには、韓国、日本で永住権あるいは国籍を取得するよりも高い壁がある。そのため、戸籍問題は単なる国内移動の要素としてではなく、グローバル・シティにおけるシティズンシップ＝市民権の問題として見る必要がある。

このような視点を踏まえ、朝鮮族にとっての上海の戸籍制度に関する困難を 2 つの事例を通して検討するが、それに先立って、上海の戸籍制度について概観しておきたい。

1985 年から現段階までの上海市への流入人口に対する戸籍制度の目的は、都市建設の需要とともに人口を管理すること、次いでは投資を誘致すること、そしてさらには人材を誘致することへと次々に変化してきた。現行の上海の戸籍制度には、緩和策としてポイント制が導入されている。居住証の点数が年齢、学歴、専門技術・技能資格、社会保険納付状況などによって、120 ポイントに達し、その上で 7 年間連続して一定の条件を満たせば、上海の戸籍を取得できる。これを「居転戸」という。以下では、それに関連する二つの事例を見てみる。

＜事例 8＞　ハルビンで大卒後 10 年かけて上海の戸籍を取得した H さん

H さんは、2008 年に大学を卒業した後、上海の LG エレクトロニクス上海支社に就職し、2011 年に欧米企業へ転職した。「居転戸」は 7 年間であるが、彼女はその 10 年後の 2019 年の 10 月にようやく上海の戸籍を手に入れた。

H さんは、「最初に上海に来た時には、松江区に住んでいましたが、そこは主に外から上海へ来た人や上海周辺の農村から来た人が多く、賃貸マンションの不動産の管理が混乱していました。居住証の手続きは上海で賃貸マンションを借りていれば、そんなに難しいことではないのですが、マンションのオーナーが協力してくれなかったので、私はその 3 年間には居住証を取得できませんでした。そのために、そこから転居してようやく、居住証を取得できたのです。

居住証があれば、大卒者は 90 点で、プラス年齢の点数 30 点であれば、すぐ 120 点になりますね。しかし、居住証の有効期間が 1 年なので、毎年申請しなくてはなりません。また、「居転戸」の 7 年間の最後の 5、6、7 年の最後の 3 年間は上海市の平均賃金の 2 倍以上の収入になって初めて申請資格があります。」と語った。

Hさんは、前の7つの事例のような留学生と都市建設に必要な人材という扱いとは違い、一般の大卒者が上海で戸籍を取得した事例である。留学生と人材導入制度で上海へ移転した人は税金と保険料を納付して半年後に戸籍の申請ができるが、それに対し、Hさんのような「居転戸」はその申請過程が順調であっても、最低7年以上の時間がかかる。上海人力資源と社会保障局によると、2018年の一年間で上海に移住してきた留学生は12,533人、人材導入制度によって移住してきた者が7,959人、「居転戸」者は12,847人と公示されている[14]。上海での戸籍未取得者は約900万なので、一年で「居転戸」が可能な人は多くはない状況であると推測される。

そういった厳しい状況下で、Hさんの上海での戸籍取得の過程をみると、上海への移動は国内移動でありながらも、定住には壁があり、その壁を乗り越えるためには、上海市の平均以上の高い保険、高い税金を納付しなくてはならない。つまり、学歴が絶対的な基準となっている上海の戸籍を得るためには、保険、税金などの厳しい条件も満たさなければならない。そのため、グローバル・シティとしての上海での市民権取得は、海外での永住権及び国籍取得よりも難しいと言えるだろう。

＜事例9＞　戸籍と居住証による子供の教育格差

Iさんは子供が2人いて、一人は9歳で小学校に通い、もう一人は6歳で幼稚園に通っている。2018年に上海の戸籍を取得し、戸籍が取れるまで、子供の学校選択で困っていたという。上海の学校（幼稚園から高校まで）は区ごとに教育資源が異なり、同じ区の中でも学校は「第一梯隊、第二梯隊、第三梯隊」という3つのレベルに分ける。第一梯隊とされている学校には最もよい教育資源が集中し、子供の入学競争が最も激しい。

Iさんは「私は去年までに120点以上の居住証を持ったので、ここ上海での幼稚園の入学から大学までは問題にならないです。しかし、第一梯隊の学校に入学したい場合は、戸籍を持っている人の子供と競争関係になるため、大変です。それらの学校では戸籍がある人の子供を最優先として考慮します。また、その条件だけではなくて、「人戸一致」も重要です。自分のマンションと戸籍の住所とが同一であれば、その所在区のいい学校に入学できます。もっといい学校となると、5年以上もそうであることが要求されます。つまり、子供が6歳から学校に通うとしたら、子供が生まれた時から戸籍を持っていなければなら

14　上海市人力資源と社会保証局
http://rsj.sh.gov.cn/201712333/（アクセス日：2019/10/2）

ないのです。親なら誰でも、子供にいい教育を受けさせたいものですね。でも、戸籍が取れなかったらどうしようもないですね」と語った。

I さんも H さんと同じく「居転戸」者である。宮島美花[2017]は、「上海に家を買ったが、D さん夫婦は『大卒ではない』ので上海の戸籍を得ることができない」と、子供の教育問題で上海から離れることを余儀なくされた家庭の状況について指摘した［宮島美花 2017：174]。しかし、大卒者である I さんにとっても、上海の戸籍を取る以前の、120 点の居住証を持っていた期間における子供の教育においては困難がある。

制度上は 120 点以上の居住証なら戸籍とほぼ同等の社会保障が享受できるが、その制度と実際に得られる公共サービスの権利および教育資源との落差は大きい。上海の戸籍があれば、子供が第一希望の学校に確実に編入されるという保証はないが、上海の中で、ある程度の学校の選択権を得られるようになる。つまり、上海の戸籍によって得られる教育を受ける資格は、シティズンシップの一種に当たる。

上記の二つの事例に挙げられている H さんと I さんは、上海で高度専門技術者としてではなく、大卒者の一般的な取得方法で、それぞれ 10 年、8 年という長い年数をかけてようやく上海戸籍を取得した。グローバル・シティの上海への朝鮮族の移動は国内移動であるにも関わらず、海外での永住権および国籍取得と変わらない高い「壁」がある。しかし、今回のインタビュー調査からは、そのような厳しい状況の中でも、高学歴者が多い上海の朝鮮族においては、その「壁」は乗り越えられると信じているように思われる。

また、1990 年以降に上海へ移動した戸籍取得者は、上海で奮闘するグローバル人という意味で 2001 年に「新上海人」と名付けられてもいる。要するに、上海において戸籍の有無は、社会保障のみならず、上海への帰属意識、あるいは将来の安定的な生活及び展望に深く関わっている。そのため、上海戸籍は朝鮮族にとって、グローバル・シティでのシティズンシップにかかわる核心的な要素なのである。

4. おわりに

本稿では、上海へ移動した朝鮮族の事例を通して、国内移動と海外移動という枠組みではなく、グローバル・シティと朝鮮族の関係性の中で移動が促されていることが見えてきた。

上海へ移動した朝鮮族は、国内か海外かの区別によって移動先を選んだのではなく、社会的地位の上昇と自己実現のために戦略的に上海という都市を選んでいる。特に、都市建設に有用な人材を積極的に受け入れる上海には、高学歴者、専門職の朝鮮族に対し、極めて高い吸引力がある。

上海は朝鮮族にとって、社会的地位の上昇を望める国内の大都市である。彼らは上海へ進出する意欲が強く、韓国と日本とのトランスナショナル・ネットワークを積極的に利用し、自己実現ができる上海を新天地として認識する傾向が強い。つまり、上海は朝鮮族がディアスポラを経験したマイノリティとしての自覚を持ち、文化資本を戦略的に活用して社会的な地位の上昇を期待できる場所なのである。

しかし、上海は多国籍の資本が集中するなど、単なる国内の移動先としては捉えることができない都市空間である。韓国や日本といった朝鮮族にとっての言語資本の活用が可能な企業の進出につれて、グローバル資本を利用しながら自己実現が可能な都市空間だからである。さらに、上海と韓国と日本との間には、国民国家の枠組みを超えた、グローバル・シティならではのトランスナショナル空間が広がっている。

また、朝鮮族にとって、上海への移動は国内移動であるにも関わらず、「戸籍」というシティズンシップを獲得しない限りは不安定な生活を強いられる。グローバル・シティとしての成長を支えている一要素として、高学歴者、専門職を持つ者は厚遇されるが、それ以外の者は戸籍＝市民権の制限を受けるという意味で、海外移動にも似た移動先なのである。

本章では、上海を一般的な大都市ではなく、国内外の境界が曖昧なグローバル・シティとして捉えた。ディアスポラである朝鮮族が更なる移動を行う中で、グローバル・シティの上海では、故国の韓国人との出会いがもたらされ、経済的・文化的に様々な実践と交渉が活発に行われている。このことから、どのようなエスニック空間が形成されているか、そこから朝鮮族のどのような移動の側面が見られるのかを、次に検討する。

第 2 章　朝鮮族社会と韓国社会のエスニック空間の形成
―上海龍柏コリアンタウンを中心に

1. はじめに

龍柏コリアンタウンは上海における朝鮮族と韓国人の主な集中地である。1992 年の中韓国交樹立後、韓国系企業が上海へ進出したことによって韓国人と朝鮮族が移入したことが、龍柏コリアンタウンの形成の最も重要な要因である。2000 年前後に上海で韓流（韓国発の大衆文化）がヒットし、龍柏コリアンタウンは「上海の中の韓国」と言われるほど韓流の代表的な街として知られている。

上海はグローバル・シティとして、延辺とは確実に違う側面を持つ。玄武岩[2013]は延辺というエスニック空間について、「朝鮮族を中国人や韓国人あるいはコリアンとして上位カテゴリーに括れないのは、朝鮮族が延辺という自治区域のなかで独自な生活空間を形成し、どちらにも吸収されない集合的アイデンティティを持っているからである。」［玄武岩 2013：228]と指摘した。一方、上海はグローバル・シティとして、上海へ進出した韓国系企業という経済的基盤の存在、朝鮮族と韓国人に共通した生活空間、本国とのトランスナル空間という環境を持つ延辺にはない、朝鮮族と韓国人の民族関係が上海には存在するのである。本章では、そういった側面を持つ上海という場では、朝鮮族のどのようなエスニック空間が形成されるのか、また、朝鮮族のコミュニティの再建は韓国とはどのような関係があるのかを明らかにする。

2. 上海における朝鮮族社会の定住状況と龍柏コリアンタウンの形成

本節では、先ず上海における朝鮮族の定着過程および居住地域を提示した上で、10 人のインタビュー対象者を通して、上海における龍柏コリアンタウンの実態を描きだす。

2.1 上海における朝鮮族社会の定住過程及び現状

上海には 17 区 1 県の行政区域があるが、朝鮮族は主に閔行区、松江区、浦東新区、長寧区に集中している。朝鮮族の上海への移動は、韓国系企業と日系企業への就職とも密接な関係があるため、以下では、上海における朝鮮族、韓国人、日本人の定住状況を合わせて見てみる。

表 2-1　2010 年までの朝鮮族、韓国人、日本人の上海での定住状況

	上海地区	朝鮮族	%	韓国人	%	日本人	%
	総計	22257	100%	19764	100%	29684	100%
1	閔行区	9511	42%	9968	50%	3015	10%
2	松江区	3916	17%	664	3%	574	2%
3	浦東新区	3156	14%	2628	13%	5026	16%
4	長寧区	1567	7%	3065	15%	12878	43%

筆者作成

表 2-1 では、半数に近い朝鮮族と半数の韓国人が閔行区に集中し、そこには日本人も 3015 人が定住し、3 つの集団の居住地が重なっていることが分かる。閔行区に龍柏コリアンタウンが、長寧区に古北ジャパニーズタウンが形成されたためと考えられる。その背景を辿ってみると、1990 年以後、上海が第二次改革開放を迎えると、虹橋経済技術開発区[15]が設置されて韓国系企業と日系企業の投資を吸引した。それとともに、韓国人と日本人が増加し、虹橋経済技術開発区を中心とした龍柏コリアンタウンと古北ジャパニーズタウンが形成され、朝鮮族も集中するようになった。

朝鮮族が龍柏コリアンタウンに最初に集中した理由は、主に上海へ移動した韓国系企業の駐在員と社員、旅行者などの韓国人を虹橋空港から出迎えるのに、距離が近いからである。また、90 年代初期には、そこが都心部から離れた地区で立ち退き移住基地の基礎の上で発展した大規模コミュニティで、家賃が極めて安いため、生活コストが低かったという原因もある。

しかし、龍柏コリアンタウンが成熟した国際コミュニティになるとともに、地価と家賃が高くなり、閔行区より家賃が安い隣接の周辺の松江区に引越しした朝鮮族が増加した。特に、2008 年に松江区の九亭には多くのマンションが建てられ、日々高騰する不動産に「安いうちに買ったほうがいい」という考えで、九亭でマンションを購入した朝鮮族が一気に増えた。そのため、松江区の九亭では龍柏コリアンタウンを抜いて、第 2 コリアンタ

15　上海虹橋開発区は 1979 年から企画され、1983 年に建設され始め、1986 年から国務院の批准により、国家級開発区になった。主に上海西部に位置する国家級開発区であり、西は上海虹橋の交通の中枢にあたる 5.5 キロメートルである。そこには、渉外商業貿易センターがあり、展示会場、ビジネス用ホテル、外交事務所などによって主にサービス業が発展し、国家級開発区の中で、唯一海外の領事館の区域も設定したところである。

ウンが形成された。その後、九亭を通る 9 号線を中心に、九亭よりも都市の中心を離れた泗泾、佘山、松江大学区（三つとも松江区に位置）の駅のあたりにも朝鮮族が拡散して住んでいる。

松江区に次いで朝鮮族の多い浦東新区は上海で外資に有利な投資環境であるとともに、主に欧米系企業が進出するところである。日系企業と韓国系企業以外に、欧米企業へ就職した朝鮮族が浦東新区へ住み、朝鮮族人口の 17%を占めている。

また、半分以上の日本人が住んでいる長寧区での古北ジャパニーズタウンは高級マンション区として、朝鮮族もある程度の人数が住んでいるが、きわめて少ない。高価なマンション群として有名であるため、朝鮮族の中でも一定の経済力がある人だけが住んでいると考えられる。

以上のように、朝鮮族の上海での定住状況では、龍柏コリアンタウンを中心とした「大集中」、他の区での「小集中」、韓国人と日本人の居住地と重なる特徴が見られる。朝鮮族の定住年数が長くなればなるほど、上海のホスト社会への適応が進み、一時的な居住というよりも、定住の場所という意識が高まるため、不動産を購入できる区へと拡散している。また、上海のマンションの価格の差は大きく、上海朝鮮族が購入したマンションの区は、高価な方から長寧区、閔行区、浦東新区、松江区の順に階層化されている。なお、上海における朝鮮族が拡散して居住しても、龍柏コリアンタウンは大きな結節点であり続けている。

2.2 龍柏コリアンタウンとインタビュー調査の概要

龍柏コリアンタウンは、上海での「招商引資」政策で大量の韓国系企業が進出するとともに、韓国人駐在員と朝鮮族の移入によって形成された。定住期間が長くなるとともに、朝鮮族と韓国人の人口構成は多様化した、龍柏コリアンタウンは生活空間であると同時に、韓流に支えられた商業空間でもある。上海での韓流は 2000 年の「秋の童話」、2003 年の「大長今」といった韓国ドラマが第一次ブームをもたらし、それに続き 2013 年の「星からきたあなた」、「紳士の品格」、「継承者達」などの韓国のドラマがヒットしたことで第二次ブームが起こった。これらの社会背景により、龍柏コリアンタウンは紫藤路と虹泉路の商業街を中心に、エスニックな文化を資源化の対象として、ブランド化されつつある。

以下では調査の概要を整理した上、龍柏コリアンタウンを朝鮮族のエスニック飲食街である紫藤路とコリアンを代表する飲食街である虹泉路の形成及び現状を通して描き出す。

以下の表 2-2 では、インタビュー対象者の 10 人の背景の概要を示す。その中で、2 人が韓国人で、8 人が朝鮮族である。主に、龍柏コリアンタウンでの店主、韓国料理店の社長、衣料品の店主、韓国系企業の社員などで、多様な人々で構成された。彼らは、龍柏コリアンタウンで生活した期間が 10 年以上も経ち、龍柏コリアンタウンの形成と縮小というコミュニティの変容に詳しい人々である。

表 2-2　インタビュー調査対象者の概要

	生年	性別	朝鮮族と韓国人	職種	移動ルート	上海へ移動した年
J	1953	女性	朝鮮族	紫藤路でスーパー経営	吉林省から上海	2003 年
K	1970	男性	朝鮮族	韓国料理店の社長	ハルビンから上海	1995 年
L	1968	男性	韓国人	「井亭天地」での衣料品の店主	ソウルから上海	1999 年
M	1965	男性	韓国人	虹泉路での料理店の店長	ソウルから上海	1997 年
N	1970	男性	朝鮮族	紫藤路での朝鮮族料理店の店長	杭州から上海	2000 年
O	1972	男性	朝鮮族	料理店のオーナー	青島から上海	2011 年
P	1970	男性	朝鮮族	韓国系企業の朝鮮族社員	大連から上海	2010 年
Q	1967	男性	朝鮮族	韓国との貿易社会の社長	ハルビンから上海	2005 年
R	1960	男性	朝鮮族	協会の前会長	延辺から上海	1995 年
S	1960	女性	朝鮮族	紫藤路でスーパー経営	延辺から上海	1998 年

2.3 朝鮮族のエスニック飲食街の変容及び紫藤路の生成

1990 年代後半から、上海の朝鮮族の飲食街は、その規模と地理的位置がさまざまな要因によって変化しつつある。最初は、虹橋空港と最も近い上海動物園の駅の虹橋路で朝鮮族の飲食店の店舗が現れたが、2000 年代初めに行われた上海の再開発に伴う立ち退きにより、黄桦路へ移ることになった。

2004 年、黄桦路に「韓羅苑」焼肉屋の店舗が進出するとともに、エスニック飲食街の形成が始まった。「韓羅苑」焼肉屋は、2001 年に北京で設立された「漢拿山焼肉」会社が持っている 10 個のブランドの中の一つのチェーン店であり、朝鮮族と韓国人の中では知らない人がいないほど有名である。その上に、上海での「韓羅苑」は現地の味の好みに合わせて改良された韓国料理店なので、朝鮮族と韓国人だけでなく、漢民族にも人気にな

り、黄桦路の飲食街は「韓羅苑町」と言えるほど有名になった。当時、「韓羅苑」は床面積1500平方メートルの大きな店舗として、一日あたりの客数が1000名以上になり、一年分の税金も4.50万元（1000万円近く）を超えた[16]。

しかし、黄桦路の地価と店の賃貸料が日々高騰し、また韓国式の高級料理店が増加したことにより、「韓羅苑」は黄桦路から撤退し、これが黄桦路の飲食街の衰退の一因となった。黄桦路の衰退のもう一つの要因は、紫藤路の生成とも関連がある。

2000年頃、龍柏地区の開発拡張による人口の増加とともに、飲食街が必要になり、上海の政府は紫藤路を企画した。最初紫藤路はエスニック飲食街ではなく、一般の飲食街として計画されたため、朝鮮族の店舗漢族の飲食店と混じり、朝鮮族社会にも知られず、経営はうまくいかなかった。

2003年に韓国のドラマ「大長今」がきっかけとなり、上海で第一次韓流ブームが起こったことによって、韓国料理及びファッションなどが一気にヒットした。特に、2004年に紫藤路に、民族風の本場の味で有名になった「正一品」という韓国式料理店が進出したことがきっかけになった。その後、朝鮮族と韓国人の店が増える一方、漢族の料理店が少なくなり、紫藤路が本格的なエスニック街になった。現時点では、金達莱延辺冷麺、朝鮮族東北料理店、豊茂延辺式の串店、伝統の韓国式の牛肉のスープ店などの料理店、スーパーなどを主とした街である。

その中で、Jさんのスーパーでは半分が韓国から輸入した食品と延辺からの季節野菜と果物と物産、それに上海での餅工場で作られた伝統の餅も販売されていた。Aさんは上海でのコリアンタウンに、17年間滞在し、商売をした人である。

＜Jさん＞　朝鮮族女性、紫藤路でスーパー経営

「2004年までは、紫藤路には朝鮮族が少なかったです。私は元々は外でキムチ売りをしていましたが、2005年に上海市閔行区の朝鮮族代表が「紫藤農貿市場」に販売台を1.1メートルを作り、朝鮮族の商家を20軒を入れました。その時、その販売台には前と後ろがありましたが、その後、位置の関係で後ろでの販売はよくできないので、後ろの販売者は辞めて、今は一軒しか残ってないですね。市場での環境は寒いし、太陽の光も当たらないので、紫藤路でスーパーをすることにしまし

16　「上海コリアンタウン―龍柏地域社会」
http://www.krcnr.cn/xw/cxzfs/201012/t20101227_74963.html（アクセス日：2020/1/3）

た。2010 年までは、朝鮮族と韓国人が龍柏コリアンタウンに多かったので、大晦日の一日の売上が 13000 元（約 25 万円）までになり、その時のお客さんはほとんど朝鮮族でした。」

J さんの話によれば、紫藤路が形成される前には、朝鮮族の店舗は紫藤農貿市場に集中したが、韓流の影響によって、紫藤路が朝鮮族のエスニック街になるとともに、朝鮮族の顧客が紫藤路へ集まるようになったという。その後、紫藤路はお正月や春節などの名節が近づくと買い物客で溢れんばかりの賑わいとなった。2010 年の大晦日の売上は、スーパーの経営期間中で最高値になり、朝鮮族の客が大多数であったという。J さんの話からみると、2010 年あたりが紫藤路の全盛期だと推測できるだろう。2018 年に筆者が調査を行った時に、J さんは現在は漢族の顧客なくては、閉店する恐れがあり、経営状況が悪化し、現在は店を売るつもりで不動産屋に登録したという。

2010 年には 40 軒に近い朝鮮族、韓国の飲食店があり、毎日の流動人口は 10，000 名以上、飲食店の客は 5000 名になり、一日の駐車は 4、500 台にもなった[17]。同年に紫藤路は上海の地下鉄 10 号線の地下鉄駅になるとともに、交通手段の便利さと、韓流ブームにより上海の地元人の訪問客が急増した。2013 年の第二次韓流ブームにより、紫藤路の上海での知名度は一層高くなった。

紫藤路の光景について、K さんの証言も見てみる。K さんは韓国料理店の社長として、龍柏コリアンタウンで 3 つのチェーン店を持つ以外に、他の区でも 2 か所経営している。彼は経営理念として、料理を朝鮮族と韓国人の口に合わせるよりも、上海のホスト社会を対象とした。それは、市場を開放的にするため以外に、本番の味を作るためには朝鮮族コックが必要であるが、朝鮮族の流動性が高いため、求人が難しく、やむを得ない選択でもあった。

＜K さん＞　朝鮮族男性、韓国料理店の社長

「2008 年までは、紫藤路の店の 2/3 が朝鮮族の店、1/3 が韓国人の店で、また一つは「モランボン」という北朝鮮の店でした。その時、お客は主に朝鮮族と韓国人であるため、漢族の店が紫藤路では生き残れないほどでした。また、虹泉路での韓

17　同上

国料理の店に比べ、紫藤路では朝鮮族風が代表的で、東北料理、延辺料理などが主であるため、紫藤路は虹泉路とは矛盾がなく、朝鮮族料理の味が好きな人が紫藤路を訪ねますね。また、2013 年に韓国ドラマ「星からきたあなた」の中での焼肉屋が人気になり、年末までには紫藤路に焼肉屋が 10 店に急増しました。」

このように、単独のエスニック料理店から紫藤路の形成まで、朝鮮族を中心とした上海のエスニック街の位置も規模も大きく変容した。紫藤路の形成は、上海における朝鮮族の需要によってでき、上海朝鮮族のコミュニティの構築を促進したとも考えられる。

また、紫藤路には東北料理、延辺料理、韓国料理、北朝鮮の料理などが揃い、趙貴花[2016]の話を借りると、「この場において、彼らは政治的な分断を越えて、言語的文化的に共生する空間を創造している」[趙貴花 2016：61]という。紫藤路の料理文化の混種性からでも、朝鮮族のルーツが現れ、朝鮮族のディアスポラの特徴が顕在化された。さらに、韓流ブームによって紫藤路の商業価値が一層高まっているが、韓国料理を主とした虹泉路とは違うエスニック料理という魅力で、競争関係もありながらも共存関係が形成されていた。それは、紫藤路は朝鮮族にとって、朝鮮族なりのリラックスした気持ちを感じ、一種の開放感を味わえるからである。

2.4 上海のコリアンの代表的な街　――　韓流によって人気となった虹泉路

1990 年後半に上海へ来た韓国人は単身赴任者及び短期滞在者、韓国系企業の駐在員が多かったが、2000 年以後は、駐在員以外に、彼らの家族及び長期滞在者が多くなってきた。2000 年代初めは、白樟路に位置する「中祥龍柏苑」の 300 戸の中で、1/3 の住民が朝鮮族または韓国人であった。2002 年と 2005 年に、虹泉路でそれぞれマンション「錦綉江南」と「井亭苑」が建てられたため、韓国人がその二つに引越しした。また、古北地区の高級住宅に比べ、虹泉路のマンションは相対的に安く、生活するのにも便利であるため、大企業の韓国人駐在員も増え、虹泉路を中心にして韓国人のコミュニティが形成された。

2008 年頃、韓国の THE　E・LAND　GROUP という衣類会社の進出とともに、虹泉路は韓国の風景がある商業街になった。虹泉路では、「井亭天地」という生活広場が代表的な建物であり、韓国式の料理店、韓国の品物、韓国の衣服店などが入居している。虹泉路での韓国人のオーナーは韓国から商売をすることを目的として上海へ来た商家もいるし、駐在員の家族及び中小企業の駐在員で滞在期間を満了しても韓国へ帰国せず、会社を辞めて上

海に残った人もいた。

＜L さん＞　韓国人男性、「井亭天地」での衣料品の店主

「私は 1999 年に会社から派遣され、妻と子供 2 人と一緒に上海に来ました。その時、韓国元と中国の人民元とを比べると、韓国元にもっと力があったので、給料と手当で、上海でかなりいい生活をしました。しかし、2007 年の金融危機により、韓国の景気も悪くなり、会社も大きな損害を受け、2009 年に上海から撤退したが、我々の家族は上海に残ることにしました。主な原因は、今まで子供が中国で教育を受けたので、続けて中国語を勉強させたかったし、会社でストレスがある生活に飽きました。また、今の年で韓国に帰ったとしても、仕事がほとんどありません。そのため、虹泉路の「井亭天地」で韓国の服を売り始めました。」

L さんの二人の子供は、上海の復旦大学を卒業して、中国での留学生という身分を利用して、アメリカへ留学したという。L さんのように、初期には一時的に上海へ移動する予定だったが、上海へ定住する韓国人のケースが増加した。特に、上海での第二次韓流ブームによって、虹泉路を本場の韓流の街とした韓国人にとっての商業のチャンスが見え、虹泉路を中心にした韓国人コミュニティが拡大した。

第二次韓流ブーム後、虹泉路の韓国ドラマに出てきた焼肉屋、「紳士の品格」の中での青いサイダーとマンゴー味のヤシ乳、「継承者達」の中の主役がアルバイトをするチェーンの喫茶店 MANGOSIX などが上海の韓国ファンの必ず体験するところである。それ以外に、ドラマ「多く笑う日」に出たパン屋は入口に金秀賢（韓国で人気の俳優）の広告看板を並べ、多くの上海のファンに写真を撮られ、人々を引きつけていた。また、「秘密花園」のドラマの中で、Caffebene という喫茶店が登場したことがあり、張根碩（韓国で人気の俳優）が手伝って商売を招き寄せることもあった。

また、虹泉路を中心とした龍柏コリアンタウンでは看板にハングルの字が書かれ、韓国語だけでも生活ができる環境が整えられている。韓国人にとって、言語の障害がない虹泉路では韓国本土との間で頻繁な移動をしながら、ビジネスや日常生活を行う施設がある場所である。エスニック・レストラン以外に、美容院、韓国物品スーパーの K マート、韓国人商会、送金業者、韓国人国際学校、韓国の新韓銀行（上海虹泉路支行）なども揃っている。その中で、韓国系の金融機関は韓国系企業の上海への投資及び上海から韓国への送金

などの業務で、トランスナショナルな活動を活発に行っている。つまり、虹泉路は美食街というだけではなく、韓国本土とも密接なネットワークがあるトランスナショナルな空間でもある。そういった空間の中では、経済活動が主であるグローバル・シティでの特徴と利便性が現れ、資金の移動が人の移動をもたらしていると言えるだろう。

中国のメディアでも、虹泉路に関連するニュースでは虹泉路を上海の中での韓国として当地で人気があると報道されている。2014 年 2 月 25 日に上海の「東方網」[18]で、「実際に探訪した虹泉路―韓国ドラマのファンが「オパ」街へ」というタイトルで、虹泉路の光景についての記事が掲載された。2015 年 11 月 2 日には、「新浪網」[19]で、「上海に行くと、虹泉路美食街で必ず韓国料理を食べる店」というタイトルで、人気の料理店が紹介された。また、「搜狐網」[20]でも、「韓国に行かなくても、韓国の美食が食べられる虹泉路」などの記事で韓国ドラマで人気になった美食を紹介した。さらに、上海を背景としたドラマの製作にあたって、虹泉路が外国の風景及びファッションの街としてロケ地としても利用されている。

虹泉路の形成の経緯をみると、初期は駐在員として一時的に移動してくる韓国人が大多数だったが、定住期間が長くなるとともに、韓国人も多様した。虹泉路は上海における韓国人のコミュニティの形成に重要な施設であり、一方、上海のホスト社会では、韓国文化を表現する一つの場として姿を現している。このような虹泉路がヒットしたことにより、龍柏コリアンタウンは上海で現地人にも人気になり、さらに韓国本土との間でトランスナショナルな空間が形成され、国際コミュニティとして知られるようになった。

また、虹泉路は韓国人社会に限らず、上海における朝鮮族にとっても重要な存在である。延辺のエスニック空間について玄武岩[2013]は、「延辺の朝鮮族社会は韓国の衛星放送を中心にしたメディア空間に部分的に編入されることで、それにともなう韓国文化の流入も著しい」[玄武岩 2013：247]と指摘した。しかし、虹泉路が韓国の風景を上海で再現したことで、現実的に韓国文化を実感できる場所となり、朝鮮族文化の再定義及び彼らのエスニックアイデンティティの再構築にも大きな機能を持つようになった。無論、龍柏コリア

---

18 「実際に探訪した虹泉路―韓国ドラマのファンが「オパ」街へ」
http://sh.eastday.com/m/20140225/u1a7948780.html （アクセス日：2020/2/11）

19 「上海に行くと、虹泉路美食街で必ず韓国料理を食べる店」
http://news.sina.com.cn/o/2015-11-02/doc-ifxkhchn5900613.shtml
（アクセス日：2020/2/11）

20 「韓国に行かなくても、韓国の美食が食べられる虹泉路」
https://m.sohu.com/n/406009291/?pvid=000115_3w（アクセス日 2020/2/11）

ンタウンには虹泉路が果たした役割意外に、朝鮮族社会と韓国人社会の民族関係も関わっている。以下ではその関係について見てみる。

3. エスニック空間の中での朝鮮族社会と韓国人社会の民族関係

龍柏コリアンタウンの地域的コミュニティの形成過程をみると、朝鮮族社会と韓国人社会の交渉のなかで、形成されたと言っても過言ではない。以下では、彼らの民族関係を様々な側面から検討することによって、このエスニック空間のあり様を描いてみる。

3.1 エスニック空間の変容からみられる朝鮮族社会と韓国人社会の民族関係

1990 年後半から 2010 年の間、朝鮮族社会と韓国人社会のコミュニティの拡大とともに、紫藤路と虹泉路を中心とした龍柏コリアンタウンの規模も大きくなった。しかし、2010 年前後から、さまざまな要因が、龍柏コリアンタウンの変容をもたらした。

2008 年、韓国での金融危機によって韓国資本が大きな損害を受け、韓国系企業が上海での投資を回収し、上海へ派遣された韓国人社員を韓国へ呼び返したり、解雇したりして、韓国人社員が韓国へ戻る状況がしばしば生じた。また、ドル対韓国元が持続的に高騰し、韓国人留学生も韓国の親からの送金してもらうことが難しく、帰国したケースも増えつつあった。2008 年末、「鳳凰財経」というメディアでも、「金融危機がバタフライ効果を引き起こした－上海の韓国人はマンションの販売を余儀なくされた」というテーマで、韓国人が集中している龍柏・古北で購入した不動産を一般のマンションよりも低価で売った状況について詳しく報道した[21]。その時、破産した韓国人の中で若い人はベトナムなど東南アジアへ行く人が多く、年配の方は韓国へ帰国した人が多かった。

一方、2008 年の韓国の金融危機により、韓国資本を経済的基盤とする朝鮮族社会にも連鎖反応が起きた。上海における韓国系企業の撤資及び破産のなかで、龍柏コリアンタウンのなかでの中小の韓国系企業で働く朝鮮族に大きな衝撃を受けた。中小の韓国系企業の破産及び上海からコストが低い上海周辺都市への移転により、低学歴者の朝鮮族社員や韓国系大企業及び多国籍企業への就職が難しい朝鮮族は、上海を離れる現象がしばしばあった。

---

21 「金融危機がバタフライ効果を引き起こした－上海の韓国人はマンションの販売を余儀なくされた」
http://finance.ifeng.com/money/wealth/story/20081125/223441.shtml（アクセス日：2020/01/03）

また、龍柏コリアンタウンに大きく影響を与えたのは、2017 年 3 月 6 日の「サードミサイル事件」である。「サードミサイル事件」は中国と韓国の外交関係を悪化させ、中国で同年 3 月 15 日に「限韓令」が実施された。「限韓令」は韓流禁止令と称され、主に韓流文化の中国での禁止、また中国人観光旅行客の韓国への渡航を規制する政策である。その影響は韓国本土に限らず、上海における龍柏コリアンタウンにも及んだ。以下では、M さんと N さんの話を見てみる。

＜M さん＞　韓国人男性、虹泉路での料理店の店長

「2013 年、全智賢の「星からきたあなた」という韓国ドラマがヒットになるとともに、上海の人々はドラマの中で現れた俳優のファッションを真似したり、ドラマでの焼肉屋、コーヒー店などをわざわざ虹泉路へ探しに来ますね。上海での韓国料理店は多くの区に分布していますが、虹泉路こそどこでも韓国語の字で書かれ、韓国のドラマの中で出ている韓国の本場の味、または雰囲気が感じられるという理由で、地元の客が虹泉路を訪ねていますね。

虹泉路ではそういったいい光景が 3、4 年間続き、「サードミサイル事件」後、一気に変わりました。「サードミサイル事件」と関連があるロッテ社が中国全土で閉店し、虹泉路の韓国スーパーでも、中国人に反感を持たせないように、ロッテ社の食品などを棚から卸し、販売を中止しました。無論、単なるロッテ社の品物以外に、韓国の他の物品及び商売へも大きな影響を与えました。虹泉路で規模が最も大きな韓国のスーパーの例をあげると、「サードミサイル事件」の前までは、毎日の販売量が 10 万元を超えたが、今は販売量が一気に落ち、赤字と言われていました。」

＜N さん＞　朝鮮族男性、紫藤路での朝鮮族料理店の店長

「紫藤路は朝鮮族以外に、周りに住んでいる漢民族にも人気があります。紫藤路で朝鮮族の友達と食事をすることも多いですが、朝鮮族が漢民族の友達を民族料理に招待することも多いので、多くの地元の漢民族の客も多かったです。しかし、「サードミサイル事件」で中国と韓国の外交関係が悪化した後、地元民の客が明らかに減りました。単なる政治的な要因で、紫藤路で食事しに来ないと言うのはオーバーかもしれないが、できるだけ韓国と関連がある場所を漢民族が避けることは確かですね。」

以上のように、M さんと N さんの話から、「サードミサイル事件」によって中国と韓国の悪化した外交関係が、紫藤路と虹泉路にも大きな被害を及ぼしたことがわかる。上海のホスト社会で、紫藤路は中国での少数民族としての朝鮮族のエスニック街にもかかわらず、韓流によって人気になった街であるため、虹泉路と同じく韓国と関連がある街とみなされている。東北地区の伝統的朝鮮族コミュニティでは、朝鮮族が少数民族としてよく知られる一方、上海のホスト社会では朝鮮族の存在は韓国人と関連がある曖昧な存在である。上海では外来人口であり、定住した期間が短いという原因以外に、グローバル・シティの上海では多くのマイノリティが集まる場であるため、区別がつかないという理由もある。

また、龍柏コリアンタウンは 1990 年代後半から 20 年以上の発展により、生活圏と商圏が整い、韓国人と朝鮮族の日常生活に便宜を図ってきた。元々中国は低地価、低人件費などで大量の韓国資本を吸引したが、上海でのコストの高騰は、虹泉路と紫藤路に大きな影響を与えていた。紫藤路と虹泉路を主としたエスニックな商業空間だったが、2017 年末に「龍柏愛琴海センター」と「万象城」という二つの大きなショッピングモールができ、その商圏が拡張された。

＜0 さん＞　朝鮮族男性、料理店のオーナー

二つのショッピングセンターができた後の紫藤路への影響

「紫藤路はもともと朝鮮族の民族特色がある小さい商業街として、管理はしっかりしていませんでした。でも、龍柏コリアンタウンの規模が大きくなり、2010 年に 10 号地下鉄のステーションが設置された後、交通が便利になり、きちんと管理するようになりました。紫藤路は狭いので、専用の駐車場がなく、食事をしにきたお客は店の前に勝手に駐車しましたが、2015 年に紫藤路にカメラが設置された後、駐車が難しくなり、お客が大幅に少なくなりました。

また、2017 年にショッピングモールができる前から、紫藤路の店舗のオーナーはそのモールができると客が急増するという予測により、店舗の家賃を大幅に上げました。でも、二つのセンターができた後、多くのお客がそのセンターに吸引され、紫藤路でのお客が急に少なくなったため、商売が急降下し、私が知っているかぎり赤字までになった店もかなり多いですね。紫藤路での朝鮮族の店の中で、赤字になってない店は 5 つしかないと知っていますが、店を売りたくても、紫藤路の店舗の状況が詳しく知られている朝鮮族社会では、店はなかなか売れないです。」

虹泉路は紫藤路と同じ状況で、ショッピングモールというローカル資本の進出が紫藤路と虹泉路の商業街に打撃を与えると同時に、その商圏が成熟するのに従い、地価が高騰し、さらにエスニック街の衰退は加速した。つまり、グローバル・シティの中での紫藤路と虹泉路という龍柏コリアンタウンは、ローカル的資本との対抗の中で、その弱さが顕著になった。

このように、龍柏コリアンタウンはグローバル・シティに置かれていて、中国と韓国の外交関係及び経済環境などに影響を受けやすい側面がある。つまり、龍柏コリアンタウンという「上海の中の韓国」の繁栄と衰退はそれらの動向に左右される一方、そこには朝鮮族社会と韓国人社会が上海で置かれている位置づけ及び彼らの関係も反映されている。朝鮮族が中国人として本国にいる状況なのにも関わらず、韓国人と同じく、外国にいるかのように中韓両国の挟間に置かれているのである。

また、上海での韓国資本の影響は朝鮮族社会にも連鎖反応をもたらした。その危機の中で、ディアスポラとしての朝鮮族がどのように対応しているか、またそれが韓国人社会との民族関係にどのように影響されているかを、次節では朝鮮族のインタビューを通して見てみる。

3.2 上海朝鮮族から見られる朝鮮族社会と韓国人社会の民族関係

以下では、韓国系企業での朝鮮族社員のＰさんと韓国の資本を戦略的に考える朝鮮族社長Ｑさんのインタビューを通して、朝鮮族と韓国人の民族関係を見てみる。

＜Ｐさん＞　朝鮮族男性、韓国系企業の朝鮮族社員、韓国系企業と朝鮮族社員との葛藤

「朝鮮族は大都市や沿海都市の韓国系企業での就職を当然なことだと思う傾向があり、在中韓国系企業でも朝鮮族社員がいないことはほとんどありません。近年になると、韓国人の上司が中国での滞在期間が長くなるとともに、中国語が上達したため、朝鮮族の言語能力が必ずしも必要にならない状況です。また、今は韓国へ留学した漢民族が韓国系企業へ就職することもたくさんあり、韓国語と中国語ができる中国人は朝鮮族に限らないですね。返って、現在では朝鮮族社員よりも漢民族を優先する韓国系企業も増えてきました。それには、様々な要因がありますが、朝鮮族が中国ではマイノリティであるため、ホスト社会でのネットワークが弱いことなどが考えられます。

朝鮮族側でも、昔は韓国系企業へ就職するのが大多数だったが、現在は企業の選択順位では、欧米企業が優先で、その後日系企業、中国の国営企業、韓国系企業です。無論、朝鮮族は英語教育よりも、日本語教育を受けたので、日系企業が圧倒的に多いです。朝鮮族と韓国系企業との関係がお互いに弱体化したのは、アイデンティティの問題、社員福利とも大きな関係があります。また、会社での自己実現というと、韓国系企業と日系企業とも同じですが、上司が主に韓国人、日本人で、現地化が徹底されていません。それも、私が 5 年前に××大手の韓国系企業から離れた大きな原因になりますが、中国人はよくて課長クラスの地位にしか着けず、部長クラスまでは行けません。そのため、多くのエリート朝鮮族は韓国系企業から離れ、他の多国籍企業への転職か創業を選ぶ人が増えてきました。」

P さんは、韓国系企業と朝鮮族社員の関係について述べた。韓国系企業が上海へ進出した初期と比べ、現在は韓国人上司が言語の困難を乗り越える上に、韓国語ができる中国人もいるため、韓国系企業では朝鮮族のバイリンガルとしての価値が落ちた。また、朝鮮族でも、数年間の経験によって、韓国系企業で自己実現するのに限界があり、韓国系企業より優位な外国系企業への進出を目指していた。つまり、韓国系企業と朝鮮族の関係は、最初の密接な関係から、韓国系企業の社員への要求、朝鮮族社員の就職先についての要求にズレがあることから変容していることが考えられる。

＜Q さん＞　朝鮮族男性、韓国との貿易会社の社長

2008 年韓国金融危機以後の朝鮮族企業家の韓国資本からの転換

「90 年代初期、韓国が経済強国なら、上海へ進出した韓国系企業及び韓国資本は朝鮮族社会にとって、心強い存在でした。朝鮮族の上海における韓国系企業での就職先は無論、朝鮮族の経済人にとってもきわめて重要です。朝鮮族の経済人は中国が他国とのグローバル的な経済ネットワークに繋がった時間が短いという事情と、英語ができない人が大多数であるため、グローバル化しにくい状態です。しかし、韓国の経済人は世界各地で経済に関する協会を設置し、ネットワークができているので、グローバル経済活動が展開しやすいです。そのため、上海における朝鮮族経済人は韓国の海外でのネットワークを利用して、外国とのやり取りをするのが安心で、合理的な選択だと思われています。つまり、朝鮮族社会の韓国資本への依

頼関係は、単なる在中韓国系企業での就職先以外に、この部分も大きな部分を占めています。

なお、2008 年韓国金融危機及び上海の急速な経済発展により、上海における韓国系企業の総合的実力は、他の他国企業に対し、90 年代と比べて低下しました。また、中国の北方では韓国系企業はまだ大きな勢力を持っていますが、上海では韓国系のグローバル企業及び大手企業以外、中小企業は朝鮮族企業と比べると大きく優勢ではないと思います。そのため、2008 年の金融危機後、多くの朝鮮族の企業は韓国資本への依存から、日本資本を対象とした経済戦略へ変えたケースもしばしばあります。無論、韓国系企業は未だに朝鮮族社会の経済に大きな影響を与え、全ての朝鮮族企業が韓国資本を除いたビジネスをするわけではありません。上海での大手の韓国系企業は上海で現地のネットワークができると、韓国の商会及び経済的団体から離れるのが普通です。しかし、朝鮮族の中小企業は上海で「报团」現象が著しく、経済力も社会参加度、ネットワークからみても、上海における韓国系中小企業よりは、優勢ですね。」

Q さんは、企業家の角度から、上海における朝鮮族社会と韓国系企業と韓国資本との関係について、戦略的に分析した。上海の経済環境の変化により、上海における朝鮮族企業と韓国系企業との依存関係と競争関係にも変容がもたらされている。ある程度の経済的蓄積がある上海朝鮮族社会では、グローバル・シティの上海と韓国との経済関係の変容の中で、韓国系企業及び韓国資本に依存する一元的な経済形式ではなく、多元的な経済の重要性を意識するようになった。それは 2008 年の経済危機以降、韓国系企業と韓国資本に頼る経済構造についての不安感が誘発されたことが背景にあるからである。

このように、中国及び朝鮮族社会の経済力の向上によって、上海における朝鮮族社会・韓国人社会と、韓国系企業・韓国資本との経済関係の構造は明らかに弱体化していた。つまり、現在では昔と比べ、上海における朝鮮族社会の韓国資本への依存度は低くなり、その経済関係がますます弱まっている。

1990 年以降、朝鮮族と韓国人の関係は経済構造の中で形成されたと言っても過言ではない。つまり、朝鮮族の韓国への出稼ぎ、中国での韓国系企業への就職及び韓国との貿易など、中国であれ韓国であれ経済関係の中で、朝鮮族と韓国人の接触が始まった。このよ

うな経済関係の不均等の下で、過去最近 30 年間接触した経験により、韓国人と朝鮮族の間には民族の中でのヒエラルキーが形成された両者に上下関係が存在するのはもはや暗黙の了解事項である。

そのような状況は、上海の朝鮮族社会と韓国人社会の間でも、初期には存在していた。P さんと Q さんはまるで、朝鮮族なら知っているのが当たり前、言うまでもないという態度で、差別などの話題への言及は少なかった。しかし、韓国への経済的依存度が低下する環境の変化、及び韓国人と接触した経験の中で、彼らには朝鮮族社会と韓国人社会との関係は同じ民族であることを強調するよりも、朝鮮族社会の経済力の向上による、平等意識の要求がみられた。無論、上海における朝鮮族社会と韓国系社会が未だに緊密な経済関係を保っていることについては否定できない。しかし、韓国系企業と韓国資本は上海朝鮮族の社会にとって、唯一の選択というより、多くの選択の中での一つになっていることは確実である。ある意味では、グローバル・シティの上海であるからこそ、そういった共存関係の形成が可能であるとも言えるだろう。

3.3 朝鮮族社会と韓国人社会の協会と「朝鮮民族まつり」

龍柏コリアンタウンという地域的装置以外に、協会と団体も朝鮮族社会と韓国人社会のコミュニティを形成するのに重要な装置である。上海における朝鮮族社会と韓国人社会の協会はそれぞれの経営で、独立した部分もあるが、大きな「朝鮮民族まつり」という文化活動を行う時には、朝鮮族社会と韓国人社会の協会が共同に担当し、民族関係を促している。その中で、世界韓人貿易協会（上海）は朝鮮族企業家 70%と韓国人企業家 30%で構成され、互いに情報を共有し、経済活動を行っている上海コリアンの中で知名度が最も高い協会である。

朝鮮族の上海への移動初期には、主に相互扶助と親睦を深めるため、地縁・学縁を中心とした団体及び協会が多かった。しかし、定住期間が長くなるとともに、上海を中心とした華東圏及び韓国本土とのコリアン・ネットワークの拡大、朝鮮族の文化継承または朝鮮族社会が上海の主流社会に編入するなどの目的で組織された社会団体が 40 個以上まで発展された。代表的な団体として、延辺大学上海校友会、中国朝鮮族科学技術者協会（上海分会）、上海朝鮮族女性企業家協会、上海朝鮮族老人協会、中国朝鮮族医師連盟などが挙げられ、各団体の役割と機能が豊富である。

上海における韓国社会の側でも上海で社会団体を形成しており、上海韓国人商会、韓国

貿易協会（上海支社）などが代表的なものである。その中で、上海韓国人商会は最初大企業での非公式な交流があったが、2003 年に正式に命名され、600 社以上の韓国系企業で構成されている社会団体である。主に、韓国系企業が上海へ進出するための法律及びサービスの提供、在中の外国商会との交流と協力、中国国内で重要な慶事への参加及び支援を通した韓国人イメージアップなどの役割を担い、上海で活躍している。

このように、上海における韓国社会と朝鮮族社会がそれぞれ独立した協会を運営しているが、上海でのコリアンの共益のために、文化的交流を活発に行っている。最も代表的な事例として、一年に一度行う「朝鮮民族まつり」がある。2004 年から、龍柏コリアンタウンで「朝鮮民族まつり」という韓国文化祭が年に一度行われ、主に韓国の伝統的な食品の大型ビビンバを介して、上海におけるコリアン社会の最大のイベントとして知られている。

「朝鮮民族まつり」という活動を通して、文化祭は上海における朝鮮族と韓国人が文化的次元で共通性を高め、交流及びメンバーシップを相互確認することができ、帰属意識ならびに関係性を形成する手段としても機能している。また、グローバル・シティでの韓流を元にして、韓国人社会は朝鮮族社会と上海の地元の人々とが交流する場を作り、経済にも影響を拡大し、グローバルな意義を持っている活動でもある。

2014 年 10 月 18 日に、10 周年の「朝鮮民族まつり」のケースをみると、70 社以上の韓国系企業から成る上海韓国人商会が主な支援を行ったほか、上海韓国総領事館、駐上海朝鮮族企業家協会、韓食財団からも後援があった。

＜R さん＞　世界韓人貿易協会（上海支部）の元会長

「昔は上海での朝鮮族社会と韓国人社会の活動は別々にしたが、現在はほとんど一緒に行います。力を合わせると、資金も節約できる一方、その活動の影響力が大きくなります。今は、上海である程度の規模がある韓国人協会と朝鮮族協会が龍柏コリアンタウンの中での同じビールで事務室を設置することもあります。それは交流がうまく、繋がりももっと緊密になりますね。」

このように、上海における朝鮮族社会と韓国人社会の上位レベルでは、朝鮮族社会と韓国人社会を韓民族同士と統合的に考え、お互いに力を合わせ戦略に上海での共存を求める方向を強調していた。一方、個人レベルでは、未だにも朝鮮族社会と韓国人社会との葛藤

とその経験は傷に残され、趙の話を借りると、「相互一定の距離を置きながら生活するという微妙なバランスがみられる。」である。

3.4 上海における朝鮮族と韓国人が交流する多様なネットワーク

―ウェブサイトと新聞での民族関係のあり様

コリアンのウェブサイト及び新聞は、上海における朝鮮族と韓国人に活発に利用され、彼らの移動と定住に大きな便利を図っていた。ウェブサイトには、モイザサイト http://www.moyiza.com/ 、イルイサムサイト http://www.123123.net/main/、シャンハイタン http://www.shanghaitan.net/などがあり、上海フリーペーパーもある。

モイザサイトは、2000 年に運営を始め、現在は会員数が 70 万名に達し、韓国語を使用言語とするものの中では、中国で最も規模が大きい海外同胞サイトである。主な会員は全世界に定住している朝鮮族及び韓国人で、韓国語が使用可能な国内外での訪問客が相当数を占めている[22]。サイトを設立した趣旨は、朝鮮族のグローバル化を実現するため、インターネットで国境がない一つの同胞社会を作ると同時に、多様な商業的モデルと付加サービスでもっと多くの交流と経済の流れを作るために努力するということである。

モイザサイトの中の「韓民族」という欄には、「お知らせ/慶事」・「在中韓人」・「ワールドコリアン」・「人物企業」・「団体協会」・「韓民族一般」などの項目があり、中日韓における朝鮮族のニュースを知らせている。また、地域別情報では、上海を含めた大都市、沿海都市、延辺、韓国に関する情報が掲載されている。「飲食店」・「ショッピング/生活」・「旅行/レンタカー」・「宿泊」・「物流/貿易」・「医療/美容」・「不動産/インテリア」・「コンサルティング/金融」・「製造/施工」・「インタネット/通信」・「結婚/イベント」・「娯楽/休憩」・「学校/学院」・「広告/印刷」・「団体/機関」などの項目に上海へ移動する朝鮮族と韓国人のために、生活から職業までの情報が掲載され、上海での生活に便宜を計っている。

モイザサイトは全国の朝鮮族を対象にするが、シャンハイタンとイルイサムというサイトは上海を中心とした江蘇省、浙江省、安徽省の華東経済圏での地域レベルの情報を提供したサイトである。主に、「会社の広告及び求人」・「お知らせ/モイム/バーゲン」・「上海生活」・「ホテルと民泊の情報」・「友達探し」・「婚姻紹介」・「モイムなどで朝鮮

22 モイザサイト http://www.moyiza.com/moyiza_about.php（アクセス日：2019/01/03）

族のネットワークを作る」・「生活情報」を載せている。

＜S さん＞　朝鮮族女性、紫藤路でスーパー経営

「もともと、龍柏コリアンタウンには多くの仕事紹介所がありました。特に小規模の韓国系企業での朝鮮族社員の求人、また韓国の工場が求める朝鮮族の出稼ぎ者、通訳のアルバイトなどの仕事は費用の問題で大きな中国のサイトに広報できず、朝鮮族が経営している仕事紹介所で仕事の応募と募集をしていました。しかし、今はコリアンのサイトで広報すれば、費用も安いし、韓国語で書いているので漢族はそのサイトに入っても分からないため、朝鮮族がその対象になりますね。多くの朝鮮族がサイトを利用するために、現在の龍柏コリアンタウンでは仕事紹介所がなくなりました。」

S さんの話から、上海の現場で就職活動を行うより、上海へ移動する前にインターネットで情報を把握すれば不安が解消することがわかる。コリアンのサイトは、朝鮮族と韓国人が上海へ低リスクで移動するための重要な情報源である。また、サイトは就職情報以外に、不動産情報及び民泊なども掲載され、現地で生活を始めようとする朝鮮族の重要な情報源となっている。特に、韓国語で書かれたサイトは、一般のホームページより彼らに安心感と信頼感を与えている。そこに掲載される就職情報と経済貿易、金融は信頼をもとにした分野として、朝鮮族と韓国系企業及び韓国資本とのネットワークを繋げる場である。

上海フリーペーパーでは、上海での国際ビザの収得、法人設立、コンサルティング、韓国語弁護士の業務、低金利の貸与などの情報が掲載され、上海の朝鮮族と韓国人の海外への企業設立及び上海での企業の設立に便宜を図っている。また、上海での朝鮮族の飲食店、娯楽場所の紹介、韓国の餅屋、東北の米の配達、民泊とホテルの紹介も行い、上海での朝鮮族の生活に役に立っている。それ以外に、韓国のテレビを設置する広告もあり、上海における韓国人にとって日常生活に必要であり、朝鮮族側でも韓国のメディアに馴染み、活発に利用している状況も考えられる。

このように、情報ネットワークの多様性は、龍柏コミュニティの一種のインフラになっている。また、上海の生活の中で、朝鮮民族が価値観を共有するヴァーチャル・コミュニティが形成され、そのような過程の中で仲間意識は強化される。金花芬[2017]は日本における朝鮮族のヴァーチャル空間について、「ヴァーチャル・コミュニティの規模は、ある

意味では現実のコミュニティより大きいのである」[金花芬 2017：72]と指摘した。一方、上海におけるヴァーチャル・コミュニティはグローバル・シティである上海を拠点とした、トランスナショナル空間の一つの形式である。

4. おわりに

本章では、龍柏コリアンタウンを取り上げ、上海における朝鮮族社会と韓国人社会の民族関係を検討し、そのエスニック空間としての有り様を論じてきた。

龍柏コリアンタウンはディアスポラの朝鮮族が更なる移動の中で、作り上げたエスニック空間である。延辺は政治的に作られたエスニック空間であり、朝鮮族社会は中国の主流社会と韓国社会のどちらにも吸収されなかった一方、龍柏コリアンタウンは韓国人社会との様々な関係の中で作り上げられたエスニック空間である。龍柏コリアンタウンは上海に置かれているが、朝鮮族社会と韓国人社会との民族関係の中で、もうすでに国内外の枠を超えた場になっている。つまり、龍柏コリアンタウンは朝鮮族社会の重要な拠点になっており、彼らの上海への移動が国内移動と海外移動という境界線を越える移動であることを象徴する場所とも言えるだろう。

また、更なる移動の中で、上海で朝鮮族コミュニティを再建できる重要な要因は、故国の韓国とも大きく関わっている。韓国との経済関係、文化的な交渉、多様なネットワークによる情報の共有、故国とのトランスナショナル関係の中で、エスニック空間が形成されるようになり、そうした事情は他の少数民族の上海への移動及び定住とは異なる。さらに、これらは朝鮮族が一般の少数民族による単なる個人的な大都市への移動とは異なり、集団的な移動を行う重要な一因ともなっている。

上海のみならず、朝鮮族はディアスポラとして世界各地でエスニック空間を形成しているが、他の土地では朝鮮族社会と韓国人社会の民族関係は大きく変わらなかった。例えば、延辺、韓国、ニューヨークなどの事例を挙げると、韓国人社会への依存関係によって、両者の関係はほとんど不平等であった。経済発展が遅れた延辺の朝鮮族と韓国人、韓国における出稼ぎ労働者が大多数の朝鮮族とマジョリティの韓国人などの関係にも上下関係が成り立っている。また、魯ぜウォン[2010]はニューヨークにおけるコリアンタウンの研究の中で、「移民一世の立場からみると、韓人は中国朝鮮族を同じ民族というよりは、むしろ労働力として捉える傾向がみられる。一方の中国朝鮮族にとって[ニューヨーク]フラッシングは就業の機会を得る場所という意味をもっている」[魯ぜウォン 2010：61]と指摘

している。他の地域と比べ、上海においては高学歴者が多い朝鮮族の社会と韓国人社会との差異が小さい状況化で、上海では中国人としての朝鮮族が外国人の韓国人よりは有利な側面もあることを加えて、朝鮮族社会と韓国人社会の関係は徐々に平等及び共存関係として成立してきた。

移動が日常化している朝鮮族社会にとって、延辺の後、次の移動先の上海では、朝鮮族社会と韓国社会は共存関係に基づくエスニック空間を形成していた。ディアスポラであり少数民族である朝鮮族社会と韓国人社会との関係を考察した上で、次章では、上海朝鮮族の協会の経営を通して、朝鮮族社会が上海のホスト社会で何を求めているか、言い換えれば、ホスト社会の上海で彼らはどのような集団として表出したいのかについて考察する。

第 3 章　上海における朝鮮族コミュニティの形成
―協会を中心に

1.はじめに

更なる移動の中で、協会は朝鮮族をつなぐ重要な絆とネットワークとして、異郷での朝鮮族コミュニティの形成に欠かせない要素である。本章では、上海における朝鮮族社会の中で、特に影響力がある「中国朝鮮族科学技術工作者協会上海支部」、「中国朝鮮族医師連盟」、「上海朝鮮族女性協会」と「世界韓人貿易協会上海支部」について、どのような理念を持ち、どんな経緯で成立し、どのような活動を実践しているかを明らかにする。それらを通して、上海における朝鮮族コミュニティの形成プロセスと、朝鮮族がホスト社会で確立するアイデンティティ形成に果たす機能を明らかにすることを目的とする。

2.中国朝鮮族科学技術工作者協会（上海）（KCSEA（上海）

2.1KCSEA（上海）設立の経緯と支援状況

中国朝鮮族科技工作者協会は、중국조선족과학기술자협회 The Korean-Chinese Scientists and Engineers Association の朝、英の二言語による名称を持っている。1989 年 7 月 21 日、延辺大学の姜貴吉教授が先頭となり、民間団体として設立したが、2000 年に、法的に認められている国家級社会組織へ変更された。現時点では、民政部に登録され、業務主管部門は国家民族事務委員会に（民委函【2000】109 号）許可され、業務指導部門は吉林省民委員会である。主に朝鮮族科学技術者からなる学術的団体で、「科学教育興国」の方針に基づいて、国家の科学技術の進歩と朝鮮族教育技術の事業を発展させて、中国の科学技術と朝鮮族の集中地区の経済発展に貢献することを主旨とする。

上海での朝鮮族社会は高学歴者が多く、中国朝鮮族科学技術工作者協会（以下では KCSEA と略す）の会員としての上海の朝鮮族学者が設立を提議したのに加え、KCSEA の本部でも上海で協会を設立する必要性を感じていた。延辺にある KCSEA 本部の毎年の会議に参加していた上海の学者が、上海で参加していない学者に本部の資料を回して会議の情報を伝え、KCSEA の上海支部を設立することを計画した。2007 年 5 月 18～20 日、吉林省延吉市で KSCEA 第六回会員代表大会が開かれた時に、上海で仕事をしている 9 名の科技工作者が同協会の理事になり、2 名が総務理事に任命された。その後、2017 年 6 月 10 日、2007 年 11 月 14～17 日、18～21 日の 3 回の全体会議（インターネット会議）での討論を通して、2008 年 3 月 1 日の第一回学術交流会を行うことを決め、そこで中国朝鮮族技術工作

者協会上海支部（KCSEA（上海）と略す）が正式に設立された。

KCSEA（上海）は国家級社会団体として、初期にはKCSEAの本部から多少運営資金を獲得したが、それだけでは不足だった。上海朝鮮族の企業家は資金難で運営が難しい状況を知った後、1000元から5000元を支出し、KCSEA（上海）の活動を支援した。それは一時的には力になったが、KCSEA（上海）が長期計画を体系的に立てるのには困難があった。

そのため、2010年4月8日の第5次学術交流会議でKCSEA上海後援会（以下では上海後援会と略す）が成立した。上海後援会には上海の朝鮮族の企業家と朝鮮族の学者16人がいる。主に二つの機能があるが、一つは、KCSEA（上海）の活動を後援することである。具体的には、学術交流会の開催と論文集の編集、上海朝鮮族の大学生への支援などがある。もう一つは華東地区の朝鮮族週末学校の運営への後援である。また、上海朝鮮族の子供の宴会、上海朝鮮族の子ども図書館の運営、週末学校の先生への補助金などの支給も行っている。

上海朝鮮族コミュニティが拡大するとともに、上海後援会への支援範囲が拡大し、また支援分野も増加したため、2017年8月には上海後援会は上海朝鮮族文化教育発展後援会に改編され、組織機構も一層体系化された。理事が40名までに増加し、年に理事には5000元、常務理事には10000元から最高50000元まで支援する朝鮮族の企業家もいて、年間40万元程度の寄付金を集められる。

上海朝鮮族文化教育発展後援会は、上海後援会の時代に支援を始めた活動以外に、老人協会、朝鮮族歌舞団などの社会団体にまで支援を拡大した。上海朝鮮族老年協会（老年協会と略す）の会員は、主に東北地区と韓国から、孫の面倒をみるために上海へ来た高齢者が大多数で、700名いる。年間活動内容はに宴会と運動会の開催である。

長寿宴会は朝鮮族にとって伝統的な祭りであり、子や孫が60歳・70歳の親のために開く宴会である。その伝統を続けるために、上海の老人協会では上海の朝鮮族の高齢者を集めた宴会を行い、彼らを喜ばせた。最近では、2018年5月13日の母の日に上海朝鮮族老年協会が「古稀耄耋長寿宴会」を主催し、102名の70歳以上の朝鮮族を含む600名以上が祝賀会に参加した。

上海の朝鮮族社会にとって、こうした機会の目的は、朝鮮族の子供に老人を尊重させ、一方で幼いものを慈しむという伝統を継続させるためである。非伝統的コミュニティで朝鮮族の文化を継承する活動は、老人協会への支援以外に、上海での朝鮮族歌舞団への支援によって、民族の芸術の伝播及び文化継承を目的とするものがある。

このように、KCSEA（上海）は上海における朝鮮族の学者が発起し、朝鮮族企業家の積極的な支援によって維持されている。また、KCSEA（上海）が応援する方向をみると、次世代の養成、伝統的文化の継承など、上海での朝鮮族コミュニティの発展が主な目的となっている。

2.2KCSEA（上海）の学術交流の活動及び学会誌から見られる現況

KCSEA（上海）は、毎年一回の学術交流会の開催と、論文集の編集が最も重要な行事である。論文集はKCSEA（上海）の成立と発展の重要な記録である。

2008年1月に、KCSEA（上海）の学術交流会特集の創刊号が出版されたが、KCSEA（上海）ではなく、KCSEA本部の論文集23号として編集された。創刊号の主編は林進虎で、執行編集は朴昌根である。内容[23]は、基調講演が李相栄[24]の「人類航天之路」、朴昌根[25]の「数学と系統科学」、車順愛[26]の「物理と科学」、許文燮ら[27]の「生物と医学」、張相国ら[28]「経済と経営」の5つの分野に分けられている。つまり、KCSEA（上海）の第一回学術交流会では、延辺の本部から大きな支持を受けて、上海における科学と技術の討論会が行われたが、論集にはその内容と学術的研究報告が掲載された。

以下では、11回にわたって開催されたKCSEA（上海）学術交流会の交流概況を示す。

表3-1　KCSEA（上海）学術交流会交流概況

次回/日時→ 回（年月日）	招待講演人数	科学技術科 フォーラム 交流原稿（篇）	企業 フォーラム 交流人数（人）	学習 フォーラム 交流人数（人）	総合 フォーラム 交流原稿（篇）	参加人数
1（20080301）	1	6	2	4	2	88

23　人物の職務は2008年の出版当時のものである。
24　李相栄：上海航天局科学技術委員会副主任　研究員
25　朴昌根：上海復旦大学国際問題研究員　韓国研究センター
26　車順愛：上海交通大学化学化工学院教授、長江学者
27　許文燮：上海交通大学医学院教授
　　李永財：南通大学第二附属病院神経外科　主任医師　教授
　　全哲学：上海復旦大学生命科学学院　副教授
　　鄭哲彬：上海遠農医薬科学発展会社の総経理、日本富山医学薬科大学　博士卒業
28　張相国：上海水産大学経済管理学院教授、博士指導教官
　　金鐘范：上海財経大学　財経研究所　研究員、博士指導教官
　　朴国東：上海唯然信息科技会社　総経理

2（20090411）	0	6	2	3	2	58
3（20100411）	1	2	4	2	2	90
4（20110490）	2	3	4	5	1	120
5（20120408）	2	3	4	4	2	100
6（20130414）	1	3	3	9	1	97
7（20140413）	1	3	4	15	2	115
8（20150412）	1	3	3	13	2	93
9（20160410）	1	3	4	14	1	102
10（20170409）	1	4	4	13	0	110
11（20180415）	1	3	2	19	0	120

筆者作成（第 9、10、11 次学術交流会論文集参考）

表 3-1 のように、11 年間の KCSEA（上海）の学術交流会は、主に 5 つの部分に分けて行われ、基調講演、科学と技術の討論会、企業討論会、学習討論会及び総合の討論会から成る。参加者は毎回 100 人前後で、上海の朝鮮族の学者と教授、企業家が半数を占め、大学生が半数程度おり、韓国と日本の朝鮮族の学者もしばしば招待される。

基調講演、科学と技術の討論会と総合の討論会は主に学者と教授が担当している。具体的には、基調講演者は研究分野の学術に対して大きな貢献があった者と上海の朝鮮族社会で人望がある学者である一方、科学と技術の討論会では、上海の朝鮮族の学者と知識人が自己の分野の紹介及び研究成果を報告する。また、総合討論会はその年の状況によって内容が決められる。

2013 年から、学術と研究に関する討論会を主とした KCSEA（上海）では、学習討論会の比率が圧倒的に高まるという変化があった。それは、2012 年 12 月に「上海高等院校朝鮮族学生奨学金」（以下「奨学金」と略す）が設立されたため、学生が学術交流会での参加者にとどまらず、KCSEA 上海の主役にもなったからである。

KCSEA（上海）の不完全な統計によれば、上海には 500 名近くの朝鮮族の大学生がおり、優秀で修士の進学試験を免除されたケースもある。近年は修士も課程在学者も増えてきた。上海で朝鮮族の大学生が増えるとともに、KCSEA（上海）では、「上海の中国朝鮮族の中から、若い新世代の知識人が出ること、つまり科学者、大学教授、医者、エンジニア、ま

た人文社会科学領域での専門家、学者が出ることを願う[29]」という発想で、大学生を支援している。

2013 年から 2017 年まで、毎年 10 人前後の朝鮮族の大学生に奨学金を支給したが、2018 年に上海朝鮮族文化教育発展後援会になるとともに、後援の資金の充足によって、奨学金を得る学生が 20 人にまで増え、支援金額も当初 1 年で 2 万元の奨学金だったのが、5 万元にまで増加した。また、朝鮮族の大学生の就職に有利になるように、本部の名義で奨学金を発給し、大学生の履歴書に記載できるようにした。

KCSEA（上海）は、大学生連合会も組織し、上海朝鮮族の大学新入生会、大学運動会、民族芸術会への支援も惜しまなかった。その上、様々な活動も行った。例えば、朝鮮族の大学生の上海での定住希望及び夢を叶えさせるために、「私の上海での夢」を主題として、4 回の活動を行った。2018 年 3 月 20 日には、上海の朝鮮族の中で有名な朴哲弁護士を招待し、華東政法大学法学院の学生に、「弁護士はどのような素質を備えなければならないか」というテーマで講演などを行った。また、上海朝鮮族大学院生会を通じた大学院生への奨学金の支給、上海朝鮮族青年の修士・博士課程の経験についての討論会などもこれからの課題とされている[30]。

企業討論会では、上海の朝鮮族の企業家が自分の会社の紹介及びその業界についての分析を行い、また上海で起業した経験を紹介する。企業家のネットワークを広げ、交流する以外に、起業を考えている朝鮮族の若者に成功した経験を伝え、後輩に啓発を与え、次世代の企業家を養成することなどを目的として行っている。また、大学生に上海での優秀な先輩、教授、企業家を会わせ、朝鮮族の誇りを持たせる目的もある。

このように、KCSEA（上海）の学術交流会は、上海における朝鮮族の学者と教授の学術交流を目的に成立し、各分野での研究を報告し合うことで、上海における朝鮮族の企業家とネットワークを広げている。また、KCSEA（上海）の学術交流会の場を通して、上海における朝鮮族の大学生を次世代の人材として養成することも大きな目的の一つである。

2.3KCSEA（上海）の問題点と変化

以下では、KCSEA（上海）の設立目的、対象分野、学者の参加動機を、10 年間会長を担当した前会長のインタビューから検討する。

---

29 中国朝鮮族科技工作者協会（上海）第九次学術交流会論文集 2016/4/10 に開催、13 頁。
30 中国朝鮮族科技工作者協会（上海）第九次学術交流会論文集 2016/4/10、15 頁。

前会長の話：

「上海の面積はソウルの 10 倍にもなっているが、朝鮮族の人口は上海人口の中で 0.1%で、1400 名の中の 1 人でしかありません。そのため、上海では朝鮮族同士が積極的にチャンスを作って会わなかったら、会うのはきわめて難しいと言えます。特に、上海での各分野の朝鮮族の学者の場合も同じですが、朝鮮族社会を形成するのには、お互いに会って交流することが非常に大事だと思います。

現在まで、学術交流会は 11 年間で体系的になり、大きな発展を遂げてきました。しかし、困難な点も存在しています。KCSEA 上海での学者は研究分野が違うのが普通ですね。理工系は同じ専攻だとしても、研究する学問に小さな違いがあれば、お互いになかなか理解できないことが多いです。自分の研究分野で優れた研究を KCSEA 上海の学術交流会でそのまま発表すると、会員は理解できない場合が多いです。つまり、KCSEA（上海）で発表しても、他の学会での発表と違い、同分野の学者と交流し、自分の成果を高めるのは不可能です。そのため、他の会員から発表内容についてほとんどコメントをもらえないし、発表はできるだけ一般の会員が分かりやすい内容で発表するのが大事です。」

前会長は KCSEA（上海）での学術交流の状況について、一般の学術交流会とは違う点と困難な点を挙げた。それらの点は、一方では、KCSEA（上海）の意義につながっている。一般の学術交流会は同分野の研究者と学者との交流が大多数であるが、KCSEA（上海）は同分野というより、上海における朝鮮族であることが参加者の共通点である。つまり、彼らが KCSEA（上海）へ参加するのは、自分の専門分野の交流を促進するためというより、上海で朝鮮族の学者がどのような分野で活躍しているかを知り、朝鮮族間のネットワークを繋ぎ、朝鮮族社会の形成に貢献することが主な目的の一つである。

続いて、学術交流会の意義について前会長は、以下のように述べた。

前会長の話の続き：

「元々知らない人たちが学術交流会の場を借りて、お互いに協力して事業を達成できるので、KCSEA（上海）を続ける意義が広がり、我々も励まされました。例を挙げると、学術交流会の会議中、上海交通大学の朝鮮族の教授が研究を発表した時、その技術分野の朝鮮族企業家が聞いていました。その後、その教授とその朝鮮族企

業がお互いに協力して、研究所を設立したケースもありました。また、化学分野の朝鮮族の教授と医療系の朝鮮族の企業がつながる事例も少なくないです。

この場で、学者と企業家以外に、朝鮮族の大学生と教授を会わせ、学生が関心のある研究分野について、教授に質問する場にもなります。またその分野の研究に関心を持たせ、学問に憧れを持たせるようにして、上海での朝鮮族の人材を養成するのにいいルートだと思います。しかし残念ながら、今まで大学生がこの場で会った朝鮮族の教授の指導学生になった事例はまだないですね。でも、本協会は交流と協力の場として、そのような事例はこれからでも十分に可能だと信じています。」

前会長はKCSEA（上海）の学術交流会を朝鮮族社会の出会いの場、交流の場、協力の場と定義して、上海の朝鮮族社会に貢献しようとしていた。2018年のKCSEA（上海）の第11回学術交流会では、内容と形式の変化により、さらにその意義が広がっていた。

これまでの基調講演は主に学者の研究報告であったが、今回は前会長が「我々はどこからどこまで行くのか」というテーマで、朝鮮民族の歴史を辿りながら、中国朝鮮族の現状について発表した。その中で、朝鮮族は活発な移動により各地へ散らばっているため、物理的に集まることには限界があるが、情報の交換、交流により、共通の言語、文化、心理的意識に基づいた民族共同体の存続は無限であると指摘した。

著者は11回に参加し、他の参加者の感想を聞いた。学術交流会で、朝鮮族及び朝鮮民族についての内容は初めてだったため、参加した会員には、「初めて朝鮮族の歴史を聞き、朝鮮族の状況について了解できたことで、感動しました」と好評だった。朝鮮族はバイリンガル教育を受けてきたが、中国の国民統合教育によって中国の歴史を習い、朝鮮民族の歴史を十分に学んでいないため、前会長の報告を聞き、感動した会員が多かった。

もう一つの興味深い変化は、学術交流会の途中で、朝鮮族の舞踊団体がアリラン歌の伴奏による扇子舞、朝鮮族の楽器の長鼓による踊りなどの公演を行ったことである。上海では延辺朝鮮族自治州とは違い、朝鮮族の文化を楽しむ場が珍しく、その公演を見て、親近感を感じ、さすがにわれわれ朝鮮族の民族の学会である雰囲気があるとして、喜んでいた会員が多かった。一方、学会で民族舞踊を公演することはおかしいと言う会員もいた。

以上のように、KCSEA（上海）の11年間の変化と発展により、協会の意義が浮かび上がってきた。一般の学術交流会と違い、朝鮮族の学者が単に研究成果を報告するのではなく、他の会員に自分の分野を分かりやすく紹介することが重視されている。つまり、お互いに

自分の研究分野を紹介し、相互に協力し、責任と使命感を持ち、上海で朝鮮族のコミュニティを構築する力になるということが重要な意義である。さらに、学術交流会という形式で表現しているが、朝鮮族という民族の親睦が KCSEA（上海）の求心力になっている。

2.4 現会長のインタビューから見る今後の方向性

KCSEA（上海）は、上海朝鮮族社会で成立してからの時間が長く、影響力がある協会であるが、上海の朝鮮族の中では知らない人も少なくない。それは、上海における朝鮮族のネットワークがまだうまくできていないからであると KCSEA（上海）の会長と多くの理事は認識した。ネットワークを構築するのため、会長らは 2017 年から『上海朝鮮族人名録』という本を編集する計画を立てた。

『上海朝鮮族人名録』に収録されるのは公務員、小・中・高・大学の教師及び教授、医者、国家金融機関の技術者、企業家、スポーツ選手と芸術家、メディア及び出版社などの業務に従事している朝鮮族である。編集目的は、上海の朝鮮族の中に一定の影響力を持つ各界の人士がいることを知らせ、朝鮮族に自信を持たせ、自尊心を強くし、自ら努力し励む心を育くみ、相互の理解を強化して交流と協力を行うためである。一方、少数民族内での連絡を促進して、交流や団結を行い、共に上海の改革開放のために繁栄し、必要な貢献をすることも目指されている。

現会長は KCSEA（上海）の今後の方向について、以下のように述べた。

現会長の話：

「現在 KCSEA（上海）は上海での朝鮮族の協会の中で、政府から認められている正規な協会です。延辺本部からも、KCSEA（上海）について、学術交流会の内容が豊富で、学会誌まで出版する分会は上海しかないと、他の地方の分会も KCSEA（上海）を見習ったほうがいいと高評価を得ていました。

これからもやはり、今までやってきた学術活動及び朝鮮族の人材の養成に力を入れ、上海の朝鮮族社会に貢献できるように努力し続けます。なお、今後は上海の朝鮮族社会が発展するためには、単なる朝鮮族の枠に拘らず、上海という都市及び大きな社会環境に融合することが大事です。そのため、朝鮮族が上海で適応、発展するために、KCSEA（上海）は少数民族の組織ではなく、上海という都市及び社会に貢献できる協会になるように努力し、そうしてこそ長く続けられると思います。」

現会長は、KCSEA（上海）の今後の方向性について以上のように述べた。KCSEA（上海）は非伝統的コミュニティでの社会団体として、単なる朝鮮族の枠に拘らず、朝鮮族をホスト社会へ融合させる方に導いていることが分かった。

3.中国朝鮮族医師連盟（CKMDA）

3.1CKMDA を設立したきっかけ

中国朝鮮族医師連盟（以下 CKMDA と略す）は英語で Chinese Korean Medical Doctor Alliance である。CKMDA には、上海市の医師及び医療関係の仕事に従事している 113 人の朝鮮族がおり、同じ業者と共に進歩し、朝鮮族同胞により良い医療サービスを提供することを主旨とする。

CKMDA は 2018 年に成立したが、2016 年から上海市の病院の婦人科の主任医師である李善姫が発起した。李が出産後、モイザサイトの「アサモ」欄で育児に関する知識を読んだ時、若い朝鮮族の母親が上海で育児をする上での困難な点があることを見つけたという。具体的には、乳児がよくかかる病気や、家族が病気になった時に、その症状はいったいどんな病気か、上海でどの病院に行くのがいいかなどの点だった。

最初、李は自分の専門分野の知識でできるかぎり回答したが、専門以外の医学的専門知識についてもよく聞かれた。また、李が回答できない病気については上海にいる先輩、同僚に聞いて最大限にサイトで回答し、医者も紹介したので、「アサモ」で有名人になった。李と先輩、同僚の 7 人だけでは限界があり、医療面でもっと多くの上海朝鮮族を助けるために、社会団体の設立を計画した、

しかし、上海の朝鮮族社会に知らせるには、また多くの上海の朝鮮族に医療奉仕をするためには、7 人の影響力には限界がある。そのため、上海朝鮮族社会で最も影響力がある KCSEA（上海）の会長に協力を依頼した。医者である KCSEA（上海）の現会長と上海交通大学の許文燮から、「上海で朝鮮族の次世代がこんなに有意義なことをするなら協力すべきである」、また「医師連盟は内容がはっきりしており、朝鮮族社会に非常に役に立つ協会である」と認められ、支持された。2 年間の会議、討論を経て、2018 年 4 月 15 日に上海地区を中心とした中国朝鮮族科学技術工作者協会医学専業委員会が、中国朝鮮族科学技術工作者協会（上海）の分会機構になった。

この協会の発起人の一人であり、上海のある病院の胸部外科の呉医師は次のように述べた。

呉医師の話：

「医療に関しては、大人物であれ、庶民であれ、誰でも離れられない分野だと思います。昔、地元にいる時に、朝鮮族の医者はいろいろなことを親切に教えてくれたが、上海の病院では患者が多いので、いちいち説明できない状況が多いです。また、朝鮮族の高齢者にとって、病気及び保険に関してはやはり朝鮮語で相談するのが慣れているので、上海では迷ったり困ったりしている人が多いです。それで、本協会は社会について大きな貢献をするなどの漠然とした目標より、上海で困っている朝鮮族を助け、実際的な健康問題を解決してあげたい気持ちです。本協会はまだまだ初期段階ですが、本当に上海の朝鮮族に実際的な側面で役に立つ協会になってほしいです。」

呉医師のような朝鮮族の医師が、上海朝鮮族への医療奉仕のために作った社会団体が医師連盟である。多くの朝鮮族、特に年配者が上海での医療システムに慣れておらず、不安感を持っているのを助けるため、相互扶助関係を形成した一例である。

3.2 現在の活動及び未来の発展計画

医師連盟が成立した段階では主に二つの活動を中心に行い、今後はまた豊富な活動を行う予定である。

一つは CKMDA の公式アカウントの運営である。それを通して、週に一回基本の医療知識を発表することである。主に高齢者の腰痛の原因と保健、関節リウマチ、子供の熱など、関心が集まる内容を選び、漫画と文字を併用した形式で、医学の専門知識を分かりやすく伝える。また、現在 CKMDA の公式アカウントにサービス項目を追加しているところで、医療知識の普及以外に、彼らが解決してほしい問題を入力すれば、その問題に対する返事を登録アカウントに配布するサービスも追加する予定を立てている。

もう一つは、1 年に 2 回、春と秋に分け、医療ボランティア活動を展開することである。内容は主に、上海朝鮮族の医師及び医療業務に従事している人々が上海にいる朝鮮族を対象に、現場に訪ねてくる人々の各種の質問に対して、詳しい返事と案内などを含んだ医療サービスを無料で提供することである。

CKMDA は 2018 年 4 月の設立から 2 ヶ月間で、2 回のボランティア活動を行った。第一回は前節で KCSEA 上海を紹介した際に、記述した、上海朝鮮族老年協会主催の「古稀耄耋長

寿宴会」で行ったボランティア活動を行った。宴会の日に、現場で緊急事態への対処および医療相談などを行った。

医療ボランティアに参加した一員として、上海のある病院のリウマチ専門の朴医師は以下のように述べた。

朴医師の話：

「意義深い場で、年配の方のために緊急医療救急と医療相談を提供できて気持ちが満たされました。同時に今回の行事を通じて私たちの民族の団結した姿を見ることができてうれしく、今後も医療奉仕を必要とする行事があれば朝鮮族の医師団体は積極的に参加します。」

CKMDA のボランティア医療団体以外に、朝鮮族の企業である愛森斯生物科学技術会社も現場医療ボランテイアに必要な医療測定機械と医療物品を提供することで、高齢者の宴会を応援している。

また、2018 年 5 月 20 日に華東朝鮮族週末学校の運動会で 2 回目のボランティア活動を行い、運動の過程でケガをした子供の治療を行った。また、運動会の現場で、医師が活発に参加者と観覧者に医療知識を普及した。

二つの行事の両方に参加した李医師は以下のように述べた。

李医師の話：

「私は、上海における民族の意義深い行事で、小さい援助を与えることができてうれしく思います。子供たちが走る姿を見守っていると幼い時期に戻ったような感じがします。今後ともこのような活動があれば、私たちの力が必要なところがあるならば積極的に参加します。」

以上のように、医師連盟の会員は上海朝鮮族のために医療の分野で貢献し、またそれらの活動を通して、エスニック・アイデンティティの再確認をし、上海における朝鮮族コミュニティの形成に重要な役割を果たしている。

4. 上海朝鮮族女性協会

4.1 設立の経緯、理念及び活動

上海朝鮮族女性協会は英語名で ShangHai Korean Women Association である。上海女性企業人協会、上海女性経済人協会を前身として 2006 年に設立され、2016 年に上海朝鮮族女性協会に名称変更された。改選された会長の張英姫氏が、会員の幅を広げることにしたためである。もともとの会員は朝鮮族の女性自営業者と企業家が大多数で、主に中韓と中日の物流及び貿易業務、日韓を対象とした加工工場、サービス業（主に朝鮮族の料理店、美容）などの経営者だった。名称変更後は会員の幅を拡大するため、朝鮮族の若い会社員、大学の教授、教師、弁護士、財務専門の人材も入会するようになった。

女性協会は親睦目的も重要であるが、10 年間の経験により、朝鮮族が上海への移民として、上海でどのように朝鮮族の存在を知らせ、上海でどのような役割を果たすかという協会の存在意義について探求した結果、「融入、調和、成長、共有」という理念を掲げた。

「融入」とは、上海の現地社会と上海朝鮮族社会ないし朝鮮族社会へ溶け込むことである。以下では、関連する女性協会の活動を見てみよう。

女性協会は 1 年に 2～4 回のバザーを行い、収益の一部を虹橋政府へ寄付し、また政府から、虹橋鎮サービスセンター、低収入の高齢者、貧困学生を支援する活動を行っている。バザーで販売する商品は、主に会員の商品で、会員以外の上海の朝鮮族の企業家から女性協会へ寄付されたもののこともしばしばある。売上金額が今まで最も多かったのは、2017 年 11 月に行ったバザーであるが、１日で 6 万元も集まった時もあった。

女性協会のこれらの活動を通した目的は、上海の全市の範囲よりも龍柏コリアンタウンを中心とした虹橋からスタートし、朝鮮族の存在を知らせ、朝鮮族は「愛と情」に溢れている優秀な民族であると宣伝するためである。その結果、2018 年に虹橋政府から、虹橋に住んでいる人々を助けたことへの感謝を示す賞が与えられたこともある。

張会長は、「上海での朝鮮族の企業が上海に 1 億元の税金を払ったとしても、朝鮮族の企業の影響力を波及させのには限界があるが、文化を媒体とした影響力は無限であると」考え、上海での朝鮮族の文化を媒体とした活動にも支援を惜しまない。歌と舞踊は朝鮮族にとって、自分たちの民族の文化を伝播する重要な媒体であり、芸術は朝鮮族を知的な民族として養成するのに重要な手段でもあるため、上海金達莱舞踊団体を支援している。また、これらの朝鮮族の文化を伝播することは朝鮮族の宣伝に役立つとの考えから、2017 年には女性協会でも、協会の名義で舞踊団体を作った。

また、女性協会では、上海における朝鮮族コミュニティの発展のために、華東朝鮮族週末学校にも支援を行っている。言語教育は話す道具のみならず、朝鮮族の文化の継承の一部として、非伝統的朝鮮族コミュニティではきわめて重要であると主張したからである。2018 年からは、週末学校の運動会は女性協会と共同で開くこと、また上海での朝鮮族の大学生新入生会、大学生運動会への支援で、上海での次世代教育にも大きな力になっている。その上、朝鮮族が集中して住む延辺への支援も実施している。延辺での愛心オモニという孤児院へ毎年 2 万元（約 32 万円）を支援し、子どもたちに希望を与えることが重要であると考えて活動しているという。

女性協会では、上海における朝鮮族の女性を団結させ、社会への貢献を通して、上海市、上海の朝鮮族社会、伝統的朝鮮族社会で、女性協会の一員と朝鮮族の女性としての誇りと自負心を持たせるための活動を進めている。さらに、その活動は上海において、朝鮮族という民族への肯定感及び信用度、知名度を高めるためでもある。

「調和」社会は中国の政府が強調する理念であるが、それも女性協会の理念の一つになり、上海及び中国で法律を守ることを表す。朝鮮族は少数民族である上海への移民としてのマイノリティの立場でもあるが、ホスト社会では「郷に入れば、郷に従う」という考えが見られる。

「成長」という理念は、朝鮮族の女性は不断に学び、進歩してこそ、競争が激しい上海で生き残れるからである。女性協会は会員に企業経営の講座、企業に関する情報を提供することで、学習の場を提供してきた。また、会員の間で相互に貿易情報を交換し、協力して売買を促している。そのため、インターネット上にホームページを作り、会員はそのホームページで自分の会社の商品を紹介し、できるかぎり情報を「共有」し、共存共生の関係を促されている。

講座及び資源の交換は会員の貿易に役に立てるのに加え、次世代の女性企業家の養成も一つの目的である。女性協会は、正会員が 90 人で、その中で 20 人は次世代会員（30 歳以下）で、会費 2000 元が無料であり、準会員も 150 人いる。現在、次世代会員はサラリーマンだが、女性協会では様々な情報及び講座を通して、若い時から創業する気持ちを植えつけることにより、上海で若い女性の企業家を養成することに導いている。

無論、女性協会での以上の社会活動も有意義であるが、親睦を目的とする活動も重要である。春と秋には、野外遠足、文芸とスポーツ活動、3.8 女性節の飲食会、忘年会、新年会などの豊富な活動を行い、女性協会の会員に、協会の温かさを感じさせる。また異郷の

上海で、朝鮮族が気持ちを分ちあい、その根を探すように感じさせているのである。

以上のように、女性協会を設立したきっかけと活動を通して、女性協会は女性という角度で、上海市と上海の朝鮮族社会、延辺の朝鮮族社会への支援を行い、知名度を高める戦略を実施していた。それを通して、朝鮮族の女性ひいては朝鮮族全体が上海のホスト社会で認められることを望んでいることが分かった。

4.2 張会長から見た協会の困難及び将来の展望

張会長は女性協会の経営をめぐる困難と将来の展望について、以下のように述べた。

張会長の話：

「協会の運営は会社の運営と同じです。会員の信条、経歴、職業の違いにより、考え方にも大きな違いがあるので、どのようなことを通して会員の心を捕まえるかが肝心です。そのため、会長の位置にいる人は医者のように、会員の脈を図ることが一番大事です。女性に共通するのは、みんな情がありますよね。また企業家が集まるところで、ビジネス情報を知りたいですよね。この二つの要素が女性協会を経営する根本的な部分です。

一人の会員が 2000 元のお金で朝鮮族社会に貢献するのには限界があると思いますが、われわれが団結し、一緒になると力になるでしょう。特に少数民族としての朝鮮族は、競争が激しい上海で団結しなければならないのです。朝鮮族は文化に執着心が強く、その文化と優秀性、愛情を宣伝し、朝鮮族社会の影響力および朝鮮族の企業の影響力を上海ないし国際社会でも大きく宣伝してほしいです。そうすれば、上海での朝鮮族企業家を大きく宣伝できるし、ビジネスにも有益で、それに上海からたくさんの朝鮮族企業家が出世できるように協力したいです。」

張会長は、上海で朝鮮族の女性の力を合わせて、朝鮮族社会の力になることを目指していた。また、女性協会は女性の企業家を中心にした協会であるため、協会名を変更した今も、やはり上海の朝鮮族の企業のために知名度を宣伝する戦略があることが分かった。

続いて、張会長は女性協会のリーダーとして、以下のように、会長としての役割を話した。

張会長の話の続き：

「リーダーとして、協会のために貢献する気持ち、朝鮮族社会のために貢献する気持ちがなくては、担当するのは難しいと思います。女性協会を何のために運営するか、私はしょっちゅう会員に言いますが、もし誰かに、私は国のために、われわれの民族のために働きたいと思う、という大きな考え方があれば、次の会長になれると思います。そのため、女性協会が長く続くためには、そのような大きな考え方を持っている次世代及び次の会長を養成するのが大事だと思います。」

張会長は女性協会で行っている活動が、単なる上海朝鮮族の経済、企業のための宣伝にとどまらず、社会で貢献できる次世代の朝鮮族の養成になることを重要視していた。それは現在、女性協会が行っている活動及び理念に当てはまっている。

5.世界韓人貿易協会上海支部（OKTA（上海））

5.1OKTA（上海）を設立した経緯

世界韓人貿易協会は英語名で World-OKTA であり、1981 年から韓国の最大の在外同胞経済団体である。現在は 73 が国に 147 支社があり、6700 名の正会員と 18000 名の次世代会員で活動している。世界韓人貿易協会（以下では OKTA で略）は母国の貿易の増進及び海外市場進出へ寄与し、会員の相互間の韓人ネットワークを結成することを通して、韓民族経済共同体を具現化するために設立された。

設立されたきっかけは、1982 年に韓国で商品輸出博覧会が開かれ、博覧会に参加したアメリカの韓国系住民と韓国貿易振興公社（KOTRA）の 109 名が会議をしたことである。会議で、どのようにすれば韓国の中小企業の貿易を活性化できるかという内容をめぐって検討したところ、OKTA という協会を作ることになった。そのため、アメリカでの韓国系住民で、財力も実力も強いロスアンゼルスでまず設立し、ニューヨークなどでも支会を作った。最初は企業家が私費で協会を運営したが、2019 年には韓国政府から 140 億韓国元の支援を受け、韓国でも在外同胞の社会でも大きな影響力がある社会団体となっている。

1992 年の中韓国交樹立後、上海は中国での経済第一都市として成長し、2002 年には、世界韓人貿易協会上海支部（以下では OKTA（上海）と略す）を作った。2019 年時点の会員は 100 名で、うち 30 名が韓国人で、70 名が朝鮮族であり、次世代が 160 名である。会員の資格は、①OKTA の副会長と理事長クラスの会員が推薦する、②加入する会員は法人

代表、営業者、年間売上が 1000 万元以上になる経営人ということである。今までこの原則が厳守されてきたが、近年になると、CEO も加入できるように条件が柔軟になった。

一般的な OKTA 支社では、主に韓国人が会長を担当するが、上海では 2 年に一回、韓国人会長と朝鮮族会長が交代する制度がオリジナルな点である。1.2 代目の会長が韓国人で、3 代目の会長が朝鮮族であり、この順番で交代し、普通は任期を継続することも可能である。近年になると、韓国人か朝鮮族かに拘らず、能力のある者を選抜することにもできるようになった。しかし、協会内のバランスを取るために、やはり交代制が実施されている。

5.2 韓人ネットワークの強化と OKTA（上海）で行われている経済と文化活動

OKTA では在外同胞のネットワークの結成を通したグローバルな経済力を極大化するために、海外韓人ネットワークの強化、次世代貿易専門家の養成や供給、中小企業が海外進出を拡大するための活動を中心に行っている。なお、OKTA（上海）では、OKTA での趣旨に沿いながら、上海の特徴に合わせて活動を行っている。

OKTA では、春季には世界代表者大会、秋季には世界韓人経済人大会の 2 つの大会を定期的に行う。その目的は、韓民族経済ネットワークを強化し、在外同胞のネットワークを通して韓国の商品、韓国と在外同胞社会の経済を活性化することである。また、OKTA では、同じ業界で交流できる 13 個の通商会があり、一つの通商会に 200 名前後の会員がある。それらを通して、会員はビジネスで成功した人がどのように成功したかという事例を紹介し、世界経済の情報を交換し、視野を広げている。。

上海は中国の第一経済都市であるため、OKTA（上海）は OKTA の支会の中でも戦略的に重要な支会である。主に行っている事業は、輸出仲間作り事業、輸出発芽企業支援事業などで、海外支社化事業を中心に行っている。以下では、海外支社化事業を通した OKTA（上海）の活動について述べる。

海外支社化事業は、韓国の中小企業の海外輸出を専門的に支援し、母国企業と取り引きしようとする会員及び取引中の会員のビジネスを直接的に支援し、母国の青年創業家が協働して世界市場を目標とし、OKTA（上海）が上海での支社の役割を果たすということである。韓国の中小企業が上海へ進出する時、OKTA（上海）へ頼み、段階を踏んで行っている。

最初は、韓国系中小企業から OKTA（上海）へ頼み、OKTA（上海）では韓国系中小企業の商品を中国での市場調査、サンプルテスト、中国での営業に関するアドバイスなどの面で協力する。この段階が順調に行けば、韓国系中小企業と中国とのやり取り、商売の段階

と進み、上海での共同投資などの第二段階に入る。

韓国系中小企業では、人力と財力に限界があるため、韓国の政府から多く扶助している。依頼した韓国系の中小企業から 50 万韓国元を支払い、韓国政府から 300 万韓国元の補助があり、次の段階に入ると政府からより多くの支援がある。韓国系中小企業を支援する政府機関として大韓民国貿易促進会（振兴会）があり、経済のマクロ的な方向について把握するのに対し、OKTA は民間レベルの組織として、末梢神経にあたるような経済の動向を把握する組織である。

また、OKTA（上海）では、次世代貿易専門家養成や供給も重要視されている。OKTA の委員会には、次世代委員会があり、特別講義と次世代故国訪問という活動を毎年行う。

特別講義に関しては、ビジネスで成功した事例を次世代に紹介し、視野を広げさせている。講師は主に OKTA 内部会員で、アメリカ、ヨーロッパ、日本、韓国などで様々な韓国系会員が韓国語で講演した。また、OKTA の会員以外に、専門領域で有名な専門家が講義を行う時もあり、主に支社の所在地で特別講義を行う。

OKTA（上海）は、2017 年から特別講義の形式を変更した。上海を含めた華東地区と華南地区が統合して、つまり、深セン、広州、義烏、南京、蘇州、上海などでの OKTA の各地方支会の次世代の会員が一箇所に集まり、特別講義を行うことにした。また、毎年主催する都市を上海に固定せず、場所を変えつつ行うことにした。それは、多数の地方の次世代の交流を行い、また先進的な地域の次世代と遅れた地域の次世代の出会いを促すことが競争心を生じさせ、全体のレベルを上げる役割を果たすことができるからである。また、講師の時間と費用を節約できるからでもある。

もう一つの活動は次世代の故国訪問である。主に中学校部、高校部、大学部があり、礼儀作法、道徳教育と故国の歴史などの内容がある。上海における朝鮮族の次世代は無論、上海で育った韓国国籍である子供も、韓国語より中国語が得意な人が多い状況下で、故国訪問を通して、我々がどのような民族か、民族の歴史などを教えるプログラムを行っている。

また、文化活動もある。OKTA（上海）では野游会と老人敬老ザンチというイベントの活動を行う。特に、韓民族大ザンチは韓国商会が主催しているが、2019 年から朝鮮族と韓国人の中での大きなイベントとボランティア活動を一緒に行うことに決めたという。一つの社会団体で主催するのには限界があるため、「力を合わせて」、一層大きな活動を主催することで、上海における朝鮮族社会、及び朝鮮族と韓国人社会を合わせた上海のコリア

ンで、団結し影響力を高めるという戦略を取ったためである。

このように、OKTA（上海）は、民族的感情に基づく信頼関係に即して、グローバルな経済活動を中心に行っている社会組織である。上海における朝鮮族社会と韓国人社会は、グローバル・シティで相互扶助関係を形成しているのである。

5.3 OKTA（上海）会長のインタビューを通して

OKTA（上海）の理念について、会長は次のように述べる。

OKTA（上海）の会長の話：

「生産大国の中国と違い、韓国は他国の原材料を輸入後、加工して貿易を活発に行う国です。韓国系中小企業では社長は技術者で創造力が高く、社員 3.4 人だけの企業が少なくありません。例えば、同じ石鹸でも、中国なら量的な販売を重要視するが、韓国では肌によって、しっとり、中性、さっぱりに分け、また香りなどに様々な人に合うように、熱心に研究しています。社長はモノを開発するだけでなく、販売するために営業もすべきですが、一般の中小企業では、海外まで及ぶ実力も財力もない場合が多いですね。そのため、OKTA（上海）のような協会が存在する意義があります。

ビジネスの世界では、金銭よりも、最も重要なのは信頼関係です。特に、海外のビジネスは言語も問題になり、海外の事情についても分からない状況下で、信頼関係がきわめて重要です。全世界でコリアンの在外同胞が 720 万名で、国籍が違うが、韓民族という枠で、ビジネス情報を交換しながら、同胞の情を重要視するので、一般のビジネス団体よりも信頼関係が強いですね。」

OKTA（上海）をうまく運営するために、朝鮮族と韓国人の関係については以下のようにみる。

OKTA（上海）の会長の話の続き：

「朝鮮族と韓国人は同じ民族ですが、確かに文化的な差異も感じられます。それは社会体制、受けた教育に違いがあるので、お互いに差異が感じられ、壁があるのは当然なことだと思います。OKTA（上海）の協会が持続性、発展性を持つためには、

その問題点を克服しなければなりません。つまり、朝鮮族と韓国人の会員間の壁を薄くするためには、バランスが最も重要です。会員の中で、会長の交代制と、会員長と理事長も、朝鮮族と韓国人でのバランスよく人数を入れることです。また、一緒に仕事をするとき、朝鮮族と韓国人会員の長短所を考慮して、能力を発揮できるように、また「手足がよく合わせる」ように、仕事を配布することも大事です。

また、よく顔を合わせて会うことです。そのため、ビジネス以外に、毎月ごとに字を書くモイム（日本語で集まり）、読書モイム、美術モイムなどの文化生活を行います。そのような文化活動の活性化を通して、同じ趣味を持たせ、朝鮮族と韓国人の間の壁が薄くなるように導いています。また、それらを通して朝鮮族と韓国人の会員の関係がよくなり、ビジネスにも大きな力になっています。」

OKTA（上海）の会長は、OKTA（上海）の最も肝心なところは朝鮮族と韓国人の民族関係をうまく調和させることであると指摘した。そのため、朝鮮族と韓国人の会員の比率よりも、管理職の人数を同じにして、組織のバランスをよく取ることが重視されている。また、朝鮮族と韓国人の共通の文化活動を通して、良い関係を持たせ、ビジネスにも影響を与えている。

6.おわりに

本章では、「中国朝鮮族科学技術工作者協会上海支部」、「中国朝鮮族医師連盟」、「上海朝鮮族女性協会」と「世界韓人貿易協会上海支部」の上海朝鮮族の 4 つの社会団体を通して、上海における朝鮮族社会の構築状況を明らかにした。その要点を以下に整理する。

第一に、上海というホスト社会は延辺自治州とは違い、これらの協会は政府からの支援がなく、朝鮮族社会の自費によって運営されている。1994 年に配布された「上海市少数民族権益保証条例[31]」の第 12 条で、「各級人民政府は少数民族の需要の経済、文化教育事業、資金からある程度の資金の支援を与えるべきであり、合理的に民族事業専攻の資金を配布すべきである」という政策があるが、非伝統的朝鮮族コミュニティである上海では、

[31] 「上海市地方法規」
http://asianlii.org/chi/cn/legis/sh/laws/2d1fe41f98e983887a30c5c95414091a149f1cab/（アクセス日：2020/03/02）

少数民族政策が十分に実施されておらず、完全ではない。このように、ホスト社会では支援がない状況下で、自主的に協会を運営することからも、朝鮮族がコミュニティを再建しようとする意志が現れてくる。

第二に、これらの協会は上海への社会貢献を通して、上海の主流社会への編入を目指していた。これは朝鮮族の国内移動の研究の中で取り上げられた、他の移動先での協会の理念とは大きな違いがある。例えば、南[2016]は、「深セン朝鮮族コミュニティは深センという社会に置かれており、深セン朝鮮族コミュニティの中では連合会が主に文化継承の役割を担って、OKTA は主に経済活性化の役割を担っている。」[南 2016：149]と指摘していた。また、青島にも朝鮮族協会もあるが、主には朝鮮族社会内部での親睦であったり、経済、文化活動の交流のために設立されたものであったりする。

しかし、高学歴者が多い上海朝鮮族で構成された協会の理念及び活動は、単なる協会内部の会員のネットワーク及び親睦目的のためだけではない。これらの団体は上海での様々な施設への寄付などのボランティア活動を行うほか、上海政府とのネットワークを積極的に作ることにより、朝鮮族社会の存在を上海へ知らせ、知名度を高めようとしていた。それらを通して、朝鮮族社会が上海での信頼度を高め、主流社会へ進出するために実績を積んでいた。それ以外にも、協会では様々な人脈を動員して、上海及び華東圏でホスト社会で活躍している朝鮮族を吸収しようと努力し、人材の蓄積も重要視している。

第三は、上海における朝鮮族の社会団体は、主に学術、技術、経済、医療などの分野に集中している。そこには、積極的な側面もあるが、消極的な側面もある。朝鮮族は中国でのマイノリティとして、政治の分野よりも、技術と学術の分野で中国に貢献することを目指した。それを通して、中国で優秀な少数民族として認めてもらうというのが、高学歴者の朝鮮族の主な考えになった。一方、政治の分野を避けることは、北朝鮮や韓国に故国があるディアスポラの朝鮮族が自己防衛を行う一つの知恵でもある。

また、朝鮮族の各分野の協会は専門によって分けて経営しているが、各協会の中では、緊密な繋がりがあり、相互に連動していた。力がある協会は朝鮮族社会の多様性と豊富性を保ち促進するために、分野別に協会を作るのを支援し、各協会が上海における朝鮮族社会で機能できるように主導していた。朝鮮族社会で大きな行事がある場合にもみられることだが、協会間で機能を分担しつつ、相互補完関係を持ち、互いの機能を強化し合っている。

第四に、上海朝鮮族の社会団体は、次世代の養成と民族文化継承を重要視している。各

団体は、ホスト社会の上海で朝鮮族の次世代が中国社会に同化されず、アイデンティティを再確認する場を提供している。さらに、そうした方針は、経済発展が遅れた伝統的朝鮮族コミュニティからグローバル・シティへの移動を成功させた現在の世代が、次世代も続けて上海で定住できるように積極的に対策を行い、上海での朝鮮族コミュニティを維持するためでもある。

以上のように、朝鮮族社会は更なる移動の中で、協会を通して上海で積極的にコミュニティを構築していた。閉鎖的な延辺とは違い、協会は朝鮮族社会が積極的に主流社会へ編入されるために努力しているが、単純なホスト社会への同化は求めていなかった。それは、第 4 章での週末学校で子供への言語教育を通して、エスニックアイデンティティを維持させ、エスニックコミュニティの延長を目指していることからでもわかる。

第 4 章　　上海における朝鮮族のコミュニティ形成と文化継承
―華東朝鮮族週末学校の言語教育を中心に

1. はじめに

民族語を朝鮮族の文化の一環として維持してきた朝鮮族コミュニティは、更なる移動地の上海でも、言語教育を実施していた。延辺の伝統的朝鮮族コミュニティでは、少数民族政策によって、公立の少数民族学校も設立され、朝鮮語と中国語のバイリンガル教育を実施することで、民族文化の継承に大きな役割を果たしてきた。民族語は朝鮮族の移動を促す言語・文化資本にもなった。しかし、上海というホスト社会では朝鮮族の公立学校がないことと、漢語の実用性により、民族語は意識的に否定されるようになった。そのような社会環境の中で、上海朝鮮族コミュニティは危機感を感じ、華東朝鮮族週末学校（以下では週末学校）を設立した。

本章では、華東朝鮮族週末学校で文化継承の一環として行われる言語教育の現状を分析し、上海における朝鮮族コミュニティがどのように文化継承をしているかを明らかにする。朝鮮族の言語教育について議論するためには、「朝鮮語」と「韓国語」、「民族語」の概念について理解しておく必要がある。朝鮮語は中国朝鮮族が従来、伝統的朝鮮族コミュニティで使用してきた言語であり、北朝鮮で使用される言語を基礎としている。一方、韓国語は大韓民国で使用されている言語である。民族語は、中国の少数民族としての朝鮮族が使う言語である。

2. 上海における朝鮮族コミュニティと華東朝鮮族週末学校

2.1 華東朝鮮族週末学校の設立と現状

華東朝鮮族週末学校は 2011 年 9 月 17 日、延辺朝鮮族自治州の教育局と上海の杨浦区の教育局の許可を得て、上海の中国朝鮮族の知識人と企業家、また朝鮮族の親の支持、韓国本土からの支援によって設立された。

校長は朴昌根氏である。1978 年に、上海復旦大学に唯一の朝鮮族の大学院生として進学し、上海復旦大学の国際問題研究院韓国研究センターの教授、また中国朝鮮族技術工作者協会（上海）の副理事長である。朴校長は、朝鮮族の民族教育に常に使命感を持ち、1997 年に上海の朝鮮族に向け、次世代の民族語教育に関するアンケート調査[32]を行った。その

32　「次世代の民族語教育」に関するアンケートは、配布した 120 部に対してわずか 15 部しか回収できなかった。その 15 部の中には、次世代の民族語教育としての言語教育を行いた

時は上海に朝鮮族の人口も少なく、学校の経済的支援も問題になり、学校の設立運営までには至らなかったが、華東朝鮮族週末学校を設立するための準備段階になった。2000 年前後に、上海の朝鮮族社会の人口は急増する一方となり、上海生まれの朝鮮族の子どもの人数も 1600 人を超え、朴校長を含めた上海の朝鮮族社会の人々に新たに危機感が生まれた。というのは、上海には朝鮮族の民族学校がなく、全日制学校に通っている次世代は民族語ができず、次世代教育が大きな問題になったからである。

朴校長は「朝鮮族は固有の宗教がないため、民族文化を保つ手段として、民族語の喪失は民族伝統文化の断絶を意味し、民族の文化を喪失することになる」と言った。つまり、朝鮮族にとって、民族語教育は次世代への民族文化や民族アイデンティティの継承、民族コミュニティの存続のための重要な要素であると朴校長は考えていた。伝統的朝鮮族コミュニティではなく、ホスト社会の上海でマイノリティの朝鮮族が同化されず、朝鮮族の共同体が存続するように、次世代の民族語教育についての危機感と必要性がある環境で「華東朝鮮族週末学校」が設立されたといえるだろう。

華東朝鮮族週末学校は設立時、上海での教室しかなかったので、上海市朝鮮族週末学校という学校名であった。上海市朝鮮族週末学校の設立は上海の周辺都市の朝鮮族にも、民族教育についての大きな励ましになっていた。そのため、周辺で多くの朝鮮族週末学校がさまざまな形で設立され、上海の週末学校に編入されていった。2012 年の蘇州の朝鮮族週末学校から始まった設立・編入の動きは、その後は現地の朝鮮族が自主的に運営する形になった。蘇州以外にも、無賜分校と紹興分校が華東朝鮮族週末学校の協力で、その地域の朝鮮族の主導により設立・運営された。上海市朝鮮族週末学校に属する教室のある地域が上海だけでなく周辺都市にも広がったことにより、2013 年には「上海市朝鮮族週末学校」という学校名を正式に「華東朝鮮族週末学校」に改名した。

このように、華東朝鮮族週末学校は、上海だけでなく、周辺都市の朝鮮族コミュニティと連動しながら、上海の豊富な教育資本を周辺都市と共有している。その相互扶助の関係は、次世代への文化継承についての共通の関心を通して、上海だけの朝鮮族コミュニティより広い、華東朝鮮族コミュニティの中で形成された。

一般の語学教室は各地に散らばっている教室の経営方式を統一する傾向があるが、華東

い人々もいたが、多くは社会人になる時に韓国系企業に就職するため韓国語教育を受けたいとアンケート用紙に書いていた。そのアンケートを分析した結論として、民族学校を設立するタイミングではないと判断した。

朝鮮族週末学校の経営方式を見れば、地方によりさまざまである。華東朝鮮族学校の各地方の学校及び教室は、公立学校のように国から経済面や教師の管理を支援されておらず、私立の語学学校とも異なり、朝鮮族コミュニティが自主的、能動的に設立したものである。そのため、華東朝鮮族週末学校として学校名を統一したとしても、各地方の朝鮮族は各地方の状況、環境に合わせて、柔軟に対応した。

2016 年 9 月 30 日までの週末学校の統計によると、設立からの 5 年間で、華東朝鮮族週末学校は上海での本校区が 3 つ、江蘇省と浙江省での分校区が 9 つになった。最初は学級が 3 つだったのに対して、36 学級を持っており、教室が 16、校区は 12 になった。生徒数は最初の 30 名から 300 名に増え、教員の人数も最初の 2 名から 37 名になっている。言い換えれば、生徒の人数は 10 倍になり、教員の人数も 15 倍以上になっている。

華東朝鮮族週末学校の設立および増設は、東北地域の伝統的朝鮮族コミュニティの朝鮮族人口が減り、民族学校も減少しているのとは正反対の現象である。華東朝鮮族週末学校の規模の拡大は、移動先における朝鮮族コミュニティの再構築の一面をうかがわせている。また、華東朝鮮族の 5 年間での迅速な拡大は、上海及び華東地区での朝鮮族が、次世代への民族語教育及び民族文化継承への経済的支援が、民族教育の必要性と不可分と考えていることを推測させる。以下では華東朝鮮族学校への支援状況を述べる。

2.2 上海における朝鮮族コミュニティの華東朝鮮族週末学校への支援状況

華東朝鮮族週末学校（以下は週末学校）は、「われわれの子どもに一人でも多く民族教育を受けさせる」という考えから、経済的要因で学校に通えない子どもがいないように、一学期に 800 元という安い授業料にしている。また、貧困状態の子どもには授業料を免除し、「よく頑張ったね」という意味の奨学金で励まし、多くの朝鮮族の子どもを長く学校に通わせるように力を入れてきた。

華東朝鮮族週末学校は上に述べたように、伝統的朝鮮族コミュニティでのように国から経済的支援を受ける民族学校でもなく、営利目的である私立学校でもない。低い授業料だけに頼る経営は難しく、週末学校を設立する時には、朝鮮族コミュニティから多くの支援があった。「われわれの子どもの民族教育なら、いくらでも支援金を出したいです。」と言う朝鮮族が多く、朝鮮族の自主団体の定期的な支援および、朝鮮族企業家、華東朝鮮族

学校の教員及び保護者の不定期的な金銭的援助も大きな役割を果たしている[33]。不定期的な支援であれ、定期的な支援であれ、朝鮮族コミュニティが華東朝鮮族週末学校への民族教育の関心を持っていることを示す。

支援は最初に週末学校を設立する時からあった。「中国朝鮮族科学技術協会（上海）」は2010年4月8日に第5回学術交流会議を開催し、その席で「中国学術技術協会（上海）後援会（略：上海後援会）」を設立した。上海後援会の重要な機能の一つは、週末学校の運営への後援であり、具体的には上海朝鮮族の子どものためのイベントの開催、上海朝鮮族の子ども図書館の運営、週末学校の教員の補助金などの支給がある。上海後援会は定期的な経済的支援を行い、経済的基盤になっている。

上海後援会は朝鮮族の学者と朝鮮族の企業家16人によって設立された。その中で、朝鮮族の学者と教育者は上海では大学教員が多数であり、教育の現場での経験が豊富で、学校の経営と教育内容、民族学校の政策に詳しい人材であるため、華東朝鮮族週末学校が系統的システムを作りながら、うまく経営できる保障となっている。また、学校の経営では朝鮮族企業家の経済的支援も同じく重要である。営利が目的ではない華東朝鮮族週末学校では、朝鮮族の企業家の支援は営利としてはできないが、支援することは、次世代への民族文化継承、また上海での朝鮮族コミュニティを継承しようとする積極的な対応がみられる。

上海朝鮮族コミュニティが自主的に設立した華東朝鮮族週末学校は、東北地域の伝統的朝鮮族コミュニティでの公立学校とは全く違う存在であった。東北地域での朝鮮族の公立学校で行われる教育は、中国政府の少数民族の保護政策によって朝鮮族の言語・文化を維持するもので、少数民族の文化を尊重するものであると同時に、中国の国民としての統合教育でもある。上海は少数民族自治州ではなく、少数民族への政策が弱いため、政府から週末学校への支援はない。そのような状況下で、韓国本土からの支援があった。

2013年5月から、韓国本土からの支援が始まり、上海の韓国人団体及び個人からも支援[34]があった。その中で、韓国本土の在外同胞財団は週末学校の長期的な支援団体である。

33　校長の著書によれば、中国人民大学上海朝鮮族同盟会からも支援があり、個人名義では朝鮮族企業家、上海ダオウ貿易会社（社長金哲）などからの支援がある。

34　韓国本土と上海における韓国人団体からの支援があった。2013年5月韓国民主平和統一諮問会議　高揚市　議会の後援会50万元（韓国元）からスタートし、韓国からの後援を受けてきた。今日まで、上海韓商会、OKTA上海支会（2回）、上海ハンムリ物流協会、上海大韓体育会（2回）、韓国在外同胞財団などの華東朝鮮族週末学校の運営費の支援があった。筆者が韓国語原文を訳）

華東朝鮮族週末学校は韓国在外同胞財団に登録された「韓字学校[35]」の一つである。韓国在外同胞財団の理事長ジュチェキ氏が韓字学校への支援について、在外同胞財団のホームページで、以下のように述べた。

> 在外同胞財団は1997年の設立以来、全世界の720万在外同胞社会がグローバル韓民族共同体として成長するように、援助しています。特に、韓人会の育成と次世代の韓民族のアイデンティティの維持のため、母国訪問、韓字教育の支援、韓商のネットワークを拡大するための事業など多様な分野で、在外同胞の活動を支援し、地域別、分野別に適切な事業を行っております。以降も我々の財団は在外同胞会社支援事業の内実と格を高めつつ、在外同胞たちが模範的な世界市民としてグローバル地球村で貢献できるように、援助します[36]。（韓国語を筆者訳）

上の文からは、韓国本土の在外同胞財団から「韓字学校」への支援は、世界に散らばった在外同胞を韓国本土に帰還させるために、韓国語教育に協力する目的ではないことがわかる。在外同胞財団は、定着国でのエスニック・アイデンティティの維持に協力するために援助する機関なのである。

在外同胞財団の支援は、主に「本土」のルーツ、文化的アイデンティティを再確認していることに注目される。支援活動としては、まず世界の韓字教室の校長が定期的に会議を組織して、各国の韓字教室の経営、教育経験の交流の場として、韓字教育を促進している。また、教員を一年に一回、韓国に一週間招待し、韓国の名所旧跡を訪問させることで朝鮮半島の歴史を学ばせ、伝統の楽器と踊りを習わせて、韓国語および韓国の歴史についての勉強をさせている。さらに、中国では少数民族の出版物であるためテキストが少ないという空白に対し、在外同胞財団では在外同胞の次世代の事情に合わせて、教材を開発し、支

---

35 韓国在外同胞財団に登録されている世界各地の「韓字学校」は在外国民に韓国語・韓国史及び韓国文化などを教育するため、在外国民団体などが自主的に設立した非正規学校であると定義されている。2007年までの段階で106カ国、2072の学校があり、学生数は12万5044名、教員は1万3853名である。普通は学生数が50～60人と小規模である。しかし、在外同胞が密集しているところは大規模校もある、例えばニュージーランドでの韓国学校は780名ほどいる。

36 在外同胞財団　理事長のあいさつ言葉
http://www.okf.or.kr/portal/PortalView.do?PageGroup=USER&pageId=1283437318498&query=&url=（アクセス日：2017/08/01）

援をしている。朝鮮族の次世代が寄付によって韓国の出版物に触れることができ、そのことが、子どもたちに韓国についての理解を一層深くさせる役割を果たしている。

伝統的朝鮮族コミュニティでは朝鮮族の大量の流出により、中国で 40 年間少数民族として維持してきた民族文化が解体されつつあり、朝鮮族コミュニティの文化的アイデンティティの存続が難しくなっている状況である。一方、上海の朝鮮族コミュニティはエスニック・アイデンティティの維持及び継承に、韓国本土の支援を戦略的に利用している。

韓国本土の支援による民族語の継承活動は、文化的アイデンティティの表出である。それは、朝鮮族コミュニティの文化継承にどのような役割を果たしているか、以下の節で見てみる。

3. 華東朝鮮族週末学校の調査結果

本章では、参与観察が主で、インタビュー調査を兼用した。その中で、校長と 2 人の教員、2 人の保護者である。校長と教員は定年退職者と兼職である。それは経費の問題もあるし、週末学校なので、全職者は必要でもないこともある。また、上海での大学の現職の教員と会社員もあるし、少人数の韓国人の主婦もいて、民族教育のためにボランティア活動として考えている方が多かった。

表 4-1　インタビュー調査対象者の概要

	生年	性別	出身地	現職
朴校長	1950 年	男性	延辺	上海での大学で退職後、校長を担当
方教授	1960 年	女性	延辺	延辺での大学で退職後、週末先生を担当
権教員	1970 年	女性	ハルビン	医者及び週末学校で兼職
李さん	1981 年	女性	延辺	韓国系企業での会社人
朴さん	1980 年	女性	吉林省	日本で留学後、上海での日系企業での会社人

以下では、インタビューと参与観察の結果をもとに、学習状況および教育者側と保護者側の民族文化への意識について考察する。

3.1 生徒の学習状況

週末学校の教員は子どもの民族語の能力の状況について、「最初に華東朝鮮族週末学校に入学してきた子どもたちは漢民族の子どもと同じです。ウリマル（民族語）が話せなくて、家族でよく使われている簡単な単語しか聞き取れない子どもがほとんどでした」と説明した。授業の中では、教員が民族語で質問しても、子どもはよく中国語で答えていた。そのため、教員は生徒に「私がこの教室で授業する時間には、中国語ができないので、ウリマルで答えてください」と言った。

上海には、民族学校がないため、全日制の普通の学校に通っている子どもは中国語能力が高く、中国語で授業を受けることに慣れ、週末学校でも無意識的に中国語で先生の質問に答えている。また、民族語の使用は家庭内での親との日常会話に限られているが、保護者は家庭内で民族語ばかり話すと中国語能力が高められないことを心配しているため、子どもとの日常会話では中国語で話す傾向が強い。これらの原因により子どもの民族語能力は低く、漢民族の子どもと区別がつかないのである。

週末学校は、朝鮮族コミュニティが自主的に経営する学校として、教育形式も国家からの指定がなく、朝鮮族の教育者と保護者側が子どもの状況に合わせて、柔軟に決めることができる。それは伝統的朝鮮族コミュニティでの教育形式とは違う、新たな試みである。そのような教育形式と内容は教育者側から、「われわれの子ども」「朝鮮族の子ども」への養成に役に立つと思われている。

授業の形式は、上海朝鮮族の子どもの教育状況に合わせて、毎学期 15 週で、毎週土曜日に 2 時間の授業を設置している。その理由の一つは、授業の時間をこれ以上長くすると、民族語能力が低い子どもは飽きやすくなるからである。そのため、テキスト通りの民族語の学習以外に、週末学校は礼儀、歌、舞踊、伝統楽器などの教育もしている。それは授業の趣味性を高くしつつ、子どもの学習の意欲を高めるためでもある。それと同時に、上海では子どもが朝鮮族の伝統文化と接触するチャンスが少ないため、週末学校を通して、伝統文化についての理解を深める目的もある。

もう一つは上海では学業の競争が激しいので、進学と関係がある科目の重視度が高く、進学とは関係がない民族語教育に時間を譲ることはできにくい現状である。子どもは土日でも休まず、主に英語・数学などの学校での試験と関連がある教科を補習するか、ピアノなどの楽器か、スポーツなどを趣味の教室で習うのが一般的である。それは上海の良い学校へ進学するためには、試験の成績以外に、楽器・スポーツなどの特技が要求されるから

である。つまり、趣味の教室は趣味を養成するというより、進学させるためのものである。学業競争が激しい上海で、時間の余裕がない子どもに、民族語教育を受けさせる保護者は、進学とは関係なく、自覚的に参加させている。ある意味では、無意識に重要視しているといえるだろう。

教育内容の中で、保護者は礼儀教育と言語教育の重要性を強調していた。それは、今の上海の朝鮮族の家庭構造及び子どもの育つ環境では、保護者が育った環境と違い、朝鮮族の家庭内での上下関係が解体されつつあり、儒教の「長幼有序」の伝統的親子関係は保たれていないからである。保護者の世代は東北地域での「村」社会で祖父母・親戚・兄弟姉妹がいる環境で育てられ、目上の人についての敬語の使い方、礼儀作法は目上の人から教わることもできたし、兄弟を見習うこともできた。それに対して、上海の朝鮮族の子どもは核家族で育てられ、一人っ子がほとんどで、見習う環境がない状況である。このように、「朝鮮族の子ども」になるための礼儀教育が家庭内では継承しにくい環境のため、保護者側は、週末学校に期待しているのである。

上海での朝鮮族の子どもが育つ環境として、家庭内で継承しにくいのは民族語教育も同じである。民族語教育は朝鮮族の文化継承の重要な一環として、週末学校での最も重要な教育内容でもある。保護者側と教育者側は民族語教育として朝鮮語ではなく、韓国語教育を行うことを強調し、合意した。多数の保護者は韓国系企業で就職したことがあり、韓国人の上司に朝鮮語は聞き取れにくいか、朝鮮語がサテュリ[37]で、韓国語が標準語と言われたという差別を受けた経験があった。そのため、保護者は子どもの世代にそのような経験を継承させたくなく、朝鮮語ではなく、韓国語教育を週末学校に期待した。

週末学校でも、「延辺式韓国語」や「中国語式韓国語」ではなく、「韓国式韓国語」を教えることを強調し、テキストの選択を重要視した。テキストの選択に関しては、「韓国式韓国語」に一層近づくように、テキストを 2 回変更した。

学校が設立された時には、東北朝鮮族民族教育出版社から出された『韓国語』というテキストが採用された。『韓国語』というテキストは朝鮮族に限らず、漢族が韓国語を外国語として習うのに使いやすい本とされているため、漢族の子どもと韓国語の基礎が大きく変わらない上海の朝鮮族の子どもにとっても読みやすい。なお、『韓国語』は延辺で編集された「延辺式韓国語」「中国式韓国語」であり、内容が古く、時代に合わせて改訂され

[37] サテュリ：文法が正しくない、田舎っぽい言葉

ていないので、使用を中止した。

2回目は韓国本土の在外同胞財団に登録された学校として、『マチュム韓国語』と『在外同胞財団のための韓国語』という教材の支援を受けて採用していた。これらのテキストは韓国本土以外での在外同胞の韓国語教育のために開発したものとして、使われていた。そのテキストの中には、韓国と現在の定住国の文化の対比、伝統遊び、韓国の礼儀作法、昔話などの内容が含まれ、韓国の文化を伝えていた。そのような内容は言語教育の中で子どもが違和感なく韓国文化の受け入れ、言語教育と文化継承を相互に促す効果が期待できる。

このように週末学校では、上海での朝鮮族の次世代の状況に合わせて、「漢民族の子ども」を「我々の子ども」へと養成することに積極的に対応した。つまり、上海での次世代がホスト社会に同化されず、漢民族と異なるエスニック・アイデンティティを確立する目的がある。しかも、上海では伝統的朝鮮族コミュニティとは違い、北朝鮮の言葉を基盤とした朝鮮語ではなく、韓国語教育を上海での朝鮮族アイデンティティ構築のための道具として利用しようとしていた。

3.2 教える側における民族文化の教育と認識

ある生徒が世界地図を教室に持ってきて、「先生、地図で見れば、中国はこんなに大きく、韓国はこんなに小さいのに、われわれはなぜ韓国語を習わなければならないのですか」と言ったのを聞いたことがある、と教員が言った。子どもにとって、朝鮮族の民族地区ではなくホスト社会の上海で民族語を習う意義については、抵抗感というよりも漠然としたイメージしかないという意見が多かった。ホスト社会で民族語を習得する理由は、子どもだけでなく、大人にとっても答えにくいことである。そのため、ホスト社会での民族教育を推進するには民族語および民族文化についてどのように認識するかが重要となってくる。

以下では、校長がどのように民族語および民族文化継承の正当性と必要性について解説し、また、現場の教員がどのように民族教育を実施しているかを、3人の教員インタビューを通して、考察する。

校長は民族語及び文化継承の必要性について以下のように述べた。

第一には、われわれの民族のアイデンティティを保つためです。民族語の喪失

は民族の伝統文化の断絶を意味し、民族の文化を喪失することになります。第二には、われわれの民族の団体及び多数の構成員などのグローバル競争力強化のためです。中国と韓国とのビジネスの中で、民族語ができる朝鮮族は非常に有利です。第三は、朝鮮族の家庭の質を高めるためです。例えば、家族 3 世代で、民族語だけを話している祖父母、民族語と中国語を混ぜて話している親世代、中国語だけ話せる次世代の間では、共同体としての民族的感情のコミュニケーションがうまくできず、葛藤の原因にもなりそうです。第四は、朝鮮族の家庭の経済上、教育の投資の利益を最大化するためです。朝鮮族の子女が民族語を習うのは、ほかの外国語を習うのより容易です。家族での朝鮮族の文化の中で、家族の日常会話の中で、民族語をよく聞くので、聞き取りの能力が、他民族が韓国語を習うより高い傾向が著しいです。また朝鮮族の子女は民族語を発音しやすいです。［朴昌根　2015：228－232］（筆者による韓国語原文訳）

校長は民族語教育を朝鮮族の共同体を維持する紐帯であり、中核としてとらえていた。また、次世代に朝鮮族のアイデンティティを確認させる重要な手段としても認識している。上海での朝鮮族のアイデンティティの維持は、民族語教育の最も重要な理由である。しかし、唯一の理由ではなかった。ホスト社会で、義務教育ではない民族語教育を推進するためには、その民族語教育の意味合いと位置づけが重要である。特に校長は民族教育の重要な教育者として、上海の朝鮮族社会にみられる「民族語無用論」、および民族語教育の必要性について、解説を行っていた。

なお、上海での民族語教育は伝統的コミュニティにおける義務教育の民族語教育と比べて考える場合、上海の朝鮮族コミュニティの形成と維持との関係も考慮に入れる必要がある。前に述べたように、上海の朝鮮族コミュニティの形成は上海での韓国系企業および本土韓国とのつながりが大きな要因であった。そのため校長は、上海での朝鮮族コミュニティの維持のためには、本土韓国と密接な関係がある民族語教育を行う必要性を強調した。つまり、朝鮮族社会と韓国社会のビジネス関係がある中で、民族語教育は上海の朝鮮族社会で戦略的に行われているのであり、このことはマイノリティである朝鮮族が韓国本土の力を借りて、中国での生存力や競争力を高めているという視点からとらえることができる。言い換えれば、上海での多言語教育の実施と、朝鮮族の家庭内における民族語の継承は、民族語の実利性が高いことを強調し、戦略的に考えて行われている。

朴校長は以上のように、朝鮮族社会を俯瞰するマクロな視点から、民族語教育の必要性について解説しているが、教育現場では二人の教員のインタビューから、民族語教育を行う上での実際的な問題が出てきた。

方教授は延辺地区の大学で芸術系教育の責任者を務め、定年退職後、上海に定住した。朝鮮族の民族芸術について上海だけではなく朝鮮族社会でも詳しい人材として、週末学校から就任を要請された教授である。週末学校では学校での教授内容を作成および改革するという重要な役割を担い、どのような内容を、どのように伝えるのが効果的かを研究する教員である。方教授は以下のように述べている。

方教授の話：

「民族語の文字を知ることと話すことは人の二つの足と同じです。左足と右足がバランスをとることは大事だと思います。子どもは文字は勉強し読めるが、朝鮮語で話しません。話す能力を鍛えるために、最初は朝鮮族の昔話、ことわざなどの内容で劇を作って、子どもに演じさせました。結局、子どもたちにとっては言葉が難しいというより、その内容の理解及び昔話の中での感情を理解する方が難しかったです。その時の演劇の内容は「朝鮮文字を作った人は世宗大王である」という歴史についてでしたが、子どもにとっては理解しにくかったです。比較的中国のことわざを内容とした方が理解しやすかったです。それで、そのような内容の朝鮮族の演劇より、最初は朝鮮族の伝統の小鼓で打拍子をとりながら、民族語で自己紹介をする練習をさせました。子どもが楽しさ、面白さを感じながら遊びの中で民族語を言えるようにします。その後どんどん難しい内容まで、演劇で昔話やことわざ等の内容を深めるつもりです。」

方教授は、上海で民族語と接触する環境が少ない中、子どもの言語教育のうち、話す能力に注目していた。週末学校では、テキストを通して文字は分かるようにはなるが、民族語をしゃべるチャンスがない上海で話す能力を伸ばすのは、難しいからである。上海では民族文化への接触も少ないため、方教授は昔話、ことわざ、劇を通して、民族語能力と民族文化への接触を意図的に増やす教授内容を作った。また、その演劇の内容が朝鮮民族の歴史に関する人物、ことわざなどが主であることで、子どもに朝鮮族のルーツに関しての理解を深めさせた。

しかし、中国の統合教育を受けた子どもは中国の歴史を学び、朝鮮半島つまり、韓国の歴史を学習したことがないため、子どもが韓国史の演劇のストーリーについて理解するのは難しかった。冷戦後は韓国本土と断絶した朝鮮族は、民族学校では中国の歴史を習い、それになじみ、中国の少数民族の一員としての民族文化が形成されてきた。中国で 100 年以上の歴史を持つ朝鮮族社会は、中韓国交が樹立されてから韓国社会と交流するようになったが、その期間は 20 年あまりでしかない。子どもだけではなく、上海の保護者側にとっても、韓国本土の記憶は先祖および歴史を辿っても、韓国と交流した約 20 年の記憶しかないということである。上海で生まれ、中国の統合教育をうけ、民族語もほとんど話せない子供に、韓国の歴史を教えても、すぐには受容しにくい現実も存在している。

次は、権教員が日常の生活から、子どもに民族語と民族文化継承を実践していたことを見てみる。権教員は週末学校が設立された時からいる、校長を含めた三人の教員の中の一人であり、教育計画、教授内容の設定にも幅広く参与した教員である。インタビューした時には、週末学校の状況を詳しく紹介し、貴重な現場の経験を聞かせてくれた。今は一つの学区の学区長を担当している。以下は権教員の話である。

権教員の話：

「今の世代の子どもは自分の民族語を知らなかったら、朝鮮族を知らないことと同じなので、かわいそうだと思います。われわれの子どもを週末学校に、少しでも長く通わせてほしいです。親たちはどれぐらい通ったら朝鮮語ができるかよく聞くが、保障はできません。私は生徒の親によく、3 年は通ったら、そのうちに朝鮮族の子どもになりますと勧めます。私は授業以外に、朝鮮族の日常生活と関連がある活動をよく組織しました。それはわれわれの文化の楽しさを感じさせるためです。子どもと親を一緒に参加させて、キムチ作り、韓国の海苔巻き作り、先長輩にあげる果物採り、ユンノリなどの伝統的な遊びを組織しました。春になると、親と子どもが一緒に、女性は山菜採り、男性は魚を捕って、大きな窯を野外に持ち出して、朝鮮族の料理を作りながら、その雰囲気を楽しんでいました。現在は私が組織したら、保護者も楽しみにして、子どもを連れて積極的に参加するようになりました。」

権教員は、民族語教育は語学学校での語学のように短期間で養成できるものではないと考え、週末学校に長く通うことを期待していた。上海では週末学校は、民族語及び民族文

化を習得するほぼ唯一の空間として、朝鮮族の子どもの民族教育を行う場だからである。この場を離れたり、短期間の通学では、民族語の勉強が無駄になる可能性が高いため、長期間の通学を期待した。また、その場に長くいるか、子どもが学校に長く通ううちに、朝鮮族の言語、文化についてなじみ、理解が深くなっていくと推測しているためである。

民族語教育を行うために、週末学校は様々な実践を通して、勉強を続けたい意識を培っている。活動の種類は様々ではあるが、民族の伝統文化の継承を中心にしている。詳しく言えば、伝統的食べ物づくり（キムチ）や伝統の遊び方の継承である。また、保護者側に幼い時の伝統的朝鮮族コミュニティでの生活を思い出させ、そのライフスタイルを再現する内容もある。そのため、週末学校に通う間に、さまざまな活動を組織して、子どもの朝鮮族の文化への愛着を育成し、民族アイデンティティを確立させるように導いていた。

これらの活動は保護者側にも、「週末学校に子どもを通わせると、家族ができた感じがします。子どもには兄弟ができ、私にとっては親戚ができた感じがします」（上海に親戚がない保護者の言葉）という共同体意識を生み出し、子どもへの民族語教育を一層積極的にする意識を強くさせている。またある保護者は、「両親ともいろんな活動に参加して仲良くなったら、週末学校をあきらめにくくなります。週末学校に通わせたら、週末学校でなぜ民族語を習わなければならないのかという目的が不明確だった親の中でも先生と親などの交流で、だんだん分かってきた親が多くなってきました」と話した。

保護者の民族文化を子どもに継承したいという意識は子どもに反映され、子どもにも積極的に親と周りの子どもに民族語でコミュニケーションしようという意欲が生み出されて、民族語教育および文化継承に肯定的意識を生み出す効果があった。つまり、さまざまな活動の実践は、共同体意識を生み、民族語教育について、肯定的意識を生み出すためである。

それ以外に、民族語は違う意義も持っていると権教員は話した。

権教員の話の続き：

「私は朝鮮語を習うのは我々の子どもにとっていいことだと思います。学生の中で、高校 3 年生の学生が来て、朝鮮語を習いたいという学生が一人いました。普通は小学生が多く、中学生も学業が忙しくて、少ないですが、高校生はもっと珍しいことでした。その理由について聞いたら、成績がよくないので、大学の入学試験に落ちる可能性が高いと思って、韓国に留学したほうがいいかなあと思っていたそう

です。その学生はまた大学に受かったとしても、あんまりいい大学に入学できないので、その大学に通うより、韓国に留学したほうがいいという事例がありました。この事例を私はよく宣伝しているが、我々朝鮮族の子どもにとって、例えば中国での競争で落ちたとしたら、韓国も一つの道になります。」

ここでは民族語教育における、クリフォード・ギアツにおける言葉で言えば、「原初的愛着」の側面だけではなく、言語能力の実利性にも注目してきた。朝鮮族はホスト社会の中でマイノリティとして、弱者という自覚を持ち、進路が限られていることが普通である環境にあるが、権教員は、民族語教育を朝鮮族社会の一つの進路として、戦略的かつ肯定的に考えていた。つまり、中国と韓国本土のどちらかへの執着というより、個人的に有利な方向に向かうためということである。民族語教育を文化資本として、中国での韓国系企業への就職や韓国への留学に限らない進路の可能性を広げるということで、民族語教育の意義を主張したのである。

以上のように、教育者は「民族語無用論」がある背景において、民族語教育の必要性と正当性について解説及び強調をした。朝鮮族コミュニティの維持のために、ホスト社会に同化されず、民族語教育を行っていることが分かった。民族語教育を実施するために、テキスト通りに教える以外に一層重要なのは、民族語教育を保護者側も子ども側も受けたい、続けたいという意識を培うために、週末学校の教育者が多様な教育方式を採用していることである。

また、民族語教育は朝鮮族社会の維持のためだけでなく、上海の朝鮮族コミュニティのホスト社会での競争力を高めるために、戦略的に利用されている。韓国との貿易関係の過去の経験、及び韓国への留学などにより、朝鮮族にとって、もう一つの進路が増えることにつながるため、民族語教育の実利性が強調されているといえる。

3.3 民族文化の継承についての保護者側の認識

子どもに民族語及び民族文化を継承させる教育の中で、教育者は重要な役割を果たしているが、保護者も重要な存在である。保護者は上海への移動と生活での経験により、次世代に民族語を継承する必要性を判断している。

インタビュー調査の結果からみれば、民族文化についての意識の強弱により、保護者の

認識は三種類に分類される。「民族語無用論」、「民族語は勉強しないより、少しは勉強するのがよいが、うまく話せるようになるとまでは期待しない」、「朝鮮族として、我々の子どもはできることが当たり前である」という意見である。多少理由の違いはあるが、概ね以上の 3 種類にまとめられる。

「民族語無用論」を持っていると思われる保護者がなぜ子どもを週末学校に通わせているのかという疑問があるかもしれないが、「民族語無用論」と「民族語を勉強させるのは当たり前」という対立する意見は多くの朝鮮族の家庭の中に現れている。つまり家庭の中で、片方の親が民族語教育に賛成で、もう片方の親が反対ということも少なくないのである。

次に挙げるのは李さんの家庭の事例である。李さんは母親で、積極的に週末学校に通わせることを主張していたが、夫が民族語教育はいらないということで、子どもを週末学校に通わせることに反対した。子どもは小学 2 年生の 10 歳の女の子で、週末学校に 2 年通わせた。

李さんの話：

「私は朝鮮族なので、私の子どもも当然民族語を知るべきだと思います。実は最初私の夫は子どもを週末学校に通わせるのに反対しました。我々は延辺人[38]なので、大学を卒業しても、中国語が外国語みたいでした。特に上海に来てから、われわれは朝鮮族として、言語の不便さを強く感じました。韓国系企業で仕事をしても、漢族の同僚が多いし、生活でも中国語をうまく使うことに苦労していました。そのため、中国語がうまくできないことで苦労したことは子どもに継続させたくないと夫がしょっちゅう言いました。われわれは中国で生活するのだから、中国語がうまく話せたら十分。また、韓国でも生活していないので、民族語を習う必要がないと夫が反対しました。」

李さんの夫は、民族語を継承する必要がないという考え方を持っている朝鮮族である。それは、彼の経験と深くつながっていた。延辺の出身として、中国語より朝鮮語を中心とした空間から、朝鮮語より中国語が主な空間の上海へ移動したことで、苦労を経験した。

[38] 延辺人：中国朝鮮族の少数民族地区つまり延辺朝鮮族自治州の出身の人々。

つまり、上海に来たからこそ、李さんの夫には「中国で生活するための言語」ということが意識され、朝鮮語では不利という意識が生まれてきた。その危機感は民族語教育の否定につながった。子どもには自分と同じ経験を継承させたくなかったのである。また、民族語の実用性は上海では低く、韓国こそ民族語を使用するエスニック空間として考えられていた。子どもには上海及び中国での定住を望み、民族語は韓国での生活がない限り習う必要がないと考えていた。

このように、李さんの夫は、ホスト社会での不利な経験から、民族語教育と中国語教育は対立関係であると理解し、子どもに民族語を継承させたくないと考えていた。一方、李さんは夫とは民族語教育についての見方が違い、積極的に子供に勉強させたいと考えていた。

李さんの話の続き：

「われわれは朝鮮族として、もともと民族語ができて、漢族より一つプラスになることを持っている。民族語と中国語の中で、一つを拾って一つを捨てるのは賢くないと思います。われわれの世代では、 民族語ができることは韓国系企業へ就職しやすい点は役に立ちました。子どもの時代は韓国の経済がどうなるかわからないですが、民族語を教わるのは当たり前だと思います。週末学校に通って、文字を知ることで、自分で韓国の民族語文字の本を読めるので、子どもも楽しんでいます。今年は韓国希望図書館（上海の韓国人の図書館）で開かれた作文大会で一等賞をもらいました。私は今年の夏休みに、子どもを韓国に連れて行って、韓国の歴史の遺跡、礼儀を見学させたいです。最初主人は週末学校に子どもを通わせることに文句を言ったけれども、週末学校に 2 年間通わせて、子どもがわれわれと朝鮮族としての会話ができるという変化などをみて、よく通わせたと私を褒めました。」

李さんは子どもに民族語を継承する必要性があるという考えを持っている。夫と違って、民族語教育は不利な要素ではなく、積極的な方向に考えていた。李さんの経験から見れば、民族語は上海への移動、韓国系企業への就職で有利な文化資本である。そのため、李さんは自分が受けた民族語教育について肯定的に考え、それを子どもに継承しようとしていた。また、李さんは子どもの世代については、上海で同化されず、エスニック・アイデンティティを保ち、家庭の中のコミュニケーションを維持することを期待していた。なお、民族

語継承と韓国系企業への就職及び韓国の経済との関係には期待していなかった。

また、上海の子どもの民族語継承は週末学校の他に、韓国の教育システムを利用して実践しようとしていた。李さんの夫も子どもの変化を見て朝鮮族らしい家庭が維持されることから、支持するようになった。李さんの夫は、子どもに韓国での生活でなければ民族語の継承は必要ではないと思っているが、韓国語や韓国の文化を借りた朝鮮族アイデンティティの維持には反対していなかった。

李さんの家族のように、次世代の民族語教育についての意見が鮮明に違う家庭の他に、中間的な意見もあった。以下は朴さんのインタビューである。

朴さんの話：

「私の子どもは週末学校に通い始めて 2 年目です。週末学校に通わせることで、民族語能力がどれぐらい高くなるかということは望んでないです。週末学校で習っておいたら、大人になって忘れても、韓国に行くと、短期間でできるようになります。私の子どもが週末学校に通って起こった一番大きい変化についてですが、昔、他の子どもの前で朝鮮族の名前で呼ばれたら嫌なので、中国の名前で呼ばれたいと言ったことがあります。週末学校に通わせて、朝鮮族の子どもと遊び、朝鮮族の雰囲気の活動に参加したら、楽しさを感じて、今は週末学校に積極的に通っています。」

朴さんは、子どもに民族語を継承する必要はあると思っている。朝鮮族の家庭で育てられた自分の子どもが、朝鮮族の文化資本を継承し、週末学校で民族語の文字の基礎ぐらいは学ぶべきと考えていた。週末学校には民族語能力の上達というより、子どもが朝鮮族文化になじみ、朝鮮族の子どもの友人関係を築き、朝鮮族のエスニック・アイデンティティを確認させる場であることを求めていた。朴さんはもっと体系的な民族語の継承は週末学校よりも韓国に期待し、韓国の存在が、子どもへの民族語継承ができる保証だと思っていた。

以上のように、子どもが民族語を継承する必要性及び、子どもの民族語能力の達成程度について、保護者の意見はさまざまである。保護者の民族語能力は韓国系企業への就職と関連があるが、子どもの世代には、韓国系企業及び韓国への就職に民族語を役立てること

は期待されていなかった。保護者は韓国語を朝鮮族として子どもを養成する道具としてとらえる一方、週末学校の役割以外に、韓国を民族語教育及び文化継承の空間と考えていた。

4. 民族文化の継承と朝鮮語から韓国語への移行

朝鮮族社会にとって、韓国との活発な交流は朝鮮族の文化と、韓国語及び韓国文化の境界を曖昧にし、後者を朝鮮族文化に内在化させる効果をもたらした。その結果、朝鮮族の民族語の標準語は朝鮮語から韓国語へ移行した。それは、単純な言語の変化のみならず、中国と北朝鮮、韓国との関係の中で、起こった変化である。

朝鮮語は、北朝鮮のピョンヤン語をもとに、中国という空間で中国語化現象が進み、中国ならではの独特の言語として形成された。朝鮮語は民族政策の重要な構成部分として扱われ、中華人民共和国の成立から改革開放に至るまでの期間、朝鮮語規範化基準は 4 回にわたって改定された。1963 年 6 月 28 日、周恩来が吉林省を視察した際、「中国の朝鮮語は朝鮮人民にもわかるピョンヤンの標準語に従って文字を書き言葉にしなくはならない」という指示を出したことで、中国と同じ共産主義イデオロギーを持つ北朝鮮のピョンヤン語が、朝鮮語の標準語の基盤になった。一方、中国社会の激しい移動により、朝鮮族が漢族と混住し、朝鮮語の中国語化現象[39]が現れた。

なお、朝鮮族社会の韓国文化との接触後、朝鮮族の韓国文化への憧れによって、朝鮮語も積極的に変容した。鄭は「1986 年のソウル・アジア競技大会と、1988 年のソウル・オリンピック大会に当時国交の無かった中国が参加したのを契機に両国関係は強化され、また中国でも中継された両大会のテレビ映像は中国朝鮮族に経済成長する「豊かな韓国」の存在を初めて認識させた」［鄭雅英 2008：79］と述べた。その時期から朝鮮族は韓国の文化に目を向け、韓国の文化について憧れるようになった。その上、90 年代の半ばには、中国の中央テレビ局による韓国ドラマの放送により、「韓流」が中国で流行し始めた。それは、朝鮮族社会にとって、より進んでいるとされた韓国の文化及び韓国語について積極的に習う時期でもあった。

無論、朝鮮族の標準語が朝鮮語から韓国語へ移行したことは、決して朝鮮族の憧れのみによるものではない。また、朝鮮語と韓国語の間に序列が生じ、そこには韓国と北朝鮮の力関係が投影されてきた。それは、中国の大学で朝鮮語専攻よりも、韓国語専攻が増設さ

39　中国語化現象：漢語を音読みした朝鮮語の単語の大量の使用

れるようになったことからも分かる。1945 年に、北京大学で最初に設立された朝鮮語専門では、北朝鮮のピョンヤン語を標準とした朝鮮語を専門とした。その後、1949 年に延辺大学で朝鮮言語文学系の専科が設立されたが、1992 年までに 7 つの大学にしか朝鮮語専門が作られなかった。一方、1992 年の中韓国交樹立を契機として、韓国語の需要が一層高まってきた。そのため、中国の大学では韓国語学科が 80 以上も増設されるのみならず、最初に朝鮮語専門を設立した北京大学では、2009 年に韓国語学部が独立した。

数年間の中国の大学での韓国語人材の養成、また中韓の活発な交流で、中国人学生の韓国への留学と韓国人留学生の中国への留学などにより、韓国語人材が多数蓄積されるようになった。そのため、在中韓国系企業での競争の中で、朝鮮語を話す朝鮮族は韓国語を話す漢民族と比べて、大きく有利ではなかった。このように、中国側のみではなく、韓国側でも言語による序列化現象が進行していた。

また、朝鮮語と韓国語の序列化には言語自体のみならず、朝鮮族と韓国人との、同一民族内のヒエラルキーが潜んでいた。韓国へ帰還した朝鮮族について、鄭は「1990 年代になって、韓国の中小規模の製造業企業や建設業では恒常的な労働力不足に直面することになり、韓国に来訪する外国人を低コストの労働者として利用したいという要求が強まった」［鄭雅英 2008：81］と述べ、主に出稼ぎ労働者が大多数であったことを指摘している。そのような現象がみられたのは韓国だけではない。日本へ移動した朝鮮族が韓国系企業で経験する民族関係を、権香淑は、「資本主義世界経済が低賃金で劣悪な労働条件となる不安定な下層労働を、不断に創出するプロセスそのものとして読み取れると同時に、韓国人と朝鮮族間における同一民族内におけるエスニック間の序列化・階層化として位置付けられる」［権香淑 2008：310］と指摘している。

なお、韓国語の実利性（経済的な）は朝鮮語より高いことは明らかである。特に、グローバル・シティの上海では経済と文化活動などにより、韓国語教育の実利性が拡大した。例えば、上海には「世界韓人貿易協会上海」などの協会の設立により、世界のコリアンのネットワークが確立されたという側面がある。その協会で交流するのに使用される言語が韓国語であり、韓国にとどまらず、世界のコリアンの経済的情報、ネットワークを共有し、視野を広がることが可能になった。そのため、次世代への韓国語教育は、朝鮮族の進路の選択肢を増やし、上海の朝鮮族コミュニティの競争力を高めるという目的を持つ。

また、朝鮮族の日常的な移動により、延辺のコミュニティは解体しつつあり、そこでの民族文化継承の役割はますます小さくなっている。一方、上海から韓国のソウルまで、飛

行機で 2 時間の距離で、毎日 36 便が通航する便利な時代である。上海と韓国との交通、情報のグローバル化により、上海朝鮮族は、韓国を外国とは思わず、次世代に文化を継承する空間として考えられるようになった。つまり、上海の朝鮮族コミュニティにとって、韓国は民族集団内部の文化や起源であり、韓国語は朝鮮族の文化的アイデンティティを養成する道具として使われている。

まとめてみると、上海の朝鮮族コミュニティの形成及び維持について、韓国語は多面的な役を担っている。次世代への韓国語教育の実施は上海朝鮮族コミュニティの過去、現在、将来性を考慮した合理的な選択とも言える。

5. おわりに

本章では上海における華東朝鮮族週末学校で文化継承の一環として行われる言語教育に着目し、朝鮮族のコミュニティと次世代への文化継承の様態を分析した。以下では、本章で得られた知見をまとめ、考察を加えたい。

朝鮮族が朝鮮半島からの移住民として、中国でエスニック・アイデンティティを保ち、安全性が高い再移動を行えることにも、民族語教育の役割は明らかである。上海では、延辺における北朝鮮のピョンヤン語を標準語とした朝鮮語による民族教育とは異なり、朝鮮族社会と韓国人社会が共同でエスニック空間を形成し、朝鮮族コミュニティの形成と維持は韓国語教育に大きく関わっている。また、上海における朝鮮族コミュニティは韓国語教育を通して、グローバル・シティならでの朝鮮族のアイデンティティの構築を図っている。そのため、次世代への韓国語教育は、朝鮮族の文化的アイデンティティを養成するのに道具として使われており、上海の朝鮮族コミュニティが戦略的に行っていることである。

2015 年 5 月 7 日、東北亜新聞に、上海の朝鮮族コミュニティに関して、以下のような記事が載た。「中国上海市に 12 年制正規朝鮮族学校の設立を促進―上海東北経済文化発展促進会　延辺事業部、準備懇談会が開かれる」[40]とある。この記事によれば、上海で朝鮮族の全日制学校を建てる計画が 2015 年から立てられているという。その後、2017 年 6 月 27 日、黒竜江省新聞に、「上海朝鮮族学校の設立、これ以上先送りすることはできない神聖な民族教育事業」[41]というタイトルで以下のような内容の記事が掲載された。2 年

40　「中国上海市に 12 年制正規朝鮮族学校設立促進―上海東北経済文化発展促進会　延辺事業部、準備懇談会開催―」http://www.dbanews.com/news/articleView.html?idxno=18872（アクセス日：2016/6/30）

41　「上海朝鮮族学校設立、もう延長できない民族教育事業」

間の努力でその学校は計画だけにとどまらず、全日制朝鮮族学校という上海仁成朝漢双語学校が設立できる見込みがある。この学校の設立は、週一回の「ウリマル」の授業の限界性が感じられたためである。そのため、上海朝鮮族の民族教育の健康な発展を伴うため、上海で小学校（6 年）、中学校（3 年）、高校（3 年）の 12 年制の学校を設立することに、大きな努力が払われている。学生の規模は 1000 名、朝鮮族学生が 500 名、現地漢民族 250 名、国際部の韓国人学生 250 名を募集することを予測している。この学校が設立できれば、上海朝鮮族の子どもは民族語を体系的に習えるし、韓国語に関心がある漢族学生も本格的な韓国語を習えるし、上海で定住している韓国人の子どもの教育問題も解決できる、と報道された。

以上のように、上海の朝鮮族コミュニティは中国で規模が最も大きい週末学校を運営し、また、沿海都市および大都市で初めての全日制朝鮮族学校を設立することに努力していた。

これは、上海の朝鮮族コミュニティは朝鮮族が漢族社会に同化されず、朝鮮族コミュニティが維持され、文化と言語が継承されることに力を入れていることを示す。その一方、上海での朝鮮族コミュニティはまだ成長途上である。政治、経済的に弱い存在ではあるが、変化、妥協、創新の中で、あらゆる方法を尽くしながら、上海での朝鮮族としてのアイデンティティを維持しようとすることが予測される。

---

http://news.moyiza.com/589170/（アクセス日：2017/6/30）

終章

これまで、上海における朝鮮族の移動を数章にわたり検討してきた。本稿では移動地の上海を中国国内の一般的な大都市として扱わず、グローバル・シティという概念で捉え、ディアスポラ集団である朝鮮族のグローバル・シティへの移動という視点で検討した。さらに、朝鮮族の移動を固定された場から捉えるのではなく、「移動のなかに住まう」という視点で分析し、朝鮮族の移動及び移動論に対していかなる理論的貢献をなし得るかについて考察した。以下では、得られた知見として次の三点について述べる。

一点目は、朝鮮族の上海への移動が、国内移動と海外移動という境界を乗り越える状況において、戸籍と国籍の関係を明確にしたことである。

ディアスポラを経験した朝鮮族にとって、国内移動と海外移動との境界は明確ではなく、中国の大都市はもちろん日本や韓国も移動先の選択肢の一つである。国内移動と海外移動が可能である中で、高学歴者である朝鮮族の上海への移動は、社会的地位の上昇と自己実現のために戦略的に上海という都市を選んだ結果である。そのことは、朝鮮族の個人的な考えだけではなく、上海における朝鮮族の協会の理念と活動からも見て取れる。協会は異郷での親睦目的にとどまらず、上海への社会貢献を通して、朝鮮族という存在をホスト社会に認知させ、主流社会へ編入することを目指していた。

一般のマジョリティの高学歴者が階層を上昇する状況とは違い、ディアスポラを経験した朝鮮族は、故国の韓国との接触及び様々な移動の経験の中で、中国人というアイデンティティを確立し、定住国で主流社会へ編入されることを望んでいる。歴史的な要因にも繋がるが、朝鮮族は 100 年前から朝鮮半島を離れ、今でも移動が続く中で、マイノリティとしての疎外感から脱出しようとする願望を抱えているのである。そのため、彼らは上海で学歴と経済力をもって階層の上昇を望み、技術、学術、経済の分野からホスト社会へ接近しようとしている。それは、そもそもマイノリティである朝鮮族には政治の分野で活躍する人が少ないこともあるが、北朝鮮や韓国という故国があるディアスポラとして、政治分野で地位の上昇を目指すには限界があるからでもある。

その目標を実現するためには、朝鮮族が「在外同胞」とされる故国の韓国でもなく、「外国人」とされる日本でもなく、中国本国の上海でなければならないと認識している。定住国の中国では、朝鮮族は中華人民共和国の成立と同時に、中国の国籍を獲得した結果、3、4 世に至る蓄積の中で、主流社会への編入に努め、それを実現する可能性が高いこととも証明してきた。ここから、朝鮮族にとって、国内と国外への移動の境界線が無意味だから

といって、国籍が機能していないということではないことが分かる。

なお、中国の国籍を持っていても、朝鮮族が中国の東北出身として、グローバル・シティの上海へ移動と定住を行うには、戸籍というシティズンシップの問題が関わっている。戸籍を獲得するためには、高学歴、経済資本、納税期間などで補う必要があり、ある意味では韓国や日本で永住権を取得することよりも困難である。そのため、朝鮮族の移動の目的地の選定において、上海の戸籍は海外へ移住する場合の国籍と同じく、あるいはそれ以上に大きな壁となる。「自国」での社会的地位の上昇も、「外国」での社会的地位の上昇も、国籍の存在に大きく左右されるのは言うまでもない。

それ以外にも、ホスト社会では少数民族はマイノリティとして、主流社会へ進出するには言語・文化の「壁」がある。朝鮮族も少数民族として、そのような「壁」に直面しているが、一方、上海ではディアスポラとして、その言語・文化資本を利用できるメリットも著しい。上海には、グローバル・シティとして、多文化・多民族・多国家の人々の専門性を強調する環境があるため、朝鮮族の周辺化された少数民族という属性が薄れるからである。また、上海の経済構造は同じアジアである韓国のソウルや日本の東京とトランスナショナル空間を形成しているため、朝鮮族の言語・文化資本という強みを発揮しやすい環境も際立っている。このような上海ならではの環境の中で、ディアスポラの朝鮮族は「自国」と「外国」との隙間の中で、利益を最大化しながら、生きていた。

しかし、高学歴者の朝鮮族が上海へ移動するという選択には、積極的な意味だけではなく、やむを得ず移動するという面もある。朝鮮族は物理的には国内外へ移動できる可能性を持つが、実はどこでも、主流社会への接近に高い「壁」があるディアスポラの運命と無縁ではない。つまり、定住が前提である国民とは違い、朝鮮族は中韓日いずれの国でも移住民であり、そのどれもがはっきりした「定住すべき場」「在るべき場」ではない、「移動のなかに住まう」人々であるからである。もう一歩踏み込むならば、朝鮮族は近代から幾度となく移動を繰り返しており、今もその移動は進行形であって、「戻るべき場」と結びつけられる故郷を失われったた人々とも言えるだろう。

故郷を失われた朝鮮族が選んだ場が、国内外の境界が曖昧なグローバル・シティである。グローバル・シティでは、中韓日との関係が複雑に絡み合う環境の中で、エスニック・コミュニティを再建しやすい環境が整っているからである。その一方、グローバル・シティはそもそも移民及びディアスポラの集中地であるため、朝鮮族の移動による孤独感や疎外感が弱まり、故郷を意識しなくなりつつある面もある。

このように、高学歴者の朝鮮族の上海への移動は、単に地方の出稼ぎ者が国内の大都市へ移動するという性質の国内移動ではなく、ディアスポラ集団がグローバル・シティへ移動することであると捉えられる。そこで見えてきたのは、彼らの上海への移動は国内移動と海外移動が可能である条件の中で、移動先として「自国」の上海を選択したが、そこで国境を越えた韓国と日本という「外国」との関係の中で生きていることである。既存の移民・移動論では、人の移動はナショナルな枠組の中で規定されてきたが、朝鮮族の上海への移動と生き方を通して、国内移動と海外移動の枠を越えた移動の形をとっているという知見が得られた。

二点目は、朝鮮族の上海への移動は、単なる個人的な移動ではなく、安全性が高いエスニック・コミュニティの移動であるという点である。

朝鮮半島からの移住民である朝鮮族は、中国で延辺民族自治州というエスニック・コミュニティで生活してきた。朝鮮族の延辺以外にも、他の少数民族も中国の民族政策によって、チベット、新疆、内モンゴルなどの民族自治州というエスニック・コミュニティが作られてきた。つまり、中国では政府の支援によって、少数民族が民族自治州でエスニック空間を作り上げることは当然であった。

しかし、更なる移動の中でのエスニック・コミュニティの再建の有無の面では、朝鮮族は他の少数民族や地方民が上海への移動した場合とは確実に違う。それは、他の少数民族と地方民は、個人的な就職先探しなどの理由で移動することが大半で、国内移動先で新たなコミュニティを構築することはまずない。一方、朝鮮族は延辺以外の上海のみならず、国内外で様々な形[42]で積極的にエスニック・コミュニティを再建している。

従来の朝鮮族研究における国内移動の発展論では、移動先でのコミュニティの再構築を強調しているが、それらの研究は朝鮮族を中国の少数民族とみなし、故郷とみなされる延辺の崩壊を前提とした。一方、高学歴者の朝鮮族が上海への移動した場合は、延辺を「戻るべき場」と想定した一時的な移動ではない。上海でのコミュニティの再建及び主流社会への編入を求め、積極的に定住の構造を固めていた。それは、朝鮮族が少数民族であったことよりもディアスポラであったからこそ可能であった。

---

[42] 朴光星は、移動先での朝鮮族のコミュニティの特徴を以下のようにまとめた。①上海龍柏、北京望京、青島城陽、韓国のカリボンドンの「集中地―親睦団体―サイト」、②日本の「親睦団体―サイト」、③ロシア、フランスの「親睦団体」の 3 種類である。

このような違いがあるのは、定住民である少数民族は伝統的エスニック・コミュニティを故郷とみなしているのに対し、そもそも移住民である朝鮮族にとって、延辺は移動の中での一つの通過点に過ぎないからである。つまり、延辺の伝統的朝鮮族コミュニティであれ、上海で再構築されたエスニック・コミュニティであれ、朝鮮族の移動の中で形成されたコミュニティであることには変わりがない。

また、朝鮮族の上海でのコミュニティの再建からは、朝鮮族の移動は単なる個別な現象ではなく、集団的な行為であることが見られる。彼らは龍柏コリアンタウンというエスニック空間を形成し、そこで様々な協会を作っていた。その協会は単なる会員間のネットワークの拡大にとどまらず、次世代の養成に大きく力を入れている。週末学校が典型例になるが、ホスト社会で漢語化されやすい環境の中で、言語教育を通して、朝鮮族の民族文化を継承するための経営が行われている。上海でのこの形のエスニック・コミュニティは、まるで延辺での伝統的朝鮮族コミュニティの複写のように見えながら、グローバル・シティに適応するために変容した側面もみられる。

移民移動論の中では、移住民は海外への移動後、言語教育を行ったり、協会でネットワークを作るなどしてコミュニティを構築するのが一般的であるとされる。しかし、上海の朝鮮族は国内移動にも関わらず、あたかも海外からある国に移住した人々がエスニック・コミュニティを形成するかのように、朝鮮族のコミュニティを再建した。そこで重要なのが、朝鮮族は国内移動においても海外移動のように移動し、大都市への再移動が、まるでエスニック・コミュニティそのものが移動するような様相を呈することである。

伊豫谷登士翁[2014]は、「移民は、成功したがゆえに戻らず、失敗したがゆえに戻れない。」[伊豫谷登士翁 2014：15]と指摘した。高学歴者が多い朝鮮族は、上海への移動で成功した事例が他の地域へ移動した場合よりもはるかに多いと推測できるが、韓国での出稼ぎが主である、高学歴者でない朝鮮族とは同じく、戻れる故郷を持たない。川村清志[2015]は「故郷とは,本来,移動に対する定住あるいは漂泊に対する定住の象徴であったはずである。さらにその故郷の物語のなかでも家や親族は、山や海といった自然景観とともに、もっとも安定的な故郷の拠点として語られてきた。」[川村清志 2015：163]と指摘した。

しかし、朝鮮族は過去に繋がるどこかの土地に執着する故郷よりも、現実に忠実に対応した生き方で、移動先で新たにエスニックコミュニティを再建し、仮の「故郷」を作っていく形で移動してきた。玄武岩[2013]は「朝鮮族は個としての越境だけでなく空間として

の越境をとおして、トランスナショナルな市民性を体現する独特な位置を占めているからである。」[玄武岩 2013：249]と指摘した。「移動のなかに住まう」朝鮮族はまるで常に「故郷のなかに住まう」かのような、安全性を高める移動を行っている。つまり、ディアスポラを経験した朝鮮族においてコミュニティの再構築は、元々の移住地への執着心が失われたことを前提にするのではない。そもそも移動の中に住まう人々としてコミュニティそのものが移動することで、そうしたコミュニティが本来有する集団の安全性をも携帯して移動するのである。

これは、ディアスポラを経験した朝鮮族にとって、移動の中でコミュニティを作り上げた経験を更なる移動の中で生かすことで、移動が容易になったことを意味する。つまり、彼らは、エスニック・コミュニティごとの移動することで、移動の安全性を確保しながら移動を行っているといえる。従来の研究では、既存の移民移動を個人的な行為として捉えていたが、朝鮮族の上海への移動はエスニック・コミュニティの移動でもあり、本研究で朝鮮族の上海への移動を新たな視点から分析することで従来の研究の限界性を指摘できたことは大きな成果といえる。

三点目は、グローバル・シティである上海では、朝鮮族社会と韓国人社会が共存関係をなしたエスニック空間を形成していることである。

朝鮮族が移動先でコミュニティを再建できる重要な要因の一つとしては、他の少数民族と異なり、朝鮮族の所属する強い経済力を持っている民族集団、つまり韓国が隣にあることが考えられる。延辺という、中国の主流社会にも韓国にも吸収されてない閉鎖されたエスニック空間とは異なり、更なる移動先で朝鮮族が故国の韓国人と出会うことにより、エスニック空間が容易に構築された。グローバル・シティの上海では、朝鮮族社会は韓国人社会との緊密な経済関係、龍柏コリアンタウン、文化的な交渉、多様なネットワークによる情報の共有、故国とのトランスナショナル関係の中で、エスニック空間が作られている。

上海以外の国内外での移動先で、朝鮮族社会と韓国人社会がエスニック空間を形成するのは難しいことではない。朝鮮族の国内移動と海外移動はともに、言語・文化資本及びコリアンネットワークの中での移動の形をとっているからである。国内外での移動先はその国の事情により、現状は様々に異なるが、朝鮮族社会の韓国人社会への依存による不平等な関係が一般的である。韓国では言うまでもなく、中国の国内の延辺でもその関係は大きく変わらなかった。

なお、上海での朝鮮族社会と韓国人社会は最初から対等だったのではなく、関係の複雑な変容の中で、徐々に平等な立場になってきた。その最も重要な要因は、韓国資本の上海での弱体化と朝鮮族の経済力の向上によって、朝鮮族社会が韓国人社会への依存を弱めたことである。これは、上海での政治・経済環境の変化の中で、朝鮮族のが、韓国資本のみへの依存から脱し、日本など多方向的に経済的手段を転換することの重要性を認識し、積極的に対策を取った結果でもある。また、上海へ移動した初期は、朝鮮族社会であれ韓国人社会であれお互いを必要としていたが、定住期間が長くなるとともにその関係の緊密性が薄れてきたことも一要因である。

こうした経済関係の変容は、朝鮮族社会と韓国人社会との民族関係にも大きな影響を与えた。特に、韓国人社会との接触の中で、高学歴者が多い朝鮮族社会が中国人というアイデンティティが確立され、上海のホスト社会にも目を向けるようになった。そのため、グローバル・シティの中で、朝鮮族社会は韓国人が同じ民族であることを強調するのではなく、韓国を一つの資源として捉えるようになったのである。つまり、上海朝鮮族社会と韓国人社会との間の実力の差異が少なくなり、グローバル・シティの中での平等な関係が構築されるようになった。

なお、上海での協会及び団体レベルでは、朝鮮族社会と韓国人社会の「韓民族」という民族関係の交流での共存関係を強調している。そのため、上海朝鮮族社会での韓国語教育への支援、上海での文化的実践などを通して、朝鮮族社会と韓国人社会の交流は活発に行なわれている。以前は、上海は韓国資本が中国へ進出する際の重要な戦略的な都市とされたため、上海でのホスト社会で力を発揮する朝鮮族を「国家の資産」という在外同胞としてみなし、親睦目的の交流を行っているのに過ぎなかった。もちろん自国の都市部である上海に移住した朝鮮族の扱いは、韓国本土へ出稼ぎ労働者として帰還した朝鮮族が韓国での在外同胞として受ける待遇とは鮮やかな対比をなしている。

朝鮮族社会と韓国人社会が相対的に平等な関係を形成しているのは日本である。しかし、日本では朝鮮族は韓国語ができる中国人、韓国人は韓国人なりに外国人としてそれぞれ扱われ、朝鮮族と韓国人との共通のエスニック空間が形成されていない。それは、朝鮮族が中国で日本語教育を受け、留学という形で日本へ留学し、日本での適応が難しくなかったことが大きな要因と考えられる。ある意味では、国内外の境界が曖昧な上海で、韓国人も朝鮮族も外国にいるような存在として、共存関係を構築しているといえるだろう。

これらの複雑な背景の下で、上海のように朝鮮族社会と韓国人社会が平等な共存関係を

なしているエスニック空間は、国内外の移動先では珍しいケースである。故国の韓国でもなく、誇りを持って朝鮮族の文化を守ってきた延辺という伝統的朝鮮族コミュニティでもなく、「外国」のような上海でこそ、韓国社会と協力して平等な関係を築くことが可能になった。なお、彼らの平等関係は固定化された不変なものではなく、グローバル・シティの上海で、両者の立場が変化しつつある中で、関係のバランスを取っている。グローバル・シティでは、韓国や「伝統的なコミュニティ」での朝鮮族の従属的な位置にとどまらない、新たな本国と在外コリアンとの関係性が切り開かれたからである。

本稿では、「移動のなかに住まう」朝鮮族のグローバル・シティへの移動と生き方を通して、国民国家という枠組みが揺らいでいる「移民の時代」に、ナショナルな枠の中での移民研究の視点では議論されてこなかった移動のありかたを再検討しようと試みた。しかし、物理的空間としての場に拘らず、ナショナルな空間を絶対化してきた枠組みを乗り越え、今後どういうふうに移動を捉えるべきか、どういう示唆があるのか、どのような展望が開けるのかという点についての議論がまだ不十分である。その点については、今後の課題とする。

＜参考文献＞

日本語文献

青木麻衣子、2004 年、「オーストラリアにおけるエスニック・スクール」比較教育学研究第 30 号、91-108 頁。

蘭信三など、2019 年、『引揚・追放・残留』、名古屋大学出版会。

イエン・アング、2004 年、「ディアスポラを解体するーグローバル時代のグローバルな華人性を問う」『グローバリゼーションの文化政治』、テッサ・モーリス＝スズキ・吉見俊哉編、274-308 頁、平凡社。

伊豫谷登志雄、2007 年、『移動から場所を問う：現代移民研究の課題』、有信堂高文社。

伊豫谷登志雄、2013 年、『移動という経験：日本における「移民」研究の課題』、有信堂高文社。

伊豫谷登志雄・平田由美、2014 年、『「帰郷」の物語/「移動」の語り：戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』、平凡社。

石井正子ら、2019 年、『移動する人々―多様性から考えるー』、晃洋書房。

尹京媛、2011 年、「コリアンディアスポラー植民地主義と離散」『東アジアのディアスポラ』、220-243 頁、明石書店。

臼杵陽、2009 年、『ディアスポラから世界を読む』、明石書店。

大川真由子、2016 年、「帰還から故郷を問う」『《特集》帰還現象から移民研究の諸概念を問い直す』文化人類学（80-4）、534-548 頁。

川本綾、2018 年、『移民と「エスニック文化権」の社会学ー在日コリアン集住地と韓国チャイナタウンの比較分析』、明石書店。

川村清志、2015 年、「移動する身体と故郷の物語の行方ー移動によって見出された故郷と移動のなかで変容する故郷」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 199 集、143-169 頁。

柄谷理恵子、2016 年、『移動と生存ー国境を越える人々の政治学』、岩波書店。

嘉納もも、嘉本伊都子、2005 年、「トロント日系コミュニティにおけるエスニック文化継承」京都女子大学現代社会研究 8 号、109-123 頁。

金俊華、2003 年、「朝鮮族の経験と言説ー延辺朝鮮族自治州の事例を中心にー」『民族共生への道ーアジア太平洋地域のエスニシティー』79-93 頁、九州大学出版会。

金恵信、2007 年、「移住の表象：コリアン・ディアスポラのアート」国立民族学博物館調査報告 69、241-252 頁。

金英花、2014 年、「朝鮮族の国際的な移動と子どもの教育－出稼ぎの変容と留守児童の問題から見る家族生活」宇都宮大学国際学研究科博士論文。
栗田和明、2018 年、『移動と移民―複数社会を結ぶ人びとの動態』、昭和堂。
岸田由美、2016 年、「朝鮮人学校・中華学校と文化接触」『文化接触における場としてのダイナミズム』、34-52 頁、明石書店。
権艶美、2017 年、「上海朝鮮族コミュニティにおける文化・言語の継承－華東朝鮮族週末学校の事例から－」、北海道大学教育学研究院紀要、第 129 号、67-90 頁。
権艶美、2019 年、「グローバル・シティとディアスポラ・マイノリティー上海における朝鮮族を中心に－」、『朝鮮族研究』第 9 号編集委員会、28-49 頁。
権香淑、2011 年、『移動する朝鮮族：エスニック・マイノリティの自己統治』、彩流社。
権香淑、2018 年、「中国朝鮮族の移動とコミュニティ研究における理論的課題-トランスナショナルな枠組みの批判を継承に向けて」、『朝鮮族研究学会誌』第 8 号、28-53 頁。
権香淑・宮島美花、2020 年、『中国朝鮮族の移動と東アジア－元日本留学生の軌跡を辿る』、彩流社。
厳善平、2010 年、『中国農民工の調査研究―上海市・珠江デルタにおける農民工の就業・賃金・暮らし－』、晃洋書房。
玄武岩、2011 年、「コリアン・ネットワークから見るディアスポラ・メディア研究の地平」、マス・コミュニケーション研究 No.79、27-44 頁。
玄武岩、2013 年、『コリアン・ネットワークーメディア・移動の歴史と空間』、北海道大学出版会。
駒井洋、2011 年、『東アジアのディアスポラ』、明石書店。
五石敬路、2006 年、『東アジア大都市のグローバル化と二極分化』、国際書院。
五十嵐泰正、2018 年、「「商売の街」の形成と継承」『社会が現れるとき』、95-130 頁、東京大学出版会。
サスキア・サッセン、2008 年、『グローバル・シティ』、筑摩書房。
蔡春花、2012 年、「訪問就業制による朝鮮族の出国労働の変化」人間社会学研究集録、121-143 頁。
佐々木衛、2007 年、「都市移住者のネットワークー青島市中国朝鮮族の事例から」『越境する移動とコミュニティの再構築』、3-18 頁、東方書店。
澤宗則、南埜猛、2009 年、「グローバルシティ・東京におけるインド集住地の形成－東

京都江戸川区西葛西を事例に」『移民とともに変わる地域と国家』、国立民族学博物館調査報告 83、41-58 頁。
庄司博史、2010 年、「「資産としての母語」教育の展開の可能性」『ことばと社会』（移民と言語②）12 号、7-47 頁。
鈴木一代、2007 年、「国際家族における言語・文化継承」『異文化間教育特集バイカルチュラ家族-複数の文化と言語が交叉するところ』26 号、14-26 頁。
ジェラード・デランティ、2004 年、『グローバル時代のシティズンシップ』、日本経済評論社。
田嶋淳子、2010 年、『国際移住の社会学』、明石書店。
趙貴花、2012 年、「高学歴中国朝鮮族の移動―先を見つめる子育てとハイブリッド・アイデンティティ」アジア太平洋研究 No.37、47-63 頁。
趙貴花、2016 年、『移動する人びとの教育と言語－中国朝鮮族に関するエスノグラフィー』三元社。
中国朝鮮族研究会編、2006 年、『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』、アジア経済文化研究所。
高橋朋子、2013 年、「移民の母語教育」『多言語社会日本－その現状と課題』、三元社、89-105 頁。
谷富夫、2015 年、『民族関係の都市社会学―大阪猪飼野のフィールドワーク―』、ミネルヴァ書房。
塚原信行、2010 年、「母語維持をめぐる認識と実践　ラテン系コミュニティと日本社会」『ことばと社会』（移民と言語②）12 号、48-77 頁。
辻　輝之、2013 年、『引揚者の戦後』、新曜社。
椿原敦子、2018 年、『グローバル都市を生きる人々』、春風社。
鄭雅英、2008 年、「韓国の在外同胞移住労働者―中国朝鮮族労働者の受け入れ過程と現状分析」立命館国際地域研究第 26 号、77-96 頁。
鄭根埴、2013 年、「コリアン・ディアスポラの形成と再編成」『コリアン・ディアスポラと東アジア社会』、1-21 頁、京都大学学術出版会。
出羽孝行、2001 年、「中国の朝鮮族の生徒の言語と民族文化の維持」『異文化間教育』15 号、198-208 頁。
ナカミズ・エレン、2004 年、「在日ブラジル人における言語使用と言語教育」『異文化

間教育』19 号、30-41 頁。
中島和子、2005 年、「カナダの継承語教育その後－本書の解説にかえて」『カナダの継承語教育』、155-180 頁、明石書店。
南京瓊、2016 年、「朝鮮族の深圳への移動とエスニック・コミュニティの形成」立命館国際研究 29-1、June2016、131-154 頁。
南京瓊、2018 年、『第 2 のコリアン・ディアスポラ－中国朝鮮族の国内移動とコミュニティの形成』、創土社。
花井みわ、2014 年、「上海における朝鮮族の仕事・生活と民族文化継承」、新保敦子編『中国エスニック・マイノリティの家族』、151-182 頁、国際書院。
拝野寿美子、2016 年、「ブラジル人学校と文化接触」『文化接触における場としてのダイナミズム』、65-88 頁、明石書店。
朴佑、2013 年、「経済的インセンティブと「道具的民族主義」」『コリアン・ディアスポラと東アジア社会』289-306 頁、京都大学学術出版会。
藤浪海、2020 年、『沖縄ディアスポラ・ネットワーク－グローバル化のなかで邂逅を果たすウチナーンチュ』、明石書店。
広田康生、2013 年、「トランスナショナル・コミュニティ・パースペクティブの諸仮説」、専修人間科学論集　社会学編、Vol.3、No.2、71-80 頁。
広田康生、2016 年、「推移する新宿「コリア・タウン」における「場所形成」の諸相」、専修人間科学論集　社会学編、Vol.6、No.2、43－61 頁。
守屋貴司、2018 年、「外国人労働者の就労問題と改善策」『特集＝グローバル化と労働市場－マクロ・ミクロの影響』、日本労働研究雑誌 7 月号、No.696、30-39 頁。
三浦綾希子、2012 年、「フィリピン系エスニック協会の教育的役割-世代によるニーズの差異に注目して-」教育社会学研究第 90 集、191-212 頁。
宮下尚子、2007 年、『言語接触と中国朝鮮語の成立』、九州大学出版会。
宮島美花、2017 年、『中国朝鮮族のトランスナショナルな移動と生活』、国際書院。
山下清海、2019 年、『世界のチャイナタウンの形成と変容－フィールドワークから華人社会を探求する』、明石書店。
山東功、2009 年、「ブラジル日系移民社会と日本語観」『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房、145-188 頁。
吉原和田、2013 年、『現代における人の国際移動』、慶応義塾大学出版会。

羅　京洙、2007 年、「越境するコリアン―域内移動の視点から」『国際移動と社会変容』、岩波書店。

羅　京洙、2014 年、「「コリアン・ディアスポラ」に関する試論の考察―観点の「省察」と「模索」」、移民政策研究第 6 号、58-73 頁。

李雪蓮・朴紅・坂下明彦、2018 年、「韓国における労働力不足問題と外国人労働力の受入政策の展開－中国朝鮮族出稼ぎ者の就業を中心に」農経論業､Vol.72(2018)Mar.55-66 頁。

ロービン・コーエン、2012 年、『新版グローバル・ディアスポラ』、明石書店。

魯ぜウォン、2013 年、「ニューヨーク市のコリアンタウンにおける民族関係の再構築―クイーンズ区フラッシング地区を事例に」､吉原和男編､『現代における人の国際移動―アジアの中の日本―』、慶應義塾大学出版会、333-348 頁。

韓国語文献

박창근、2015 년、「화동조선족주말학교:회고와전망」、『한반도평화와통일』、인터북스출판사。

朴昌根、2015 年、「華東朝鮮族週末学校：回顧と展望」『韓半島平和と統一』『韓半島平和と統一』インスタブック出版社。＊華東朝鮮族週末学校の校長

박갑수、2008 년、「한글학교를 통한 재외동포 한국어 교육의 현황과 대책』『특집 국외한국어 교육과세종학당』새국어생활 제 18 권 제 3 호。

パクカップシュ、2008 年、「韓字学校を通した在外同胞　韓国語　教育の現況と対策」『特集　海外韓国語教育世宗学堂』新国語生活　第 18 冊　第 3 号。*ソウル大学名誉教授

최재헌 김숙진、2016 년、「중국 조선족 디아스포라의 지리적 해석: 중국 동북 3 성 조선족 이주를 중심으로」　대한지리학회지 제 51 권 제 1 호 、167-184 쪽。

チェゼヒョン　キムシュクジン、2016 年、「中国朝鮮族ディアスポラの地理的解釈：中国東北 3 省朝鮮族移住を中心として」大韓地理学会誌　第 51 冊第 1 号、167-184 頁。

박경용、2015 년、「중국칭다오조선족의정착애로와딜레마」『로컬리티인문학』、211-262 쪽。

パクキョンヨン、2015 年、「中国青島朝鮮族の定着アローとジレンマ」『ローカル一人文学』、357-374 頁。

박광성、2010 년、「초국적인　인구이동과　중국조선족의　글로벌네트워크」『재외한인연구』제 21 호、357-374 쪽。

朴光星、2010 年、「超国家的人口移動と中国朝鮮族のグローバルネットワーク」『在外韓人研究』第 21 号、357-374 頁。

中国語文献

朴光星、2014 年、「“压縮型城市化”下的民族共同体“離散危機”與“重構運動”-基于対朝鮮族城市化進程的考察」『中央民族大学学報』41 卷、3 期。

朴光星、2014 年、「「圧縮型都市化」の背景で民族共同体「離散危機」と「再構築運動」-朝鮮族の都市化進行の考察を中心に」、『中央民族大学学報』41 巻、3 期。

上海市第六次全国人口普查领导小组办公室、2012 年、上海市统计局编 、上海市 2010 年人口普查资料合计 4 册、中国统计出版社。

参考サイト

華東朝鮮族週末学校　http://www.swmbt.com/

在外同胞財団　http://www.okf.or.kr/portal/OkfMainView.do

上海市統計局　http://www.stats-sh.gov.cn/